北辰會雜誌

第四拾參號

明治三十九年三月二十五日發行

（非賣品）

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第四十三號目次

論說

○直覺神命論……高木孤雲
○趣味を論ず……小笠原秋水
○敗者論……みぞり生

雜錄

○文學の社會に及ぼす影響……①△生
○人口の發展如何 附神之意義……飯盛空峰
○白塵錄一節……みぞり生
○若草（其の一）……み、

文苑

○歌が濱……斗牛
○さすらへば……萍水
○待春樓記……村上函峰
○胡蝶のねどろさ……枯桑
○玉藻……萍水
○まぼろし……秋水
○高鳴……水衣
○漢詩……露波

和歌

○白髑髏……潮歌
○冬枯……伶人
○新年河、雜詠……其月
○木曾紫光君が追悼の歌とて五首……空峰
○ゆくへ……水衣
○曙會詠草……

俳句

○紫紙草（春の卷）……紫雲
○七香車……紅嵐月
○若草集……白芙蓉
○木がらし……告天子
○四高俳句會吟草（冬の卷）……

雜報

○野人語○漫語……

附錄

○越の旅……某
○窯業……山田喜久良
○劔道大會記事○柔道部報○廣告……

北辰會雜誌第四十三號

論說

直覺神命論

高木孤雲

仰げは長へに蒼々、俯すれば永く漠々若し夫れ四顧沈々夜氣森然獨り乾坤寥廓の間に立ちて錯落燦爛たる滿天の星を望む覺えず此天地の大景にうたれて瞿然として畏れ肅然として愼まん、此の玄妙不可思議なる天と地殆んど魔術否な尙ほ一層遙かに奇なる誰か此を目して死物と云ふ、野の百合の花にも神秘の包まれたるを感せざらんや。

何億何千無量の星の一なる地球の何億何千分の一を已れの天地として得たる者よ。過去永刼より未來永遠に吾人及び森羅万象皆其上に浮んで幻の如く幽靈の如く忽ちにして顯はれ忽ちにして滅する此無限にして無形の靜に目して飛ぶが如く走れる時間と稱する者の一幻か一瞬を上古中近世と分ち只だ一の足跡を人生の歷史として殘し得々たる者よ。已れの植ゑし樹と共に生き伸ぶる能はざる一花片の落つるを止め能はざる、天地に復たとなき、再びと會する能はざる我が愛する人の生命を一分一秒も延ばし能はざる斯くも無力なる斯くも少さき吾等斯くても天地の奥に潛める

神の力を（浩然の氣か、正氣が、大自覺、佛か、名に偏するな）認め能はざるか。

大觀せば人生五十一閃電一石火、天地より比す岩に結べる泡か蜉蝣の朝夕と何の異なる所かある、然かも人は此狹き短かき間に立ちて神に操られつゝあるをも知らで自ら万物の靈長と稱して得々たり、恰かも小兒の自ら物を運べりと思へるが如く、其の後ろに母の之を支ふるをも知らずして、勿論我等は自覺を有せり自由なる意志を有せり、我等は食せんと欲して口に食物を取るは自覺なりされど喉下三寸通れば既に我が意志又如何ともす可らず、その消化し運般し肉にし思想にするは成さんと欲して成す能はざるに非ずや、見よ不能の二字を字書より取去れと云ひし奈翁も絶海の孤島に空しく岸打つ波の夜半の嵐に夢醒めては涙を呑んで東歐を望むのみに非ずや、淺ましや榮華を朝顏の露のひぬ間の悟りと悟らずして富貴を百年の後に續けんと欲し遑々役々名利の街に狂奔して私慾を逞しくす、知らず三寸息絶ゆれば萬事休す妻子珍寶遂に泉下に從はずして四肢五体又百姓の鋤にかゝるを。万物の靈長は一聲に叫んで曰く眞理に從へ眞理を追求せよと、彼等は各自眞理を探らんとして交々秘密の門戸を開きて入る中央に一大明鏡あり、その入り來れる者の姿を映ず、眞理の探求者はその前に佇立する事多事卽ち其姿を見て叫んで曰く「眞理此にあり」と何ぞ料らん眞理は彼等自身の姿なることを故に曰く眞理とは己が人格の反映なり國民は國法を破りて其の國民たるを得す人神命に背きて如何でか榮え得べき。素直に本能に從ひ純粹に直覺に從ふ之れ神意に非るか、一心の奥は神明に通せるを知らずや。

十九世紀の豫言者ロバートソンは曰はく

吾人の頭に來る最初の思想あり之れ最も新鮮にして純粹且つ最善なる者なりと而して其中に神性を含むこと最も多量なればなり、と。

蠶は本能に從ひ桑葉を食するのみ、しかも神は繭を造る、人飢ゆ誰か生存の念を有して食せんや只だ飢ゆ故に食せしのみ、しかも神は之を以て血にし肉にし生存せしむ、人は唯だ痩我慢あり故に生きんがために食ふと云ふ內面食はむがために生くるか、生くるか爲めに食ふか、換言せば幸福のために働けるか幸福は只だ働かさん爲めの慰安物なるか得て知らざる也されば我れ人は只だ神命に從ふのみ、其の結果の如何は置いて問はずして。

カーライルは其の英雄崇拜論、マホメッドの中に人間最高の知見、及び人生の務を述べて曰く

古來人間に取りて最高の智見とすべきは獨り神命に服すべきの最善最智最要の務と信ずるにあり微々たる腦髓の力を恃んで此大なる「神の世界」を細かに穿鑿するが如き狂妄潛上の事を止むるにあり此世にありて人の爲すべき務は則ち全体の大法に遵ひ之を疑はず論せず敬虔を以て從ふにありと

見よ今日の非明日の是か、明日の非今日の是か人は成りて始めて知るのみ、左遷は菅公に一大打擊なりしならん然り若し菅公にして之れなくば身は太政大臣となりて一時の榮華を極めしならん悠々と一生を送り人名辭書の四半頁に或は現はれしならん果して然らば我國は一凡庸の太政大臣を得しも彼の貴き貴き幾多の我國民の性格を感化せし彼の性格は見るを得ざりしならん、會々此時に時平あり爲めに彼は千載の後尙ほ人を仰がしむるに非ずや、顧ふて是に至る時平果して幸か

菅公果して不幸か、誰か之を是とし彼を非とし得る。偉人とは赤子の心を失はざる者なり天眞爛熳、一の虛飾なし思ふ所是れ行ふ、敢て何の爲めなるや、何故に成さざる可らざるかを問はず彼の眼中一の口碑なく傳說なく獨り直覺あるのみ此を以て秀吉の如き夫の小田原攻圍中も舞踏會を催し朝鮮征伐中も名護屋陣中假裝行列會を先づ自らなす何ぞ天眞爛熳なる、見よ尊氏彼は果して姦雄か知らず只だ彼は直覺に從ひしのみ、其れがためには朝敵なるをも知らざる如く、若し彼の行ひにして是非すべきか責任者は彼に非ず神は社會發展の一手段として善者を向上せしめんため尊氏の腦味噌なる田に植ゑつげしなり故に彼果して社會を害せしか否輕々以て論ずべきに非ず、彼の非難すべき点は彼の爲せし行に非ずして彼が彼の腦味噌をして良質なる米の生ずべき膏腴なる田に開拓せざりしにあり、故に彼は其の一見惡の如きにも拘らず身は功なり加ふるに十三代の餘福を得ぬ。世人の忠と目せる正成は、あはれ全然失敗しき、適者生存は神の正理適者必ず勝ち不適者敗る神之が行司たり故に其審判一毫の違錯なし神に服する最も深き者獨り生長す而して必ず其裡人智の知る可らざる眞理存す余は繰り返す榮ゑんと欲する者は只だ單一なる純なる直覺に從へと。

万物大は日月星辰より小は不可見のバクテリアに至る迄一として活動せざるはなく自疆せざるはなし活動は進化を生む進化向上は宇宙の法則なり事實は何よりの眞理なり事實存在にして進化發達ならば之に逆ふ者は破れ之に從ふ者はなる元より自然の數なり。人は生れて既に或程度迄命運を有す、その始め星雲の凝りて太陽となり地球を分出し生物出で進化し向上して猿となり人となる人の子々孫々を經て我なる者是に生る若し其間に一分の誤りあらば我なる者現在生れ出でざりしなり、その星雲より我に至る幾億年の徑路は遺傳となりて我なる者の第一の性格を造る生れてより社會に出る迄の種々の境遇は我なる者の第二の性格を造る故に我れ潛伏力（ポテンシヤルエネルギー）を有せざれば人は全く前二者に從ひ命運により一歩も進まざる可し人類永遠の進化停止とならん、只だ神は全宇宙を借りて己れの徑經を行はんとす爲めに子は親よりも新なる者は舊なる者よりも過分に潛伏力なる者を與ふ（偉人とは第三なる潛伏力通常人よりも多く爲めに第一の遺傳、第二の境遇に依つてなれる性格に左右せらるゝよりも已れの力にて獨特の高き性格を造り廣く長く世界に感化を及ぼす者に外ならず）故に我等は生るゝより死する迄性格を造らんがため努力すべきのみ今日は昨日より高き而して潛伏力の全てを全生涯に用ひ盡すべし斯くて其の性格は後繼者に傳ふべきのみ然らば善き米は神是に生ぜしめん、マクベスはシエクスピーヤの人格の騰寫なり、フ、ウストはゲーテの人格より大ならず又小ならず神は瓜の蔓に茄子を生ぜず若し夫れ深き智も有せざる、イエス、クライスト、マホメットの二千年後の今日科學の流行せる今日尙ほ上は帝王より下は一匹夫に至る迄感化せらるを見ば彼の高き性格に非ずして何ぞ。此の生民あつて以來最大偉人の一なるイエス其の五誡律の第三に曰く

一切誓ふこと勿れ、如何となれば吾人は何事をも約束すること能はざればなり。蓋し人は全然天父の手中にあり。面して誓は常に惡事の爲めに要求せらるれば也

苟くも神意に從ふ者は過去、將來に生命を見ず唯だ現在刻下の生命にして吾人各自が現在行はざ

るを得ざる所を行ふこと是のみ是か故に吾人は休止することなし人は過去と將來の生活の爲に憂慮すべきに非ず唯だ現時の生命の間に神の聖旨を成就せんことを期するのみ。

吾人は是に於て徒に現在を悲觀する勿れ又未來を憂ふる勿れ刻下に努めて其の結果は神に委ぬべきのみ徒に吭吟猶豫せず成さゞる可からざることをなし、達すべき所に達するのみ斯くて衷心何等の煩悶なく自ら命せられし道を行く吾人又何をか求めん、人事を盡して天命を俟たん哉。

趣味を論す

小笠原秋水

發端

冷靜水の如く鋭利劍の如き理性の追求にまかせて人は驚くべき進化の跡を示せり、げにや天地日月の運行より一小細胞の機能に至る迄其實狀の髣髴として吾人か腦裏に映する迄に宇宙は考察され經驗せられたるに非らずや、たゞに物質のみにあらす宇宙の一大精神の研究は愈深邃の域に進み、精細なる唯心論や融圓なる本体論や此處に彼處にエデンは豐饒なる智惠の實に足らひて、誰か其清醇の滴りに陶然たらざる。

されとそは曾て吾人か遭遇せさりし新奇に眩惑せられたる一場の幻影なるのみ、巧妙なる術者か身邊に湧き出つる奇觀にうたれてよし暫の嘆賞は惜ますとも、やかてその理を知りかの基を證するに至つてやたゞ一笑の價なるに比すべし、十九世紀は實にこれか夢深き春宵の一時なりき、科學は哲學となり宗教となり更に文學たらんと迄豫言せられ、尊嚴なる古聖か言行は遂に生ける蒸氣の力に及ばざりし時代なりき、幻影は早くも人自らの聲によりて醒め心底の叫喚はあらゆる外界の追跡をさけて內心の自覺を求めぬ。

思はすや額青き博士ファウストがたどろと亂れたる髮の隙より輝く雙眸の光も凄く、懊腦せる胸邊を雙手に懷き、古色蒼然たる机上に咲くや毒抔の泡の數々、潮笑と呪咀のさゞやきに消え行くを見つめたりし折こそげに智識の利劍は粉粹せられし時なれ、かくて學殖ある博士は失せたり、うなゐ等か神に捧くる歌の曲にやゞ人生の暖さを解して此處に再ひ彼は生命の曙光に接しぬ、月はたゞやとす水のまに〳〵澄みもし濁りもし、宇宙人生は亦吾人か心意に從ひて笑みもし怒もす、吾人の所謂趣味は笑みかたむける天地に合一し得べき靈性に外ならず、たゞ暫らく吾人をして語らしめよ。

趣味の天地

若し天地を一大意志の發現とせは上は星辰の輝く限り下は九泉の溢るゝ極み、色彩の陸離たる音韻の玲瓏たる薫香の馥郁たる、吾人が感官を通して幽玄なる趣味の天地を敎る者にあらずや、東坡の所謂溪水の長廣舌をふるひ群蟬の樹上に法輪を轉すとはこれを意味にし、法輪と長廣舌とは正に森羅万象の裏面に伏在する超絶的一大趣味を宣說するに外ならす、かくして趣味の對象は常に天地に滿ちたり、花の曙雪の暮は云はずもあれ、風の月に木の葉を吹きかくる曉を尾の上に

細くさた鹿の聲のすごき、朔風のあるゝかまゝに海もなり岡もゞよめき生あるも死せるも恐れ戰く吹雪の夜、さては白鷗の夢靜けさ春の海の色濃さ、無量の趣味はこの間に溢れ永く肅殺に苦む人生に靈妙の默示を語るに似たり。

試に松青く波白き汀に終日うねる春の海のさゝやきに耳を澄まさんか、艶麗なる琉璃の面や鞳鞳たる天鼓や切々たる松琴や果た清鮮の氣や靜閑の致や、恍惚として我なく陶然として靈は波と共に鳴り松と共に彈し海と共に廣く霞と共に眠るの境に彷徨すべし、曾てバイロン曰く、山岳も波濤も悉く我が心の一部にして又我は彼等の一部にあらさるなきかと、げに幽遠なる趣味の天地なるかな。

たゞに自然のみにあらす吾人が藝術の天地に入りて新しき趣味の殿堂の階をたどるは又吾人が永久に生き得べき活路ならさるべからす、夫吾人が日出て動き日入て息ひ花咲きて歌ひ月澄みて嘯くものは、彼と我と共に大なる意志の開發にして默々の間情意の相ひ通する者あるがためなり、一介の瓦礫取つて投くれは我が意に從つて飛び疊々たる岩石我投けんとして彼我が意志に反す、これを取らんとしこれを投けんとす、自他意志の相融はこの間に存し、机上の時辰たゞす秘の刻みをつふやき彼此の相融によりて我亦その響を感す、色と云はす老と云はす暖と云はす寒と云はすそも吾人が融離せる外境を知覺し得るは悉く自己と外物によく結合し命脈相ひ通する故ならさるべからす、この命脈相ひ通するはやかて彼此等しく一大統一を思惟せしめ最高意志の發現を敎ふる者にあらずして何んぞや。

宇宙人生あらゆる一切は悉く一大意志の表現に歸し森羅万象の裏面には常に神秘なる國土の存在を理想するに至つて藝術の天地は始めて開拓せられ、不朽の製作は永く人生か向上の階ならざるべからす、ケーテ云へるあり。

Das Schöne ist Urphänomen, das zwar selber zur Erscheinung kommt, denn Abglanz aber in tausend versiedenen Ausserungen des schaffenden Geistes sichtbar wird, und so mannigfaltig und verschiedenartig ist als die Natur selber.

（美は決して現象に顯はれ來たらさる本源的實在にして万象に於ける其照影は創作的精神に觀取せられ自然と等しく無窮の變化を呈す）

この意義によりて詩人は天人の間に立ちて彼か美を感受し得べき靈性により、恰も瞽者か唯一の杖の如く重要に而も鋭敏なる想像の翼を揮ひ、深く宇宙本体の實在界を翺翔し無上の天啓に接して彼が直覺したる靈感を恍惚の間にありて歌ふ人ならざるべからす、かくして生れたる詩歌藝術は悉く永遠の着色を帶びつゝ至高の理想を敎ふるも理なるかな、けにホーマーと云はずダンテと云はす時と處とを超越して人心か根底にしみ、生氣の源泉となり盡ささる趣味の清流となり、人生の地上に存せん限り吾人か光明を翹望して止まさる極み、誰か地上に於ける彼等か力を疑ひ得ると云はんや。

更に吾人は趣味の存する處は常に悉く實在なるを信す、故に吾人は智識の要求する眞の世界と五感のよく知覺し得る物界とに關渉せさる趣味の實在世界を要求せんと欲す、再言すれは趣味の

存在する處はやかて實在にして吾人が理想する最後の樂土たらさるべからす、忘想と云はす空想と云はす卑しくも津々たる趣味の盡きさる者あらんには、吾人はその趣味に瞳れその趣味に融和し此處に大なる意義と慰安と果た光明とを把持し、一切の裏面に滾々たる本体界の靈泉に浴し個性の自我を脱却し得るを信せさるを得す、若し眞の働き得る限りの範囲をのみ實在とする學者あらんにはたゝ髣髴たる趣味の境をのみ實在と觀する詩人なきを保せす、少くとも吾人は吾人か生ける心靈の上に何等の力なく感化なき物質を輕視すると云はんより寧ろ其實在を否定せんと欲する者なり、遠き大洋の孤島か磯に横はる砂礫の實在せるものよりも一篇の詩歌に顯はれたる詩境を多とす、美のある處涓々として宇宙の靈泉はつきず趣味のある處必す幽遠の默示を欠かされはなり、熱烈なる詩人プラウニングは歌ふて曰く、

What so false as truth is,
False to thee?
Where the serpent's tooth is,
Shun the tree!
(眞理ほど何か僞はる
いまし戀には?
蛇の齒のふれん境は
草木もさけん)

理非をのみ求むる梟鵄の瞳を閉ちて暫し超絶的實在の趣味の天地を思はすや。

宗教の關門

吾人か美の享樂を通して宇宙の本体の實在を信せんとするは又宗教信者か彼等の信念によりて神の實在を確信すると類似す、吾人が到達し得る最高の趣味の境は彼等か安立の妙境と髣髴たり、寧ろ吾人は悟道の一面は趣味の境たるを疑ふ能はす。

宗教の關門としては古來或は罪惡觀と呼び無常觀と呼ふ、然れとも吾人はたゝにこれのみにあらず心靈の積極的發展として吾人はこの趣味により大安慰の境に到らんと欲す、悟道と云ひ趣味と云ふ何れは高根の明月のみ、近時我か思想界の傾向は著しく信仰の方面に向ひ、他力と云ひ無我と云ひ見神と呼ふ、而も何れか苦痛悶絶をその關門として奬勵せさる、然れども吾人を以て見れば之は著しき消極的方面なると同時に其の悟境も圓熟せさる迄は消極的なるを免るゝ能はす、個人の宗教的發展は自發的たる己上は個人の經驗により罪惡を激しく觀し無常を適切に感し得ると又境遇に依りてしかく切に感する能はさる者と有るか如し、多く無常觀門より宗教に入る者は身自ら其の最親の者の死滅によりて人生の醉夢を覺醒し、罪惡觀よりする者も亦多く自己か甚たしき罪惡の自覺に起因す、元より人は宗教者の說くまゝに大なる罪惡の器にして吾人敢てこれに反せすと雖も、尋常己上にその罪を恐るゝは必すしも凡へてに要求し得らるべき事にあらす、かゝる準繩を以て律しこれにあらされは無緣の徒となす又誤れるかな、幸か不幸か激しき無常にも會せず果た恐ろしき罪惡にも戰きし試しなき薄命兒の尙ほさすかに現世にのみ滿足し能はさる者

の、若し趣味の向上に於て超絶せる本体に融合し得る道なくば如何に寂寥たる天地に悄然たらざるべからざるか。

見よ、天地の廣大と幽玄と華麗と清洒とは幾多の自然詩人か見神の階となりしか、バンスやウオーヅオールスや西行や芭蕉や、雛菊の露に湖心の瀲灩に野澤の晩色に池汀の青蛙に、無量の趣味をこの間に見止め絶對の靈光をこの趣味の間より拜しぬ、吾人は未た沈刻なる人生の運命に半宵胸の鼓動と共に吾か生血を奪はるゝ迄の經驗なきを恨まず、寧ろ花は曾てバンスに笑みし如く笑み、月は昔西行の袖に宿りし如く澄めとも、空しく西江の月の吳王宮裏の荒廢を照らせるか如き寂寥を嘆するのみ。

天地最高の至靈はたゝに霽風朗月の間のみにあらす柳暗花明の里のみに限らす、人生の行事と運命と心情といやしくも生起し活動し得る現象のあらん限りは何處にか宇宙至靈の影を宿さゝるべき、ホーマーやダンテやセクスピアやゲーテや、或は英雄か疾風の如き行爲に或は人生の罪障と信念とに或は人事の葛藤に或は人間の歸趣に、大なる趣味の天地を開かんと試みし詩聖ならすや、觀すれば一念の心象すでに至靈の發現にして津々たる趣味はこの間に塡充せり、若し一篇の詩歌と一場の悲劇とに吾人か恍惚の境に彷徨し得るに至つては、遂に詩歌の超絶的事在は疑ひ能はさるなり、吾人か安立の地位はこの事實の上に立たさるべからす、ダンテか愛に於ける壯高なる趣味は、彼が智目行是の達し得さる限を越にて、清麗なるピアトリッチュの導くかまゝに千尋の斷崖を越にて遂に天堂の常樂に永久の生命を得しを見且つ愛は吾人の所謂趣味と遠からざるを知らは、證道の關門豈たゝ世上苦悶のみに限らんや、天地の趣味を感し最もよく宇宙を愛し得るものは大なる詩人なると共に又堅牢なる悟道の人なるべし、近世の評家の詩人を定義して曰く

The poet is not only a maker, a finder, a seer, and an interpreter; he is, over and above all, a Lover, if he be worthy of the name of a true poet. He must be a lover of God, of Nature, of Humanity, of Women and little Children, of the Beautiful, of the Good, and of the True. Love must be the ever-recurring burden of his song, the soulce of his highest inspiration.

神を戀ひ自然を戀ふ吾人の所謂趣味の極致又これを出でず、一大慰安と無限の希望と彼の宗教信徒の信念と撰ふべきは、彼を峻嚴なる朔風とすれはこは正に駘蕩たる春風の如きあるのみ、悲慘なる人生に會し苦惱に解脱の道をたどり能はざるあらば、疾く易行横超の趣味か門を叩かすや。

趣味の向上

たゝに趣味は光明の天啓を與ふるのみならす又暗黑の墮落をも惠まずば止まず、高潔なる趣味が宇宙の至靈か響をさゝやかんとする間に、賤劣なる趣味はこの至靈を覆はんとする魔性の叫びをもらさすんはあらす、そも創世の始めに於て驕暴と嫉妬とはサタンか趣味にして正義と慈悲とは天神か趣味とする處なりき、かくて羽輕き天使が高く蒼穹を翔けるひまに、彼等サタンの一群は啾々たる蔭府の火焰かもとに苦痛より假死せさるべからざるに至れり、はしたなき肉体の趣味

は云はすもあれ纖弱の趣味の伺ひ得る天地はたゞこの纖弱なる境のみにして、粗放なるそれの味ひ得るはたゞ粗放なる天地なるのみ、元より趣味は自發的靈感的なるが故にこれを强ゆべきに非らずと雖も、吾人か共々に手を携へて進まんと欲するはより壯嚴なるより幽玄なる趣味の天地なり、一枝の春、たゞ見る人により可憐とも見るべく、爛漫とも見るべく、花心の白露に淸艶を感すべく馥郁たる薫香に淡雅の致も忍ひ得べし、而も吾人は更にこれか一大意志の發現と觀し、鮮麗の色に大慈の慰撫を思ひ、凜たる花魂に大靈の尊崇の念を動かし、微に動く花唇に威德讃歎の揭頌を聞き得んには、徒に三春の脆きを泣き皓潔の穢れやすきを恨む纖弱の境を脫し得るに非らすや、若し究畢の趣味の間に逍遙せは彼に泣き此に笑むも悉く最上の詩歌たるを失はす、かくて吾人は先つ究畢の趣味に到達せんか爲めにあらゆる努力を用ひざるべからず、人或はこれを以てたゞ宗教詩にのみ要せらるゝ者となさん、然り吾人は必すしもこれを否ます、すでに人として吾人か立たん限りは絶對の所依なかるべからす、吾人かこの大なる趣味を所依とせんは恰も一小白露の廣茫たる海水に融合するか如きか、花と命を爭へる露の眞珠の海水とその生命を同ふし、彼處に大洋の波濤と狂ひ、此處に破船の名殘を吊ひ、遠く南洋の孤島に珊瑚の岸を洗ひ、去つて北海に氷山の威大を讃し、月澄めば須摩の浦わに、雲湧かば玄海の灘に、彼所に歌ひこゝに嘯く、人生の詩境いかて絶對の所依を離れ得べき、望むらくは此れが階梯として天地を讃ずるに壯大と靈妙とを以てし、これに奉するに敬虔と親愛とを以てせんを。

古來默想に乏しき國民の幽遠なる詩趣なき我か文運の前途を思ひ且つは吾人自らの心靈か求むるまに〳〵、天下の風敎日に非なる今日、煩鎖たる物質の追求を後にして、何んそ尊嚴なる趣味の徑道をたどり、永久の光にほゝ笑む宇宙の至靈を追はさる。(二月二十二日稿)

敗者論

みごり生

一

見ずや、万斤の重車に繫がれて不斷の鞭下に斃れむとする敗者の樣を。

夏の日は爛々と輝きて陽炎高く天に冲し、卓隅の蒼蠅羽を潛めて六百街上砂塵渦卷く。時しも斗の如き息つきて來る老馬あり、暑氣と苦痛とに堪へやらで無二無三に走らむとすれども、脚の弱きと馬車の重きとを如何ともすべからず、頭のみ上下に動し、前足を以て空を蹴くこと再三、訴ふる如くに低く呻きて、半開の靑白き眼は悲しげにみ空を仰きぬ。而も無殘なる御者の鞭苦は、柘榴の如くに腐爛せる赤き肉目懸けて霰と降り注ぐにあらずや。あゝ悲慘なる哉敗者の樣や。やがて血腥き屠殺場裡に、白き馬骨を晒さしめむよりは、乞ふ、天に燃ゆてふ劫火の一時に降來つて、此の敗殘の瘦馬を一片の烟と化し去れ。

見ずや、一枚の胡座を夜の具とも住家とも賴みて、冷き石に枕せる敗者の樣を。

枯水の響幽に震ひて、汀の蘆葉に霜白く、草紅葉既に莖のみとなりて螳螂の屍怪しく輝く。此處、

疊々たる白骨の如き河原の石上に、人情の冷刻なるよりも尙溫しとして眠れる一人の乞食あり。身に纏へる繦褸は膝に達する能はず、地に布ける胡座は肩に及ばず、亂れ勝に吐ける息は眞白に氷りつゝ。時しも師走の月は雲母の如き雲を破りて現はれぬ。身を刺す如き光、サト其靑白き橫顏を照せば、痩頰のほとり枯皺搖ぎて、夢は遙か故山幼年の折に飛びぬ。乞ふ吾人をして乞食の夢の一端を語らしめよ。「卒然として吾は花赤く水溫き故鄕の懷襟に抱かれつ、里の子等と輪を廻して遊び、小犬を追ふて戲るゝことのいかに樂しきよ。忽然音もなく降り來る豆大の霰、續いて雪、雨、雹、友は何處へ行きけむ、犬は何方へ隱れけむ、只見る四方漠々として際涯なき大洋の眞中、我身は確と岩角に氷り着きて、寒潮の冷たき舌は吾足より胸へ、胸より首へと呟り初めぬ。足も痺れぬ、手も痺れぬ、口も顏も耳も痺れぬ、あゝ吾が全身は既に我物にあらざりき。突然岩陰より現れ出たる一匹の怪物、浪を蹴り白泡を嚙んで來る。近づくに從ひて其の速度益々早く、其形愈ゝ大なり。あゝ吾生命は唯の一分、三十秒、十秒、五秒、一秒。」飢と寒さとに勞れ果たる痛ましき乞食は、かくても尙醒めむとはせで力なき眠を續くるなりき。月は半雲に隱れぬ、蘆間を戰ぐ寒風颯と過ぎて鬢の毛微に搖れぬ。あゝ悲慘なる哉敗者の樣や。河原の石に冷たく凍ゐ着かずば幸也。

更に轉じて他面を觀察せよ、世は擧げて利己に傾き、人は總て自我に走る。義戰を榜標して人の國を奪ふ國家あり、信仰を笠に着て喜捨を貪る賣僧あり、公益なる木材を用ゐて私利を營造する建築家あり、信義の看板を揭げて友てふ商品を賣る奸商あり。之を人類以外に求めむか、或は暗に乘じて小禽を掠むる梟類あり、籔叢に身を隱して餌食を狙ふ虎狼あり。大樹は已れのみ大ならむが爲めに根と枝葉とを四方へ伸し、鮫類は飽くなき腹を滿さむが爲めに鰯群を追ふ。之を過去に徵せむか、蛙の鳴聲を鎭めむが爲めに終夜貴族の城濠を搔き廻さゞるべからざる農民ありしと共に、年々幾億圓の膏血を絞りて平然黃金の珠數を爪繰りし僧侶ありき、また一週の六日間は其主人の爲めに勞働し、殘る一日を以て妻子を養はざるべからざる階段ありしと共に、僅々兩個の耳に快感を與へむが爲めに三千の宮女を白馬に跨らしめし帝王ありき。之を未來に考へむか、百万の靑衿は後年、自我發展の材用に供せむが爲めに孜々として學識を吸收し、幾拾の國家は殺人器の精巧に頭漿を絞りつゝあり。宗敎家は神を餌にして將に人類を釣らむと試み、社會黨員は私憤を爆裂彈に裝して現世を破壞せむとす。實に是等の者一たび其の活動の域に達し實効を奏するに至らむか、敗者路に泣き勝者殿に驕り、世は百鬼夜行の醜狀を現せずば止まざるべし。あゝ過去然り、現在然り、未來亦然からむとす。然り世の物や人や誰れか亦自己發展を勉めざる者と云ふを得べき。此の間に處して彈盡き太刀折れ、戰ふに力なくして敗殘の位置に立てる者眞に酸鼻なる哉。食ふに物なく、着るに衣なく、啾々の聲をあげ潛々の涙を流して不遇を嘆ずる敗者の樣や眞に悲むべき哉。悲め、悲むで哭せ。吾と志を同うせむ者は來つて、敗者の爲めに万斛の血涙を灑げ。

二

然ば敗者とは何ぞや。吾人は此の問題を論ずるに先ち如何にして敗者の生ぜしやの所以に關して

少しく解釋を試みざるべからず。

吾人は想像す、天地開闢の當時万象悉く渾沌の中にありしと。暗瞻の雲霧は低く地を閉し、氣樣の泥土は高く天に漂ふ。二十八宿星座亂れて劫火四荒に燃に燃ゆ。此時に當りて天地の神（若し神と稱する者あり得べくんば）は万象に誤れる道を敎ひ給へり、右すべきを左に導き給へり、上すべきに下を指し給へり、かくして万象は其發程地に於て一歩を踏み誤れり。千里の行程も一歩より始まるとかや、既に一歩を踏み誤りし結果、万象は貴ふべき無我を棄てゝ賤むべき唯我に馳れり、美しき他愛を棄てゝ汚れたる自愛に就けり。あゝ悲むべき哉万象の前程、咀ふべき哉天地の神。

天地鴻荒以來幾千万年、宇宙の万象は奈落の底目懸けて墜下するのみ、自我の深谷目懸けて猛進するのみ。而も石の落つるや地に近づくに從ひて其の速度早きが如く、万象の自我心は年と共に其度を高め月と共に其量を大にせり。然れども一物の自我の滿足は直ちに他物の自我の不滿足を意味するを以て、同一の目的に向つて進行する万象は其途上に於て勢自他利害の接觸を來せり、續いて衝突を來せり、あゝ斯くして嫌厭すべき競爭は始まれり、戰慄すべき鬪爭は起れり、同類相食むの慘狀を呈せり。然れども競爭や鬪爭や、未だ以て事物の本原となすべからず、利己と稱する暗黑に伴ふ陰影のみ、自我と稱する蘇ある莖に咲ける蘇の花のみ、亦避くべからざるなり。生存競爭の由來は實に上述の如し、而して万象一たび此渦中に投ぜらるゝや、卒然として此に强者弱者の區別を生せり。然れども弱者の出現を以て未だ病膏肓に入る者となすべからず、若し此時に於てすら万象相互に一縷他愛の念あらむか、强者は弱者を憐愍し扶翼して此に眞善美の天地を形成せしや疑なかりしならむ、尙ほ吾人が一條の細糸を以て紙鳶を支配するを得るが如し。然れども風は益〻烈しく紙鳶は益〻高く飛揚す、あゝ万象の自我心は足る所を知らざりき、限なきの自我を以て力なきの弱者を苦しむ、此に於てか弱者は更に敗殘の位置に下れり、あゝ紙鳶の糸は遂に切れたり、病遂に膏肓に入れり、かくして敗者は現はれたり、かくして敗者は現れたり。勝者とは生存競爭の結果自我を滿足する者是也。敗者とは勝者の追求する所となりて敗殘の位置に立てる者是也。故に勝者は因にして敗者は果、兩者共に强者の飽くなき利己的觀念によりて成立す。尙兩者の意味を明にせむか、敗者は手足を捩ぢ取られし蟹也、空しく口角泡を吹いて勝者の來襲を待つ、勝者は呪はれたる神の命を奉ずる惡鬼なり、其携ふる金棒の犧牲となる敗者の數幾千ぞ。敗者は深淵に投ぜられたる石塊也、暗黑より暗黑へと沈み行きて、遂には千尋の底にうす黑く横はらむのみ。勝者は大空高く揚げられたる風船玉也、燦として日光に映じ、昇ること百尺、滿面の得意を以て輕く飛躍す。尙是を譬へむか、敗者は無色透明なる粒狀の凝固してなれる者にして極めて寒冷也、元之れ潛々たる涙滴の集りし者なれば也。勝者は高熱なる波動体の水分蒸發によりて生ぜし者にして其色赭黑色也、元之れ敗者の膏血を啜つて之を乾溜せし者なれば也、あゝ熱したる血は冷たき涙を暖むべく、赤き色は色なき色を染むべきにあらずや。尙一例を以て兩者の性質を明にせむか、敗者は熊笹の下に咲ける一株の菫花也、熊笹之を遮れども、其芳香は尙ほ山路の精にあらずや。勝者は淺茅生に聳ゆる一本の古杉也、大空にそゝり立てる姿は偉なりと

雖も、雨降る朝、風荒ぶ夕、安き心地もありや否や。依是觀是勝者と雖も未だ万物生存の意義を得たる者にあらず、況んや敗者をや。されば吾に於ては勝者敗者共に憐むべく哭すべく、適者生存の理法獨り呪ふべし。

三

吾人は前節に於て敗者の成因を適者生存の理法に歸せり、然らば適者生存の理とは何ぞや、又吾人は所謂進化の法則に盲從せざるべからざる者なるか。

吾人をして思ふ所を云はしめよ。適者生存と云ひ進化の理と云ふは是虚僞の理也、假面の理也、賤むべき自我の種子より發芽せし荆棘の叢のみ、一種の惡習慣の積重してなれる頑石の塊のみ。未だ以て萬物を徹貫せる絶對理法と見るべからざる也。蓋し適者生存と云ひ進化の理と稱するは萬物生存の眞理にはあらずして結果より推定せし一種の似而非推論也、卽ち物の傾向のみ、未だ物の元となすべからず。顧思せよ時は無限也、されば生物發生以來の僅々一億二億の短年月を以て無限の時と宇宙とを推さむとするは生嚙りの歸納法にあらずして何ぞ、管見も亦甚しい哉。人類と稱する動物は大自然の一毛髮を奪ひ來り、之れを縱裂横斷、毛髮黑さを以て宇宙黑しとなし、其の長成するを見て宇宙は競爭によりて進化すとなす。喘々、何等の輕擧ぞ、何等の怪事ぞ。實に適者生存と云ひ進化の理と稱するは短小なる一時代の產物に過ぎざる也、故に誤れる道に迷へる現代の宇宙に於てのみ眞ならむ。然ども一たび眼界を大にして無限の過去と無限の未來とを通觀せば、誰れか亦かゝる不完全なる理法を以て萬象共有の眞理となすを得べき。吾人は現代に生を享くと雖も現代にのみ生くる者にあらず、されば一たび現代を通して此等虚僞の理法を觀察せむか、光彩陸離色澤燦然として吾人の眼を眩せむとする者あるべしと雖も、吾人をして思想の翼に乘じて現代を超越せしめよ、然る後此等虚僞の理法を通觀せむか、浮々飄々泡沫の上に築かれたる虚僞の樓閣に過ぎざるを認むべし。あゝ今や虚僞の理は宇宙に漲りて眞理の面影は濁浪の下、怪岩の蔭、微かに輝く眞珠の光に於てのみ認むるを得べし。見よ虚僞の理の渦卷く慘狀を、天柱折れよと許り押寄せ來る濁波は岩を嚙み、人を呑み、舟を碎き、山を挫き、更に狂號して地球を呑み星を吸ひ、天地六合に狂瀾せむとす、あゝ眞に悲慘なる哉濁浪の腹中に葬らるゝ萬象の運命や。

然り、一たび公平にして明晰なる眼底に映ぜしめむか、進化の法理は全々無價値なり、況んや其最も嫌ふべき副產物たる敗者の存在をや。苟も吾人が適者生存の理を以て萬有の眞理となさゞる限りは敗者弱者の存在は一日も許すべからざる也。

四

然れども吾人は不幸暗黑の現代に生を享く、亦適者生存の渦中に働かざるべからざる也、吾人が虚僞の理と知りつゝも敢て反馳せざるは之を是認するにはあらで止むを得ざるの余に出づるのみ。吾人の肉躰や遺傳的也、吾人の周圍や弱肉强食の巷閭也、雪の降る日は炭を燒きて温を取らざるべからず、飢に苦しむ折は米を嚙つて空腹を凌がざるべからず。然れども利刀にて切られ、烟にて燻べられ、俵に詰められ、遠く市に運ばれて吾人が爐裡の灰と化するは豈之れ雜木の欲す

る所ならんや、鎌にて刈られ、臼にて磨られ、杵にて搗かれ、湯にて煮られ、遂には吾人の鋭利なる齒にて嚙まれて一塊の糞土と化するは是豈米の本意とする所ならむや。吾人の米を食ひ、炭を燒くは是等を敗者視する也、敗者と知りつゝも尙之を虐待せざるべからざるは實に止むを得ざるの余に出づるのみ。あゝ現代の趨勢は不自然的也、眞理に反馳しつゝあるなり、而も吾人の肉体は現代の產物なるを以て到底生存競爭の範囲外に超然たる能はず、吾人は遂に進化の理法に屈從せざるべからざる乎。

乞ふ吾人は一歩を讓りて進化の理を是認せむ、苟も進化の理に從へば此に優劣强弱の差を生せざるべからず。然れども前節に於て述べし如く弱者や劣者や之必しも敗者にあらず、强者や優者や之必しも勝者にあらず、弱者を虐待し之を追求し、之を蹂躙することによりて此に始て敗者現はる。强者驕りて敗者生れ弱者苦しめられて勝者出づ。然ば生存競爭を消極的に實行する時は强弱の差を生じ、之を積極的に實行する時は勝敗の差を生ず、換言すれば敗者は當然生すべき者にあらずして强者の强慾飽くなきに依りて始めて現はれ、四方の物体其の位置を高むるによりて自づと生ずるにあらずして、四方の物体之を押し落すことによりて成立す。卽ち强者弱者は消極的利己心の發現によりて生ずと雖も勝者敗者は積極的利己心の發現によりて生ず。

依之觀是假令吾人は適者生存の理を是認するも、積極的利己心の發現たる勝者敗者の存在は一日も之を許容すること能はず。況んや吾人の有する不羈獨尊の心象は全々適者生存の理を非認するに於てをや。吾人の肉体は現代及び外界に服從的なりと雖も、吾人の心象は絕對的也、絕大無量也、何者と雖も之を屈服せしむべからず。此の心象を有するが爲めに吾人は現代を超越し、現代以上に其生を樂むを得、此の心象を有するか爲めに吾人は進化の理を否認して別に一新天地を描くを得。かくも貴重なる心象をかくも瑣些なる肉体に具してかくも慘憺たる現世に生れ出でし吾人は、恰も明瞭なる眼瞳を有しつゝ忽然暗黑界に投入せられしが如き心地す。吾人の四周は全々闇黑にして何物をも認むる能はず、然れども吾人の兩眼は何物をか見むと勉むるにあらずや。然り吾人の周囲は闇黑也、競爭の濁波は怒號の聲勇しく吾人の身邊に押寄せ來るにあらずや、而も貴ふべき吾人の心象は尙何物をか見むと試む——恐らくは濁浪の底眞珠と光る眞理の面影にはあらざるなきか——。あゝ偉なる哉吾人の心象や。四面楚歌の中に立つて超然として卓出し、凡ての誘惑、凡ての迫害を却け、獨立獨歩其の主義に向はむとする吾人の心界は實に偉なりと云ふべし。

嗚呼現代非也、適者生存非也　進化理非也、生存競爭非也、優勝劣敗非也、弱肉强食は決して決して万有生存の意義にあらざる也。蟬は決して蜘蛛の毒齒に罹らむが爲め、鳶の嘴の餌とならむが爲めに生れし者にあらず、鷄は決してコックの手に絞られ、人類の食皿の上に屍を晒さむが爲めに生れ出でし者にあらざる也、小暗き木間に色褪せたる桔梗の花も必ずや濃紫に匂はむとて咲き出でし者なるべし。土中に土を食ふ蚯蚓も其初は必ずや人類の如く美服を纏ひ美味に飽き公々然と大道を濶歩せむとて生れし者なるべし。あゝ萬物の現狀は非也、非也、全々非也、只吾人の內藏する心象獨り眞理の面影を止む。偉なる哉心象、尊ふべき哉心象、頌すべき哉心象。現代何かあらむ、肉体何かあらむ、適者生存何かあらむ、心象を有する限りは吾人の生命は無限也、不

死也、永劫也。餘爐尙時に天を焦す大火を起すを得、いざ吾人は孤獨の心象を率ゐ、熱情以て、堂々押寄せ來る競爭の濁浪と戰はむかな。

五

世に敗者あらしむべからず、是吾人の主義也、理想也、人生の極致として到達せむとする所也。何を以てかしか云ふ、敗者の存在は理に於て不可なれば也、萬有生存の意義の弱肉强食にあらざるや吾人之を心象に於て認むるを得、直覺的に知るを得、神秘的に知るを得、靈感的に知るを得。然れども吾人の眼は眼之れ自身を見る能はざる如くに、生存競爭の渦中に生活する吾人は遂に宇宙の眞相を知るべからず、只眼は鏡に映じて之を見るを得るが如く、宇宙の眞相は絕對的客觀、卽ち主觀に依りてのみ之を見るを得べし。實に主觀は宇宙の眞相を映ずる明鏡也。星花燦として輝き、森羅靜寂として眠る時、靜に仰いで宇宙の眞相を觀ぜよ、誰か優勝劣敗を以て萬有の理法となすべき者ぞ。白雲千里に連り江流永へに綠なる所、徐ろに俯して萬象生存の意義を尋ねよ、誰か自已發展を以て宇宙の眞理となすべき者ぞ、蓋し適者生存とは止むを得ざるに出でたる一時の彌縫的窮策のみ、未だ絕對の理法にあらず。理外の理のみ、未だ理中の理となすべからず。適者生存の理既に不可也、況んや其の最も嫌ふべき副產物たる敗者の存在をや。

世に敗者あらしむべからず、是れ吾人の主義也、何を以てしか云ふ、敗者の存在は自然を無視せる行動なれば也。吾人は此に人類と大根との關係を以て之を說明せむ、現代に於て適者生存の理の行はるゝ以上は此に强弱の差を生せざるべからず、卽ち人類は强者にして大根は弱者也、それ弱者なり、故に强者に貢獻する所なかるべからず。大根は此に於て花を開き實を結び、吾人に獻ずるに有益なる菜種を以てす、啻に强者の仁惠に信賴して子孫の蕃殖を計らむとす。あゝ何ぞ其謙讓なるや、何ぞ其有德なるや。而も憎むべし、强者は遂に驕れり、驕つて大根を敗殘の位置に置けり、憎むべき人類は其地下深くも隱せる根を拔き取れり、爲めに花は矮小となり、實は衰へ、今や勝者の毒手に委ねられて細々と其餘命を繫ぐにあらずや。吾人思らく、若し人類にして大根を虐待することかくの如くならずんば、果實は益々榮ゑて、根の現今に於て吾人を利するよりも尙ほ利する所多かりしならむも。之自然は常に不自然に勝てば也、あゝ敗者の生存之果して自然なるべきか、吾人は大根に於て其然らざるを見る也。

世に敗者あらしむべからず是吾人の主義也、何を以てしか云ふ、平均主義は萬物を通ずる大綱なれば也。見よ大山絕ゑず崩れて谷を埋むるを、見よ河水の堂々と流れて低きにつくを。萬物は常に平均せむと力む、自由、公平、平等は之萬物の終結にあらずや。然るに見よ敗者の存在は全々此主義と反馳するものにあらずして何ぞ。假令生存競爭の結果强弱の差を生ずるも、吾人は全力を注いで、弱者を優遇し極端と極端とを相融和せざるべからず、此に於てか道義生じ、美德出で、同情生る。然れども一たび之を敗者視せむか爪牙の爭到る所に起り、宇宙の平和は永久に望むべからず。あゝ吾人は飽くまで平均主義を信ずる者也、何ぞ一日も敗者あらしめて可ならむや。

世に敗者あらしむべからず、是吾人の主義也。若し吾人にして冷灰木石の黨たらむには卽ち止むべし、然れども吾人は幸か不幸か同情を有せり、惻憐の念を有せり、血を有せり、淚を有せり、

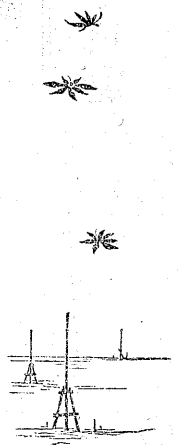
豈一日も敗者の存在を許すべけむや。青白き皮膚なりと雖も此の下に千万無量の温さ赤血球の躍るを如何せむ。四十五度に過ぎざる眼界なりと雖も其底に美しき涙の幾千滴を蓄ふるを如何にせむ。飢に泣く子を見ては吾人は空腹を凌ぎてパンの一片を分つべく、蛇に呑まるゝ蛙を見ては吾人は我を忘れて走り出づるにあらずや。あゝ世は混沌なりと雖も此に一縷の精靈燃ゆ、濁浪渦巻く大海原なりと雖も此に不可侵の一孤島存す。風は暴れ、波は高く、空は闇く雲は低し、あゝ吾人はヒカリと閃く一縷の電光をたよりに、小さき孤舟に棹して、たゞろ狂へる濁波を切りて、あの松青き孤島に達せむ哉。

六

最後に吾人は如何にして競爭の濁浪と戰ふべきか、いかにして敗者の存在を消滅せしむべきかを說きて此の論を結ばむとす。

急遽なる速度を以て耻づべき弱肉强食の極端に向つて走りつゝある生存競爭の理に對して反抗を試むるは、尙ほ天外より飛下し來る隕石を支へむとするが如し。幸にして灰燼と化するを免るゝと雖も、吾人の頭腦は眞二つに碎裂せらるべし、故に吾人は萬全の策を取りて此に對抗せざるべからず。策とは何ぞや、搦手攻擊是也。吾人は暫く現代と其の行動を共にして奈落の底に落下せむ。然り共に落下すと雖、只吾人は宇宙に犇と抱き着きて、痩腕の碎けむ限り、熱血の盡きむ限り、宇宙の進行を弱めむと試むべし。大自然に附着せる塵の如き虫、其力何ぞ大宇宙の趨勢を挽回するを得む。然れども見ずや一匹の蟻も時によく大堤防を破壞するにあらずや。吾人の力固より微弱なりと雖も、吾人は只倡たらむのみ。若し幸に吾人の倡ふる所其實効を奏し、宇宙一たび其耻づべき進行を止むるに至らむか、吾人は更に之を驅つて天に高く高く上昇せしめむなり。あゝ偉なる哉回天の事業。壯なる哉吾人の理想。回天の事業は固より難にして吾人の理想は遠大に過くと雖も、吾人は熱血の男子也、豈空劍を嘆ずるの愚を學ばむや。來れ競爭の濁浪、吾は汝の上を縱橫に蹂躪して美しき春の海と化せむ哉。來れ汚辱の隕石、吾は墜落せる汝を提けて再び天上界に美しき星花と咲かしめむ哉、吾心象に眞理の面影存す、吾血涙に眞理の反映宿る、回天の事業大なりと雖も、何ぞならざらむや。然れとも其の實現せらるゝの時の果して幾百万年後なるやは明言し能はざる所也。

（以上論ずる所は余が敗者に對して有する抱負の一端也。妄論陳腐加ふるに文辭粗笨の譏を免れすと雖も而も敗者に對して吾人の熱血を灑ぎし者、幸に無用の閑文字と同一視することなくば幸也、記して文責を明にす、三十九年二月二十日河合良成）



雜錄

文學の社會に及ぼす影響

○△生

天に輝く星の影、地上に匂ふ花の色、或は高嶺に懸かる雲の跡、荒磯に噪ぐ千鳥が音、噫これ等自然のものが、いかばかり麗はしく、いかばかり美しきものなるかを、人の心に注ぎて、山間の樵夫にも、呦々として鳴く鹿の聲を聞きては、物のあはれを覺らしめ、湖上の漁夫にも、皎々として冴ゆる月の色を眺めては、物の麗はしきを感ぜしめ、そが胸中常に雅懷綽々たらしむるものは、文學が人間に及ぼす影響、もとより論を俟たずと雖も、文學をして啻に花の晨のうるはしきをめで、月の夕のさやけきをのみ歌ふにとゞまらしめば、茶の湯生花の技、繪畫、寫眞の藝と何ぞ其の類を異にせん、然るに文學には社會に對する偉大なる勢力あり、吾人が一たび古今の名著をとりて繙かんか、神變靈脫の機、雷霆霹靂の勢、一唱三嘆覺わず快と呼び、悲歌慷慨忽ち叱咤の聲を發し、讀者をして思はず腕を扼して起たしむ、これを以て一世の靈筆、詩歌に小說に正義人道を絶叫するや、一龍嘯きて四方の雲之に和する如く、人間の精神はこれがために皷吹せられ、惡弊はこゝに革新せられて社會は改造し盡されずんば止まらず、こゝに於てか文字生命あり、飛ぶが如く躍るが如し、自由、獨立、革命の歷史、何れかそれ文學的酵母を含まざる。

本邦の歷史に擧げんか、德川幕府の創設とゝもに、其の內部に流れ來たりし思潮は實に勤王論となす、其の聲や眞に帝國固有の聲なり、國民魂魄の反射なり、些々たる政治の壓迫すべきものに非ざるなり、其の山陽が外史十二卷、慷慨淋漓、無韻の詩をもてこれを皷吹するや、志士仁人は憤然義に趣き、從容死に就き、これ等歌中の人とならんことを欲したり、忽ち見る、さしも壯大なる江戶幕府は、勤王の波瀾のために捲かれて、其の影を隱沒し、聖天子再び神洲に君臨し玉ふことを、歐洲に於ては佛國の革命は其の最も著しきものなりき、其の自由論の由て來るところ遠しと雖、畢竟一夫皷して萬夫を舞はしめし者はルーソー等の筆となす、これ等は眞に野に叫べる自然の聲なりき、王者も乞食も同し價をつくる程の自由平等は、いかなる詩人がこれよりも明に歌ひ得べき、これ眞に佛國革命の導火線なりき、忽にしてルイ十六世は斷頭臺上の露と消ゑ、政体は玆に改められ、鐵蹄遠く南はピレニース、アルプスの山を越ゑ、北はエルベ、ラインの河畔に印し、縱橫叱咤歌洲の帝王をして其の肝膽を寒からしめたる那翁の大勢力に至るまで、この思想は佛國々民の血潮に燃えたりき、或は宗敎上に一種濁流潛み來りて、人が淸き神の福音と、汚れざる地上の主宰者を得んとの心は、一入激し來れる折から、ハレスタインの一寒地より彼のマルチンルーテルが、宗敎革命の聲を發するや、これに和するもの雲の如く、須臾にして、歐洲の天地は汗馬嘶き血の雨濺き、霹靂天を燒くの後、こゝに宗敎は一洗せられ、日月淸くユーロッパの山河を照らせり。

これ等古今東西幾多の事實は、いかに文學が人間の內部に影響するかを知るべく、其の理想の美

に向ひて進むや、猛然として水火も辭せず、血も鐵もこの偉大なる熱情を鎭壓するに足らざりき、豈大ならずや文學の力や。

こゝに至りて初めて知る、社會を論ずるものゝ筆の、其勢力大にして又責任も至つて重きを、一たび筆を揮はゞ、鬼神爲めに泣き、蛟龍遠く潛み、忽にして風雲を捲き起こし、一枝の筆よく百世を震撼すべしと雖、一歩誤りて筆をとらんか、時ならぬ騷亂を呼び起こして思はざる不幸を無罪の民に與へ、正しき社會の秩序を破りて、世に少からぬ害毒を流す、こゝに於て文學が社會に對する影響は、利害の二方面に於て其の力の大なるを知る、これを以て筆をとるものは、勿論これを愼まざる可らずと雖、爲めに一生を無主義、無定見に終るべからず、よろしく一代の思想を導かれよ、亂臣賊子をして其の膽を寒からしめよ、社會の爲めに、國家のために、正義のために、人道のために鬪はれよ、唯望むところは天地を穿てる主義と、古今に通ずる識見とを根據とするにあり。

而してこの主義や定見や、徒らに春の花、秋の紅葉の匂ひより、或は待合、料理店の席上より得べきものに非ず、一國人文の根據を洞察し、人生の眞理を考へ、古今東西、幾多盛衰興亡の跡を見、世の潮流のいづくより來り、いづれに流れ行くかを明にせざるべからず、ルーソー、山陽、ルーテルこれ等は實に文界希有の偉人、確かに天下を指導するに足る識見と、一世を傾聽するに足る社會觀とを有したりしや明けし、あはれこの種の偉人啻に文學社會に要求するのみならず、社會の要求するところなり、筆をとりて起たんとする人よ、卿等は唯花月に友たるのみならず社會を經綸するの大抱負を懷け。

人口之發展如何　附　神之意義

飯盛空峰

般々たる幾多工場の滊笛は喧囂たる都會の雜踏に和して響きぬ、見よ電信線電話線等恰も蜘蛛の巢の如く架し渡せる街路の上を、電車東西に走り自動車南北に驅せ交ひ兩側の人家は悉く鐵骨石皮その高きこと雲を凌がん許なり、其壯麗なる譬ふるに物なし、吁何ぞ夫れ盛なる、吾人は此の自由なる供給に對して無限の感謝を致すのみ、而してその悉く人爲に依て成れるを知らば誰かその精巧なるに驚嘆せざらんや、然りと雖も一度此の都門の俗塵を脫し暫らく一身を翠陰綠水の靜境に轉じて己が意の嚮ふ所を恣にせんか、四邊より肉迫し來る幽遠なる自然の韻語、美妙なる天然の風光は吾人をして轉た恍惚として宛ら仙界に在るの思わらしむ、吁何ぞ夫れ壯嚴なる、知らず此の天然は果して誰に依てか化れる、吾人は搜りぬ深くその起因を索めぬ、而して遂に之を得ざりき、淺薄なる思想家は以て如何となす、此の隱顯變化極まりなき自然の狀態の間に自ら整然たる秩序在て存するを見、微弱なる人類の勢力は此の絕大なる自然の勢力の羈絆を脫する能はざるを悟ては不知不識畏懼と敬虔との念は胸中に溢れ來て遂に宗敎心を喚起するに至らんか。

凡そ地球上の萬象は如何にして現存し得るか將た宇宙は何に倚りて存在し得るか吾人はその故

を知らず、然りと雖物因なくして存する能はざるを知る、されば其處にまた一の因ありて存するや明なり。其因たるや何ぞ神秘卽ち是なり、斯の如くにして天然界は實に此の眞理の支配の下にあるなり、卽ち眞理存せざれば事物は在り能はざるを知るなり、世界萬般の現象は此天地の主宰たる眞理の發動に依りて實現するなり、此を以て是を見れば自然界の變化現象と人爲的事業とは全くその趣を異にすと雖その起因に至りては明かに一にしてその間寸毫の差なく、等しく是れ自然の眞理の下に出現するものなるを知るなり、唯其異る所以のものは前者は自然に依れる眞理の發現にして後者は人爲に依れる眞理の發現のみとや云はん。

吾人々類は天帝の命に依りて此の宇宙に發生せり、天帝は同時に我等が棲息に必要なる物は十分に之を與へ盡したり、然も直接に非ずしてその與ふるや深く彼の神秘の裡に隱して以て吾人の身邊に放棄したるなり、吾人の祖先は之を得んとして勤めたり、然れども彼等の材能は一朝にして之を搜出する迄に發達せざりき、人智は其後日一日と發展し來りぬ、彼等は彼處に此處に漸次眞理の半面を發見し得て以て天帝の賜物を享有するに至りぬ、思ひ起せば萬年の昔とよ、我等が最初の祖先なるアダム、エブはエデンの園に平らけく安らけくその幸福なる生涯を過しゝと聞く、彼等は當時果して如何なる供給を以て滿足せしか、恐らくは否實に彼等は己が身邊に實現して存在せし自然物を以てのみ自己の生活を滿足せしならん、されど彼等が數代後の子孫は天の賜物は猶暗裡にありて宇宙に彌滿せるを悟りて漸く之が開發に着手したり、斯くして幽玄の空境より忽然として得たる嶄新なる賜物は卽ち人工的製作なり、その始たるや極めて簡單なるものなりしならん、然も次を追ひ階を踏んで次第に完全の域に達し以て顯はれしもの卽ち今日吾人が生活に最も幸福なる文明の人工的創作是なり、此に於てか人工とは如何なるものなるかを明にせり、吾人はその目的を知れり、然りと雖極めて單純なりし最初の目的は次第に增進するその完成に伴ひて漸く複雜となれり、是れ他なしその創作せる個人の自然に對する感想に大差あるに依るなり、余は茲に再び前述の場合を操り返へすべし、人よ若し夫れ單調無趣味なる我等が日常營々たる職務を捨てゝ遠く山水淸明、靈氣浩蕩たる仙境に徘ふや各自の胸中に湧然として勃起する感想は果して如何、幽邃なるその自然の壯嚴に對しては如何に蒙昧なる人類と雖その平素の生活と一變して新鮮多趣なる現象に驚かざるは無かるべし、彼等の心意は茲に此の新奇なる現象に挑發せられ、自ら此の現象に注目し之を觀察し之を經驗し以て胸裡に一の新智識を加ふるに至るべし、太古の民族が自然に對する感想は單に此處に止まりしならん、然れど此の新智識を得たる後代の民族は此を以て止まざるべし、彼等は此が爲めに醒起し已れが心意を之に傾注して以て智的研究を遂ぐるに至るべし、さればその觀者の着想審美にあれば之を詩に歌ふべし、悟道にあれば之を宗敎の諭言に採るべし、彼が職業にして農ならば之を耕作に利せんと務むべし、工商の屬ならば以て勞力を省かん用に供せんとすべし、要するに各交涉は人類の幸福を增進せんとするにあり、而してその感想たるや觀者の見解に、智識の高低に、その職務の狀態に直接至大の關係を有するや言を待たず、されば人智の大に發達せる今日の人工を見よ、その大部は悉く吾人の生活をして幸福完全ならしめんとする目的に創作せられたりと雖また單に娛樂的滿足を以てその主なる目的とせるもの

少しとせず、然れども此れ又愉快なる人生の幸福を得んと欲するにあり、論じ來れば吾人の生活に缺くべからざるものは天然界の物象なり、之を以て滿足するを得ん、之のみを以て吾人は十分なる快樂を享有し得べし、然も之を利用すれば更に大なる幸福を得將た天然を凌駕して壯麗なる製作を得べし。

夫れ斯の如くにして天然と人工とは全くその起因を一にし、人類を以て基本とすれば又その目的を同うす、さればその間に極めて密接なる關係の存するあり卽ち人工は天然に依りて始めて之を得べく天然は人工に依りて始めて完全なるを得るなり、倩現代の人工を觀察するにその發達の偉大なる遠く天然の妙を凌ぐもの之れ有るも惜むらくは猶其處に極限あり、然り恐らくは極めて微少の區域に止らん、然れどもその起因たるや唯一の眞理たるのみ、而してその眞理たるや無窮にして全能なり、故に若し夫れ人智にして無限に開發し得べくんば遂に眞理の極限を極むと同時に人工は無窮全能の域に達せざるべからず、人工にして全能の域に達せんか、人工にして神變自在なるを得んか、人は最早人類に非ず、人類に非ずして彼は神なり、然らば全能なる人工とは何ぞ、吾人をして今茲に此を豫想せしめよ、彼等は既にあらゆる無限の神秘を開發し盡したり、自已の生活を圓滿なる完全の域に達せしめたるなり、彼等は遂に不死なるを得べし、人工を以て人類を製作し得るに至るべし、彼等は彼等の立脚地たる地球を改作すべし、遂に宇宙を意の如く改繕するに至るべし、而して宇宙を已が意の如く左右するもの是れ果して人なるか、吾人が今日の思想は之を呼んで以て神となすを如何せん、吁人類は遂に神たるを得るか。

吾人は目前に顯はれたる總ての現象を又一面より觀察して眞理の成る半面を窺ひ得たり、君見ずや宇宙間あらゆる方面に發現する物象はその起るや至微の原子より至大の具体に至る迄、果ては地球上に起り得べき事實乃至は人類間に起り得べき事件に至る迄悉く或る一定の週期に隨て發動するを、然り宇宙間一の原則として總ての物象はその長短、不規正則の軒輊を外にしては揮て一定の週期に從て發現し永久に一狀態に止ることなきを知る、人工の全能の域に達せし刹那は卽ち人と神とに基づく一事件が正に一週期を終へんとする瞬間にあらずや、彼等全能なる人類否神は更に第二のアダム、エヴを造り已れは既に開發し得たる神秘に依りて姿を隱すべし、茲に再び新たなる人類は創作せられ若き人性は始まらんとす、然らば以前の人類は如何に成り行くものぞ、我國古來傳へて曰く、八百萬神としいへる神達數多高天原に居ますと、また泰西にありては此の種の神々セッサリーなるオリンパスの峯に集ふと聞く、其眞疑は暫く措き吾人は此れに依りて所謂神と稱するものは一に非ずしてその數は極めて多大なるを知る、故に乞ふ吾人をして次の如く言はしめよ、八百万神とは前週期末に於て全能なる人工を得し人類を意味すと、されば現今の人工にして全能の域に達するに至らば吾人々類は卽ち八百万神として他界に遁れざるべからず、然らば天帝とは果して何ものぞ、余は之を以て眞理なりと解釋せん、余は先に云へり吾人は天帝の命に依りて發生せりと、同時に又言へり、物は眞理の發動に依りて發現すと、依て天帝と眞理とは一致せざるを得ず、而して所謂神とは眞理の蘊奥を極めたる人なり、彼等は天帝の意中を洞察せる人なりと信ず、吾人は人工を論せんとするに當りて此以上多く言ふを欲せず、人工は茲に其

一週期を終へん、然もその週期たるや所謂 infinity にして人工の此の全能の域に達するは猶無窮の未來ならんことを恐る、然れど無限と雖之を無限に進まば遂にその極に達せんことは幾度か無限の週期を經たる今日之れを想像するに難からず、吾人は更に人工の意義を明かにせんとす、人工の極限の目的は人類をして神の域に達せしめんとするにあり。

今や文明の潮流は日に月にその歩を進むと雖その人工的製作は之を天然に比して果して如何、無限の神祕に對しては寧ろ虛無とや云はん、見よ開發すべき眞理は猶無窮にして然も無限の宇宙に横はれるを、噫吁天は吾人に最も完全なる而して最も幸福なる賜物を與へたるに非ずや、詩人の天然に對するや如何なる感想かある、彼は詩を賦して天の偉業を讃美せん可なり、宗教家は如何、哲學者は如何、彼等は天然の勢力を考察し或は宇宙の原則を發見して以て人生安息の道を講ぜんとすらん又佳なり、然りと雖吾人が眞理に對する責任は之を以て足れりと爲すか、我等が義務は眞理を開發するにあり、然も之を人工に表はさゞるに至りては遂に何の用をか爲す、眞理開發に就きてチンダルは言ひけらく『我等は天然の現象中よりその智的價値となすべき事實を採るへき道を講せざるべからす』と然り吾人は天然を唯皮層的にのみ觀察して以て驚くの愚を爲さんや、彼又言へりき、

The outward and visible phenomena are with us the counters of the intellect; and our science woulad not be worthy of its name and fame if it halted at facts, however practically useful, and neglected the laws, which accompany and rule phenomena.

吾人は人工の研究を以て單に科學者の責任に歸するものに非ず、人工の發展はあらゆる階級の人類に依りて爲され、その利用心に依りその好奇心に依り及びその止むを得ざる狀態に基づき人智の無限なる啓發に伴ふて無窮に增進すべきものなるを信じて疑はず、立て天祐を楯に材智の矛を提げで、探れ神祕の籠る幽境を、關門閉づること如何に堅くとも遂には開くべき時のなどて無かるべき。

（拙劣なる言辭は余をして餘儀なく取止めなき冥想を吐露せしめたり杜撰の罪淺からず、乞ふ恕せよ）

白塵錄一節

みどり生

丙午一月白雪を蹴立てゝ山川を跋涉す、得る所果して何物ぞ。大自然の感激乎、あらず。天地大と自我小との冥合乎、あらず。蠢々乎として動く一匹の蛆虫、短く輕く足を揚げて猪口才にも白華を踏み潰すこと數里、揚る所の白塵僅に五寸、ハラ〳〵と揚りてハラ〳〵と散る、夢より出でゝ夢に消ゆるが如し。題して白塵錄云ふは、何等の得る所なき恰も白塵一たび空に揚つて再び虛に歸するが如き謂也。此の文は其の一節。

鐵瓶の湯氣の樣な息を吐いて漸う大乘寺山へ登つた。甘藷畑と思つて居た所は今は大入道に白衣

を着せた樣な姿、僕は狂氣になつて驅登つた。何たる壯大な景色だらう！右に小松原を控へ、後に白雪皚々たる疊山を背負ひて靜に入定せる大入道の坐り態！大入道の膝の邊から金澤市が匍匐つて出てゐる。金澤市を越え、黑い森を過ぎたあちらが例の日本海だ、雪の兄弟分の海だ――僕は如何しても海と雪とは兄弟だと思ふ、同じ水と云ふ父と雲と云ふ母とから生れた兄弟分としか思はれない――うす黑く海を彩つて居るあの黑い色は、天と云ふ者の裏にありそうな六昆世界から流れ出て居るのであるまいか。そしてあの海の黑さがこちらへ侵入して來るだらうか、この雪の白さがあちらへ突進して行くだらうか。否な〳〵、海がどうして可愛弟を黑い色に染めることができるものか、雪が如何して差出がましく兄さんに抵抗することができるものか。

何たる雄大なる景色だらう、極美の大發展だ、大自然と大自然との冥合だ、一致だ、雪化だ。千里四方の白雪は何とも云へぬ美しさだ、万里四方の大海は何とも云へぬ偉さだ。而も兩者の融和の樣は！仲の善い兄弟は互に抱き合つて無限の神秘を形作つて居るのだ。二人は永久に幸福であらう。かくして世界はいつも平和であらう。

僕はつく〴〵此の兄弟の仲善い樣に見惚れた。何だか自分までが嬉しくなつて來た、喜ばしくなつて來た。生憎太陽が一寸雲に入つたと思ふと僕の心にも小さい影が生じた。此の影の爲めでもあらう、僕は到々二人の仲を羨しく思つた。苟も羨しくなつた上は見事腹十文字に搔き割いて赤い心を雪に染めて自分の罪を二人に謝ずるか、若しくば眼を閉ぢて默つて家へ歸ればよいのに、僕は尙ほ〳〵大自然を見入つた。太陽は雲を離れたが僕の心に浮び初めた雲の影は益〻大きくなるばかりだ。遂に僕は兄弟の間が嫉しくなつて來た。あゝ此の時に大雪が降つて僕の生命を奪ひ去つて呉れたらよかつたに。僕も人間だもの、どうして大自然の樣な大きい心が持てる者か。僕は白い眼をして兄弟連を睨み初めた。併し駄目だ、海と雪とは笑顏を以て僕に接して居るのだもの「併し待て……あれは笑顏ではないぞ、あれは僕を侮辱して居る嘲笑的の笑だ」とこう僕は邪推し初めた。最早矢も楯もたまらぬ、僕は愈〻喧嘩し始めた。卒然僕は立上つて雪を掴んで矢鱈に海へ目懸けて投げ出した……。可愛さうに雪は泣たであらう、兄へ目掛けて投げらるゝのだもの……。併し雪は海に達しさうにもない、で僕は齒痒くて、頭惡くて、腹が立つて仕樣がない者だから今度は方針を一變して弟の方を虐待め初めた。先づ兄弟の眞白い顏を僕の汚れた靴で履みにぢつたが、尙ほ思ふ存分に腹癒がせぬ者だから、今度は雪の上を四方驅け廻つて狂ひ巡つた、たまらなくなつたので轉輾反側と七轉八倒の活劇をやり初めた。唾吐きかけるやら、大聲で罵詈するやら、拳固で張り擲るやら、靴先で蹴飛すやら、思ふ存分仕放題のことをやつて雪を虐めてやつたので、少しは滿足したのと、あまり勞れた爲め夫れとはなしに薄々とまどろむだ。

と思ふと二人の兄弟が手に手を携へて僕の方へやつて來た。今まで喧嘩の相手だつたものだから、僕は憤然として飛び懸らうとしたが、相手があまりニコ〳〵して居るので此方から手を出す譯にも行かなかつた。でも僕は未だ腹が立つて居るから、兄の一寸余所目した機を窺ふて、飛鳥の如くに飛び付いて、弟の方を掴まいて捩ぢ伏せて拳固に滿身の力を込めて、ポカリと腦天へ打ち込んだ。キャッと音がしたので驚いて見返ると、今まで海の弟だと思つて居たのは全く間違で、僕

の前には僕の可愛い本當の弟が頭をかゝへて泣いて居た、僕は仰天して弟に抱き付いたが悲むべし！僕の弟は全く冷え切つて居た。寒氣がスート僕の躰を通して過ぎた、併し幸な事には僕が弟の死んだのを吃驚する前に眠が覺めた。冷たいも道理、僕は雪に抱き付いて愉つて居たのだもの。眼を開いて見ると、日は爛々と輝いて、小鳥の群が愉快（ユガ）がつて居た。

白雪千里、何たる壯大な、愛しい景色だから、崇高だ、神秘だ、愛の塊だ、美の凝集だ、純潔の外何があらう。

大海万里、何たる雄大な、大きい景色だらう、崇嚴だ、感激だ、男子の粹だ、武士の精だ、偉大の外何があらう。

憎さ余つて可愛さ百倍とは（若しあり得べくんば）僕の現在の境遇だ、一分前の僕は一分後の僕ではない。僕は此の神の樣な兄弟に對して、亂暴極まる、言語同斷な侮辱を加へたのをつく〳〵耻ぢた、そして今度は進んで、嬉しさの余り泣いた、喜びの余り跳つた、はね廻つた。僕はたまらなくなつて大自然に震ひ付いた。眞白い雪に顏押しあて〻思ふ存分キッスした。僕は生れてから大自然にキッスしたのが今が初め、決して大入道の頭に食ひ付いた譯でなく、海と雪との永久の幸福を祈らむが爲め大自然にキッスした許りだ。

若　草（其の一）

み、

はしがき……書きしるしたことがらは、重に和歌について見たり聞いたりしたことを思いついたまゝにならべたてたまでのことで、別に趣味の深いところや奇拔のことのないのは、身に才なきがいたしゝ罪、これば〻かりは許して呉れ給へと、謹みてまをす……

（一）或ひは倭歌といひ、或ひは和語とよぶ如く、わが皇國の歌に種〻の別名あるをば、木村正辭大人が一一例をあげて說かれたものがある。先づ第一にこれをしるさう。たゞし例は煩雜にすぎるから、省くことゝした。

歌をわかといふことは、古へは更にいはぬことのやうに思ふ人これかれあり。ことわりをもていはゞさる事なれど、詩にこたへては早くより此方の歌をば、ことさらに倭歌ともいひしなり……また後には詩にこたへたるところならでも、うちまかせて倭歌ともいへりき……また此方の歌をさして、やがて詩とかけることあり。それにつきて更に倭詩ともかけるがあり……また和語ともいへり……かくて草假名してかけるものには、わかといへる事いと多し……またやまとうたともいへり。さてまた短歌をば詩といひ、長歌をば賦といひたることあり。たゞし詩とは皆まへに漢文の序あるによりて、それに對へてわざとしかよべるなり……古詩といへるも歌のことなり。

（二）古今集の眞名序と假名序とについては、色〻の說があるさうな。何が何だかわからねども、一寸袋草子の文を書きぬく。

眞名序、或說には假名序を感歎して、淑望竊模（ニストテ）之眞名云〻。或說には、爲（ノ）書假名序先（ヅ）令淑望

書二土代之草一也云〻。予案二之、件序實は紀家筆云〻。淑望竊模レ之儀相違也、非二大事一何可レ假二嚴閣之筆一哉、五代之儀ならば、件序模二假名一筆レ之計也、就レ中歌仙之得失を註レ之條、似二貫之所爲一重案レ之貫之が先以二假名一書二土代一令レ書二眞名序一歟、而假名序流布之條有レ疑、基俊本にぞ初に書二眞名序、奥に假名序を書て侍し、若有二所存一歟、又陽明門院御本延喜御本云々無レ序、若可レ有レ序否之議にて兩樣雖レ書レ序、遂に上奏本に不レ載レ序歟、而後日各加レ之歟、但仲實之撰如二目錄一後日令二上奏一也、而延喜七年大井行幸歌合歌二首在二此集一件歌等諸本に無二相違一猶以不審。

(三)これを物徂徠といふ先生、わづか百にも滿たぬ言葉で判決を下した。曰く、古今の序は、眞名の序を作りて後に、それによそへて假名の序をつくれるなり。文の體格かなの文章にあらず。

當否などは、知ったところにあらず。

(四)また關根正直といふ先生が、これについて論じたものがある。その考證は隨分くはしかつたが、その決論はかうであった。

……以上論じきたりし所によりて、予は古今集假名序は、漢文を模したるものならず、たとひ多少漢臭を帶びたりとも、他人の手をからずして紀氏みづからかゝれしもの、漢文序はまた後に假名文を模したるもの、たゞし兩樣とも上奏したるものならずと斷ずるなり……

(五)そんなことは兎もかく、鹿持雅澄大人の古今集序闇夜の礫といふがある。これはなか〳〵面白い。「余が歎慨するところ」のものといって、十三件あげてたく。それは一一序の文をば攻擊したものである。尤も終りにはかうしるしてある。

もとよりやどの烟さへあげかねたる身のさがとして、油なければ火ともすこともかなはず。されば、

闇の夜のゆくさき知らず心あてになぐるつぶての二つ三つ四つ
五つ六つと數へたてゝも、十に一つもあたらむやあたらじやは知らねども、この頃余に物とひし人に答むとて、心の中にかくは考へたるになむ。

が、文中には惜しげもなく痛論してたく。是非は知らねども、「世のなかにある人ことわざしげき……」といふを論じた所に、かういふ說が見にた。下にしるさう。

先づ歌を、思ふことをいひ出すものとすることは、違はぬに似たれども、歌の主本にあらず。歌は言を美麗くするを主本とす。心に思ふことをいひ出すは末なればそれに次ぐべし。いかにといふに、皇朝は言靈の德用國、言靈の輔佐國といひて、いひ出る言美麗しきによりて、神も人も感動することなれば、其のうるはしからむを最とす。古人の歌に、枕語を置けることの多きはさらにもいはず、三津の濱をいはむとて「あさされば妹が手にまくかゞみなす」と云ひ、長門の浦をいはむとて「をとめらがをげに垂れたるうみ麻なす」などいへるたぐひ數ひ難し。これ心に思ふことをいへるものにあらず、たゞ言の裝飾のみにて、詞をうるはしくせむが爲めなり。もし心に思ふことをいひ出すを主とする時は、これ等の裝飾言は無用の長物とやいふべからむ。近くこの集にていはゞ、「ほとゝぎすなくや皐月のあやめ草、あやめもしらぬ戀もするかな」とある末句は、

戀慕の情思を歎咏したるものにて、心に思ふことをいひ出だせりといふに違はぬことなるを、本句の「ほとゝぎす鳴くやさつきのあやめ草」といふは、たゞ「あやめ」をいはん料の裝飾言にて、さらに思ふ心にはあらざるをや。紀氏、この集の撰者なれば、この事知らぬことはなけれども、歌は思ふ心をいひいだすを主とし、言の裝飾をばそれに次ぐものと思へる趣は、あはれ言靈の妙道の顯れざりし世なるべし。

(六)長歌短歌といふは、いにしへに歌をうたひたるさまの長きと短きとにていへるなり。句の數にはかゝはらぬなるべし。(南留別志)

(七)和歌世話より、二つ三つ書きださう。

かすが野の飛火の野守いでゝ見よいまいくかありて若菜つみてむ

春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ

いづれをか、まされ劣りとかせむ。

君ならでたれにか見せむ梅の花いろをも香をも知る人ぞしる

世のなかの嬉しきも悲しきも、たゞこの歌にこそあれ。

青海原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山にいでし月かも

こゝらにてよめる歌にはあらじかし。

埋木の花咲くこともなかりしにみのなるはてはあはれなりけり

此の歌をよみて涙を流さぬ人は、いくらばかりありなむ。

櫻花さきにけらしも足引の山のかひより見ゆるしら雲

花をよめる歌の第一なるべし。

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれるしら雪

雪をよめる歌の第一なるべし。

(八)創見土佐日記二十日の條の注のうちに、仲麿の歌についてかう見えた。

さてこれを見て仲麿のぬし曰く、わが國にはこの歌といふものありて、天地ひらけそめし神の御代より、其の神たちもよみ給ひ、それより傳へひろごりて、今は貴賤となくわしなべて、かくの如く別れにのぞみ、或は悲しみある時には、必しもよむことなりとてよみ出でし其の歌といふ、海上はるかにうち見やれば、月そこはさし出でたれ。これぞ年頃こひしたひし彼のふるさとなる、奈良の春日の三笠山よりいでたる月かと也。さてまことは發句。「天の原」なるを、今「青海原」にとりかへて、時にあはせて興ぜられたるなり。

(九)仲麿が、明州にてよみたるといふ「あをうなばら」の歌は、盛唐の詩の佳境にて、李太白が「蛾眉山月」の詩と同格なるべし。定家卿の「あまの原」とあらためられしは口惜し。(獨語)

(十)しかし、古今集の羇旅歌の卷頭にすでに、もろこしにて月を見てよみける」といふ端書で、「あまの原……」とあるを如何にせむやだ。

(十一)師宣長翁の、常にもいはれ物にもしるされたる三十一言の歌、一言あまりても耳だち聞きぐるしきを、阿以宇袁の中にて、一言にても交りたるは聞きぐるしからずと也。そは喉音の輕き

なれば、いづれの音にも韻は必ず阿伊宇衣袁の五言に限りたれど、そがなかに衣はいさゝか重き故に、歌には六八言にはよみがたし。西行法師の、「風になびく富士の煙の空にさゝて云々」とよみし初句の、耳だつことは更なり。三句も衣は耳だてり。二條院讃岐の、

わだつうみの沖つ汐あひにかづくあまのいきもつきあへず物をこそ思へ

定家卿の、

忘れぬらむ恨めしと思ひ思ふても待つべきにあらずいはむともいはゞ

これ等は句ごとにあまりて、三十六言の歌なれど、耳だゝず聞きぐるしからず。定まりたる格は犯されぬものなり。たゞし定家卿の發句はわろし。(傍廂)

(十二)……この歌どもを人の何かといふを、或る人聞きふけりてよめり。其の歌よめる文字三十もしあまりもじ、人皆えあらで笑ふやうなり。歌主いとけしき惡しくてゐす。まねべどもゐまねばず、書けりともゐよみ据ゑがたかるべし。けふだにかくいひ難し、まして後にはいかならむ。(土佐日記)

そんなに獨ぎりでゐ臍をよらずとも、次い手にかきしるして置いて下されば、どんなによかったか知れないのに……

(十三)衣川の館、岸たかくありければ、楯をいたゞき冑にかさね、筏をくみて責め戰ふに、貞任え堪へずして、遂に城のうしろよりのがれ落ちける。一男八幡太郎義家、衣川に追ひ立て、せめ伏せて、きたなくも後を見するものかな、しばし引き返せ、ものいはむ、いとはれたりければ、貞任見かへりたりけるに、

衣のたてはほころびにけり

といへりけり。貞任くつばみをやすらへ、うしろを振りむきて、

年を經し糸のみだれのかなしさに

とつけたりけり。其の時義家はげたる箭をさしはづして歸りにけり。さばかりの戰のなかに、やさしかりける事かな。(古今著聞集)

誠に、何ともいへぬある美的感慨にうたれる。

(十四)それを一歩すゝめて、小町の「あなめあなめ」の歌になると、もう少し人を馬鹿にして居る。いま無名抄に見ゐた文を引く。

……業平の朝臣、髮ゐほさんとてこもりゐたりけるほどに、歌枕ども見んとて、すきに事よせて東の方へ行きけり。みちのくに至りて、やす島といふ所にて宿りたりける夜、野の中に歌の上の句を詠ずる聲あり。その詞にいはく、

秋風のふくにつけてもあなめあなめ

といふ。怪しく覺ゐて聲を尋ねつゝこれを求むるに、更に人なく。たゞ死人の頭ひとつあり。あしたになほこれを見るに、かのどくろのその頭の目の穴より、薄なむひともとはひ出でたりける。その薄の風になびく音のかく聞ゐければ、怪しく覺ゐてあたりの人にこの事を問ふ。ある人語りて曰く、小野小町この國に下りて、この所にして命をはりにけり。すなはちかの頭これなりといい

ふ。こゝに業平あはれに悲しく覺ゑければ、涙をはさへて下の句をつけふり。

小野とはいはじすゝき生ひたり

とぞつけゝる……

(十五)洛陽にも天文博士が妻を、朝日の阿闍梨といふ僧かよひて住みけり。ある時、夫他行の隙と思ひてうちとけて居たる所に、夫俄かにきたる。逃ぐべき方なくして、西の方の遣戸をあけて逃げけるを見つけて、かくぞいひける。

あやしくも西に朝日のいづるかな

阿闍梨とりもあへず、

天文博士いかが見るらむ

さて呼びとゞめて、さかもり連歌などして許しける。(沙石集)

何だつまらない、強ひて御追從に、アハ……とでも、いうて置くべい。

(十六)遊女欲レ乘レ船、船人以レ梶打二懸水一以レ袖掩レ面、泣唱此歌云。作者小野小町

心からうきたる舟にのりそめてひと日も浪に濡れぬ日ぞなき

巧拙はさて置いて、その實況いかばかりかと察せられる。これは新撰朗詠集だかに見ゑたもの。

(十七)題詠のこと、亭子院大井河行幸の時、貫之ぬしがかゝれたる序の詞をとりて人々よみたる、これを題のはじめといふべし。(北邊隨筆)

(十八)雄略の帝、河上の小野にみゆきし給ふとき、虻とびきたりて御たゝむきを嚙みけるに、蜻蛉またきたりて虻をかみゐて去りぬ。帝あきつの心ざしをめで給ひ、つかうまつれる人々に、蜻蛉をほむる歌よめとみことり有りけるぞ、題を設くるはしとやいふべき。(歌ぶくろ)

歌ぶくろの著者は、富士谷御杖で、北邊隨筆の著者も、おなじく御杖なのである。

(十九)俳人也有が蛙の歌を、た目にかけませう。

蛙々すみよしの浦のみるめのかりならぬ古今の序に殘されて其の德の高きや

かはづ〳〵廬山の雨のつれ〴〵に詩人も鼓吹とほめたきてその聲のたえなるや

蛙々木曾路の橋のそれならで幽谷に虹を吐いて其の心のあやしきや

蛙々玉川の水にすだき歌人のことばにめでられて其の名の世々に聞ゑたるや

かはづかはづ朱雀の小田に啼きつれて逢夜こがれの曉にうれし悲しとうたはるゝ其の哀れのわりなきや

蛙々涼川の古池にさびしき音をきかせてたきなの夢をさましたる其の功の上なきや。」

(つゞく)

文苑

歌が濱

斗牛

夢の心ちも甘かりし
昔は何を知れとてか
清しき星も身を呪ふ
今は何をか思へとや

（藤村）

月の卷

春の夜なり。
男体女体の姿をへだつうす雲の几帳、風なければ、夢ぬすまれむ憂きもあらじかし。
月は十日なり。
譬ふれば、ダイアナが、桂の宮より、錦繡の細帶垂れて晒すにもにたる、中禪寺の湖の上、さゞ波立てば、金糸もや散りなむ。
舟をとゞめぬ。
汀に低き波の調べはさながらに遠音鼓の歌が濱。

『明日は都へ歸り給ふ、濱の名は歌ながら、歌なきわかれ、許したまへ、涙は無韻の歌にぞあなる。』

舷によりて、すみ子はうつむきぬ。
ほの匂ふ淡紅色のリボン、胡蝶と髪にまつはれる二ッの翅はゆらめきぬ。
かざしにきらめく珠の露。
月の光りは、オーバルの頰にくちづけぬ。
姿！
われは冠らすべき言葉を知らざりき。
かくても明日は都に歸へるべき身の、そも何なれば、あゝ何なれば、愁ひをひめて、湖にわかれむとては來りしぞ。
胸に巣くへる形なき烏一ッありて、羽ばたきするにも似たるたもひ。
やゝありて
（たん身が指環のルビーにもにたる七ッのきらめける灯影のうち、いづれをわれらが宿のそれとはなし給ふ）
『いと〳〵薄きが』
（あらず〳〵、漕ぎこしみちすら二丁にはみたざるものを、何としてさばかり遠き距りとは思はるべき。）

『否とよ、うすきはわが身の光りなるかな。』

君が痛みをやはらぐ可き光りともなれの言の葉は、君が心のさし針となりつ。

眞珠の眼は雫しぬ。

げに、今宵のごとき君をわれは見ざりき。

二ッの靈は、むくろをつたひて、此時かたみにかよへるなり。

戀！

かすかなる聲は忽わが心にひゞきぬ。

いづこよりしてなるを知らず。

二ッの唇は結ぼれてあるものを。

戀！

ふたゝびの聲の強うひゞくと共に、わが血はどよみぬ。

すみ子はわが膝によれるなり。

何とはしらず、わがかひなは、あえかに細き肩をいだきぬ。

『君よ、堪へやらぬわが胸の苦しみを、もし……もし……戀と思ひ給ふひとのゐまさば、わが苦しみはそのひとの爲なるを思ひたまへ。』

苦しみ!?

あゝ、たん身が苦しみを、百にもなせる苦しみの、わが胸に潜める身なるを知りたまはずや。

あゝ、たん身がのたまひし言のはゝやがて、たん身に告げまゐらすべき、聲なき聲とは知りたまはずや。

明けなば立たむ、今宵かぎりのわかれ、つれなしと君や思ひたまはむ、あゝさりながら、わが身一ッをつれなきものにして、君にそむかん身の、なか〳〵にあはれなるを知りたまはずや。

想ひの花の冠にかへて、荆の冠をいたゞかむ身にくらぶれば、槍の衾にかこまるゝひとの、あゝ、幸ぞ多き。

わが心を舞台としてかづ〳〵の劇は演ぜられぬ、されどそは、云ひしれぬ悲劇にてありけるよ。

（生きてわれ、再たん身がごと、かくもあつきみ手をにぎり、かくもあつきいぶきの音をきかむとは思はざりき、あゝ、疾くにも語るべかりしを、今宵まで過しゝ秘めごとの、最早つゝむべくもあらず。君よ、わが初戀は破れたりき。）

思へ、あしたの露のすゝぐとき、薔薇の花はすぐれもせめ。

涙の雫にひたるとき、戀のあはれはまさりもせめ。

月よ、新たなる國に甦らしむべき光を、われらに送れかし。

雪　の　卷

羞ぢらへる乙女にもにたりてう西の湖、環とめぐる、青葉若葉の、水に投げてし、亂れぬ影の小屏風に、銀泥描きの浮繪かや、はちすの花の玉の盃、うす紫の波のふく紗、こゝにうつさば中禪寺の湖、見ぬカトリンのたもかげも忍ばるゝ。

角笛の音、牡鹿の聲の夕まぐれ、汀にひとり、賤はた衣の立ちすがた！

武者が兜の羽飾りのそれ何なれば振ひけむ。

あはれ、昔にかへすカレドンの楡の竪琴、音に通ふ歌のしらべはきかずもあれ、めざめし曲はしらずもあれ。

奏でいでむは胸なるハープ、絃にのらむは命の譜かや。

思へば三とせのむかし。

繪筆とることたぼねてより、初秋の都を扇とゝもに捨てし身の獨り旅。

風や勿來の、さらでも花はなき關の跡、空しく殘る畫帳の紙の白きを、こと足らはぬまゝに、越えゆけば、磯もせに散る波の卯のはな。

濱路の末は、蘆苅船の唄ゆるき松川の浦や、阿武隈のこれも松、三がい重ねて、松しまやあゝ松しまや五葉の松しま。

パレットの表は彩めきぬ。

夕ざれば野田の玉川、千鳥の聲はきかぬせゝらぎ、横のしぐれにしとりし袖をしぼりつゝ、われのみぞ越す末の松山。

北上の流れを立木と見ば、さかのぼる身は小猿のよづるにも似たり。

中尊寺、衣川も經ばみちのくも果なる淺虫のやど。

親は駿河につゝがなきをつげて、見返へれば見送る津輕富士、いくその山々に北の寒さのたへがたけれど、旅の身なれば、いなとはいはぬ最上川。

象潟のとまりには、昔翁がゆめのあとをふでにうつして、急げば年もくれたり。

岩代に入りて、東山に春をむかへぬ。

いづくにもしばしは旅とつゞる畫帳のかさまれば、鶯の聲にやどを出でぬ。

壇原の曙には梅が香に醉ひ、奈須のが原の暮れには尾花の穗に怖ぢぬ。

（かくて、こゝ中禪寺の湖のほとりに來りしは、ささらぎの初めなりき。

君よ、心してきゝ給へ、わが初戀はこゝに生れてこゝに逝きぬ。あゝ思へば、長かりしわが旅の、そは、戀の墓、苦惱のやどにかよひし途にてありけるよ。

わがはじめて到りしは、たん身がやどの離れにてありき。

數の歌枕にあき果し身ながらも、またなくながめし湖のうへ。

われもし、たもひのまゝの身なりせば、こゝにこそわが骨は埋むべけれとねがひしも幾そたび。

それ遂にいたづらとなりぬ。

さる、雪うすう降りつみし日のことなりき。

見たまへ、この濱のはしにあたりて、丹塗りの鳥居の立てるを、右によりて、芦にかこまれたる岩の一ッあるに氣づきたまはずや。

かしこにわれはうづくまりぬ。

畫帳に染むる湖のたゝずまひ、いかにわがふでの跳りしよ、いかにわが手の亂れしよ。

されど、ゆゑあるをしらず。
日はうらゝかに、鳥の聲。
かなたの岸の一本松の梢をわが筆のたゞりしとき、何思ひけむ、われかへり見し、
あゝ只一目、ゆくりなくも――――
瞼を剳りし、そは何ぞと思ひ給ふ。
佳き人は畫帳をみつめて、わが背に行めるなりき。
心は風車のごとくめぐりぬ。
繪筆は水の上に浮びぬ。
あゝ、是れ戀か？
戀なりき！
さなり、怨みなりき！
その夜なり。
亂れ藻染めの水色衣淸らにまとひ給ふ湖姫、わが前に立ち給ひぬ。
いぶかしや、そもなれば湖姫が……と、見上ぐれば、双のみ手なる美しの花環、われにさゝげんと、近より給ふ。
言葉無うして笑みませる朱唇をもるゝ虹のいぶき。
折こそあれ、何をもわかぬ怖ろしの人、とみに來りて荒き手に、花環奪ひて去りにけり。

露の眸、わが面にやどれば、姫もうなだれ去り給ふ、み衣（けし）のそよぎ、そよろとひゞくに、めざむれば、壁繪は落ちて、わが枕邊に横はりゐぬ。
君よ、夢とや思ひたまはむ、さりながら、そはやがて、現となりたるをいかにせむ。
わが初戀のひとは、たん身がやどの知り人にてありき。
兎角して二十日とさだめし日もすぎぬ。
かの君にわれは心をかたりたり。
君さびしげに笑みたまひ、わが身ははやわがものにあらず、されど心のこれのみは、とはにわがものなるべければ、たん身がれもひそらにきざめど、むくいんの幸なき身なれば、ゆるし給へとのみ。
かくして、わが初戀はやぶれたり。
それよりのわが身かたるもうし、きゝたまふもうからむ。）
涙にそみし思ひ出の繪卷物やうゝに繰り終ふれば、心の眼もつかれはてつ。
レーキサイドホテルにひゞく笛のねに。ならば消ねなむ身とも思ひぬ。
すみ子はやすからぬさまに、
『君よ、かのひとのみ名は何とか云ひたまひし？』
（きよ子の君！）
『きよ子？』

云ひさしてたゞならぬ色はその面をそめつ。

『きよ子とはわが姉上の名なるに。』

あゝ、わが耳そも何をかきゝし？

（姉上とや）

『さなり』

かたみに言葉なきしばし、清子とて世にひとりのみの名にてはあらぬとたもへども、われ、思へども……

（さらば姉上すこやかにゐたまふや）

『否とよ――――二とも前にみまかりぬ』

吁！

これかのひとなるか？

かのひとならばいかにすべき？

とばかりして、すみ子は懷より緋ぶく紗とり出來ぬ。

『君よ、わが姉上のたん眼とぢたまひし日の朝なりき。

姉上は、みとりに從へる人々をのけたまひ、わが身ひとりを召したまひぬ。

床近う侍れば、姉上はたもむろに頭をもたげたまひ、ものものたまはで、細りしかひなにまづわが手を捉りたまひぬ。

常に見知れることながら、このときばかり、鬢のみだれ毛ふりかゝるれ顏のやつれも今更のごと、たいたはしや、凹める眼に、しげ〳〵と、わが面をみつめたまひしが、はら〳〵と、涙は枕の上にしたゝりぬ。

ゐ堪へでわれも泣き伏したり。

やゝありて、姉上は、枕の下にひめたまひしをとりいで給ひ、ゆゐよしはかたらじ、わが形見ぞとたまひしは、是やこの緋ぶく紗、これを限りと思へば何かは知らず涙は形見の品を汚しぬ。

君たばゐたまへるならむ、見たまへ』

と、さし出すに、わなゝく手もてふく紗を解けば、なつかしや、雲の薫り、紙の一ひら！

たぼろげながら、月の光りにうつりしは――――

紅ゐの花環――――湖の姫――――怖の人！

さなりき、かのひとにわかれしあした、わが送りし、今はあだなる形見のいろ繪！

あゝ、遂にかのひとなりき！

われ如何にすべくもあらず、たのづからわが手は組まれぬ。

されど、神よとは叫ばざりき。

わかれしときのかの人をたもひ、名殘りの言の葉をたもひ、病みたまひしかの人をたもひ、更に、終焉のかの人にたもひ及へば、十六落汉の底にもしづみゆく心ち。

何なれば、かの人は病みたまひし？

もとよりもわれは知らず。

されど、いかなれば、毒盃あげし人の死をきける時、酖をひさぐものゝやすからぬ思ひに似たる思ひに、われや苦しまむとはする。

わが胸なる先達は、罪なりとわれにのらしぬ。

天も罪！　地も罪！

よし、さらば、罪なるわれをして叫ばしめよ

'O, schmölze doch dies allzu feste Fleisch,
Zerging' und löst' in einen Thau sich auf!"　(Hamlet)

花の巻

月に泣きしは昨日なりき。

繪は姉上のかたみ、やがて、わん身がかたみなれば、わが命の亡ぶるまでも放たじ、さは云へ緋ぶく紗は、姉上のやがてわが身のかたみとして、わん身にまゐらすべし、生きて再わん身にまみへんとしもたもはねば、わん身に恙のなかれよと、さらばの聲にわかれしは昨日なりき。

都にかへるみちすがら、わしへられたるまゝに、われは今初戀の人の寺に詣りぬ。

三とせの前の歌が濱、三とせの後の歌が濱、たもひ合せば、ふりし涙、あたらしの涙。

ふく紗出して胸にあつれば、たもひぞ出づる紫燕の釵青鳳鏡、殘んのうれひの、いづれ多き、いづれ少き。

墓石の上にたきぬ。

あゝ、「眠りの金露（こんろ）」にうるほひて、長しなへに夢みる人の康かれとこそ。

風に散る白桃の花はふくさの上に、香のけむりは淡うなびきぬ。　（完）

さすらへば

（一）

Birds, love and birds' song
Flying here and there,
Birds' song and birds' love,
And you with gold for hair;
……Tennyson.

萍水

友よ、蛺蝶一枝の花に戯れて春を呼び春既に來れり、幽谿と云はず僻林と云はず春靄靉靆として幼なきは花折りて簪とすべく老いたるはそこら木影に踞るべくまこと三春の行樂、雲は薄うたなびきて綠展べたる草色の煙、岳と云ふ岳たちこめて杳靄は陽炎の思ひと靡き〳〵河は戀の秘歌囁きて夢と流るゝ。されど月、雨、霞、柳暗は朧の姿なり、故に青春快樂の子は悵然として曰く「怨

しさは春こそ勝れ、」花前酌めば盃中に散る一片の葩やかでこれ悲哀の泡沫よ、浩歎の一曲は綿々愁を牽きて春の朧を纏はりつ連りつ、流れ〳〵て我が心のあや糸に觸るれば既に快樂、富貴の聲は我れに聞ねず。

(II)

O beauty, passing beauty! sweetest Sweet!
How canst thou let me waste my
youth in sighs?
I only ask to sit beside thy feet.
Thou knowest I dare not look into
thine eyes.
Might I but kiss thy hand! I dare not fold
My arms about thee-scarcely dare to
speak.

友よ、我れは今詩歌にのみ謳はれしと思ひし「美」を目のあたり見ぬ。

友よ、華やかなる夕陽は西の端山に今沈みつ、數千の年月絶えず亂れざるその笑む顏も悲しき心もつ我は眺むるをえ得ざりき、櫛柑茶色の薄雲昇り來る日を產衣の如く包みてより世の渾沌は消え、罪の塊は碎けつ、その尊き姿嚴しの姿今や消え行きぬ、我れはまことそを見るをえ得ざりき、友よ何が故と問ふを止めよ我が小さき狂ひに狂ひし胸はその見るにあまりに熱かりき。濱の微石と命競ほべくもあらぬ者、さすらへて此の海濱に立てば、松風の音、浪の音聞ゆるはたゞ之れのみぞ囂しき晝は歸らざる境に逝きて我れは女神が裳につゞまれつ、友よ塵と浮世をさけて此所にさすらへたる人ありと思へ、耳を欹てゝきくものは鞳鞳たる浪、見る限りは青草しきなせる如き海原、その稜々たる松の調、その囂々たる浪の曲に高く低く種々なるはひねもす戰の愁に憊れ疲れし呻吟の海が叫び、まして頗あらはに哀しみの春風になぶらせてそを聞くに於てをや、人々の呻き人々の叫び今は耳朶に響かずしてきくものはたゞ自然の叫び、見るものはたゞ自然の美！

短命の詩人「キーツ」は自己と自然の冥合を欲して己れが碑銘は

"Here lies one whose fame was writ in water"

とすべきを命しぬと、友よ、我れは「キーツ」をまねぶにあらねど今や自然の叫びをきゝつゝ自然の美を味ひつゝ死せむを欲す。

突如として鼻を衝くは馥郁たる香氣、白ふ朧の月を宿して白神鶴の天に昇るが如く我れに迫れば胸の血汐は溌きに湧き皷動は高みに高む、そはさくらなりき、そはさくらの白き愛らしく蘂より溢るゝ薫なりき。

(III)

Then it grew so tall

It wore crown of light,
But thieves from o'er the wall
Stole the seed by night.
Sow,d it for and wide
By every town and towe',
Till all the people creid,
Splendid is the flower"

友よ、そは月清き夕なりき、奥の細道訪なふものは風の破窓を射ると、月疎屋を穿つとのみを、折からの鐘の音は陰を縫ふて渡れば燈火寞滅、しとろなき雨ふりやみて月牛斗の間にあるとき「君よ、此の花活けて」と神秘溢るゝばかりの眞白きさくらぞ君は送り來しぬ。華麗なる花よと我は知らずして叫びぬ。

我が庭園にさくらあれど未だ春淺うして唇かたきものをそは優しう綻びたりき、綻びし蕾より身に染むばかりの暗光、燈火寞滅の机上に五彩の靈光と迸りてあゝ我れ初めて生きぬ、清らかなる星の天降りしにも譬ひつべくはた紅梅を手弱女にたとふれば是は正しく大丈夫なりそが眸は懷疑、煩悶、悲愁の色、あらゆる邪惡の崩しなく正義、誠、を法つてかくは咲けるよと囁くがごとかりし。

神境に我れは入りて蒼古雄勁の詩趣を味ひつゝ、槎牙たる月痕、老櫻くねつて龍の如き此の海邊のさすらへに今見しそれと變らざりき。

まこと友よ、さくらは花の王なり、山の峽に、河の沿に、籬落と云はずはた田園と云はずその神々しき眸を擧げて我れ等に神秘を囁けば下自ら經をなす、

櫻花咲きにけらしもあしびきの山の峽より見ゆる白雲　（貫之）

梅はあまりに瘦せたり、菊は凄婉に過ぎ、牡丹は艶なりさればさくらの奕々たる光を放てば百花ために色を失ふ、その咲くや美にその散るや更に美なるは櫻の外に求むべからず。

花間一壺酒、獨酌無相親、擧杯邀明月、對影成三人、月既不解飲、影徒隨我身、
暫伴月將影、行樂須及春、我歌月裴包、我舞影零亂、醒時同交歡、醉後各分散、
永結無情遊、相期邈雲漢、

季白は此の月此の花飲むを解せずと難すれど分れて後は水の泡永く無情の遊を結び相期す雲漠邈しと嘆ず、我れ今月下獨り酌むを得ざれどさくらの薫に醉ふて歌ひ、舞ひ、その靈光の迸しるところそこを求めて、美の空想にふけり骨は玉と化し靈は無我の「空」に歸せむか彈き出す春曲華かに昔の夢路をたどる心地は我れ櫻を見るにつれいとど濃かになりまさる。

友よ、永久自然の壯宏と自然の美とに懍慄せむか。

友よ、韡韡の浪、稷々の松風、低き高きは海の呻吟か非耶。

（完）

待春樓記

村上函峯

老友雲帆間中翁。買二宅於駿臺東麓一。名二其樓一曰二待春一。囑レ余記レ之。余初不レ知二其命名一。果何取乎。徐而思レ之。乃有レ所レ得焉。夫待レ之云者。有下因二時未一レ至而待ち之也。或因二境未レ至而待レ之也。蓋翁當二中興初一。奮二起隴畝一。徵爲二判事一。人皆歆羨。翁若レ有二不レ屑焉者一。方二其在レ官。撫字勞レ心。簡牘勞レ形。雖レ遇二好春一。無レ暇二欣賞一。故曰レ待也。今則既賦二遂初一。蕭散閑逸。俯二仰此樓一。興會所レ到。形二於詩一。寓二於書一。雲煙流動。光彩映發。雖レ非レ春。猶レ春也。程伯子曰。滿腔子都是春意。是心中之春。非二眼底之春一也。然非二其時一。非二其境一。則心中之春。亦鬱而不レ發。所謂待レ春者。乃待二時會之盛。境遇之適一焉耳。蓋人之憂樂繫二於心一。設使二翁有レ如二昔日鬱鬱之心一。寧得二今日此樓之樂一乎。且夫朝廷嘗用二藩閥諸賢一。輔レ政。制度一新。今諸賢相繼凋落。黨人代入二內閣一。重更新令。一若二春去復來。光風霽日。花木怒放。萬象爭レ妍。翁將下欣然援レ筆。慶二賞恒春一。以頌中太平上也。是亦翁之有レ待二於他日一者歟。翁聞二余言一。笑而首肯。乃書以爲レ記。

新体詩

胡蝶のおどろき

枯桑

昨日は望月の眞盛りも
かたむき初むる十六夜は
恥らふ樣に笠を着て
山の端出づる月の影、

黃金を紡ぐ和光
櫻のかげにふり來れば
萬朶の瑞枝もれすきて
地をくまどる搖影や、

朧月夜の夕もやに
浮びて高き樓の
火影にそむき人しれず
庭の面見入る艶姿
鬢づら拂ふ宵風に
蘭麝の香も散りまどひ、

夢路の夢に忍びいる
この世の春に醉ひしれて
花の木影にたりたてば
月さへ、身さへ櫻さへ、
霞にまがふ心地かな、

人はなくともさば此處に
月と花との影にして
盛りの春をやどしたる
名殘りの姿舞ひいでん、

花と見し
己が姿も風さそふ、
何處か春の宿にして
行きてとまりの港なる、
春の流るゝ河の名しらば
小舟うかべて下りたや、

舟の中には花片一のせて　二片、三片、
春の國まで——　追ひて行かんの心根も
あれ　あれ　いづこ、常世の
散るか、一片、　春の國。

玉藻

（若き子の歌）

水萍

茜碎けて日は落つ西へ
扉傾く古廟の壇よ
寂寞、不斷の領を迷ひて
病者、いづくへ、やせたる腕
苛み、鞫む渾沌の現世
千年の紐、今はた絶ねて
樹暗さすらふ禮敬の
法の灯に怯ぢたる姿

明日は——
戀の宮居に迷ひ入る
草と育ちし若き子も
花の一束此の胸さして
永劫の薫を嗅ばやと
君ひき添へて、まどろめば
冷たき涓、腦にはふりて
弱き腕ば震ひたり

戀の宮居は蜃氣樓
忽ち消ねて、渦卷きて
破壞、滅亡、野の霞
花と緣をたてば君
空しき望抱かれじ
鳥と別れを囁けば
猜疑の炎、燃ねそめず

門の筒井に水湧けど
人の心に千代來れど
君は玉藻につゝまれて
かへるすべなき海原に
眞珠と光る、海潮音
主我狂、幻、あゝ我れ迷ひぬ
病者、いづくへ、痩せたる腕

（完）

まぼろし

秋水

仇し野の　露や霜
消ねぬ間を　まぼろしの
さふやかに　忍ひよる
罪の世の　罪の胸

曙ならは　草の葉に
美はしう　露の虹
夕されは　入日なす

雲の榮　波の綾
これよれ〳〵　天つ女の
幻かあてやかに
いかなれは　はぢらへる
迷とや　迷なり
云ふべくば　なべて世は
迷なり　智恵も理も

うめき音を　忍ひねを
とことはに　もらしつゝ
榮なりや　人の世の
幸なりや　小さき身の

追はずとも　なか〳〵に
さびしみの　胸の邊を
とひよする　まほろしよ
力なれ　うつし世に

さかしう　智恵の實を
蒔きそめし　遠つ世ゆ
芽ばえして　しかすがに
生ひ茂れ　疑ひや
たのゝきや　苦みの
どけと葉に　空暗う
風吹かば　夜見の戸の
雨ふらは　むねやみの

やかて死ぬ　身と云はす
空蟬か　歌の音や
底暗う　わたづみの
罪知らて　波の曲
大御慈悲！　人をまた
笑ますべう　幻の
天童か　訪ふまゝに

たゝえんか　とことはに
うましし我か　み使よ

いましこそ　まことなれ
光なれ　闇の世を
いさゝらは　手引きせよ——

高鳴

鷗群れゐる波のうへ
海よ靜に鳴りわたれ
夢むすぶべく高鳴は
物皆憂しと云ふものを

大空わたる白くものの
ちぎれて落ちしかたみなし
沖行く船のそのまゝに
帆はかけながらたそきかな

水衣

波のつゞみは低けれど
胸の小琴は高うして
しらべはとみに亂れつゝ
あらぬむかしに迷ひぬる

港を出づる白帆こそ
またいつの日か歸るらめ
あゆみはよしやたそくとも
吹きくる風に送られて

さはれ亂れし調べより　むかし岸うつ大波を
昔ゆかしき樂の音の　ゆかしと胸の琴に聞き
ひゞきもやする我胸に　歌はそのまゝ春の日の
張りたる絲の朽ちぬれば　ひねもす濱に遊びしが

あゝそと觸れて音たかう　この日はからず來て見れば
たゞれむばかり高鳴の　なほ去り兼ぬる我胸に
響傳へしそれながら　影をさそひて亂るゝは
いまはた聞くと誰か云ふ　やがて咒ひの高鳴か

漢詩

春曉　露波

風吹紅霧晨光麗。水洗青苔鳥語頻。早起開窓掃書記。先呼門外賣花人。

春夜

小園花重暗香深。嗈喨誰家弄好音。春色惱人詩不就。淡雪朧月夜沈々。

和歌

白髑髏　潮歌伶人

白樫の森にさすらひ髑髏得て溜りし雨を飲むと夢みぬ
祇園町そと脱け出でし花笠に草の香薫る薄月夜かな
瑠璃鳥や詩聖逝きぬと橄欖の森蔭になくラインのゆうべ
しろがねの星の瓔珞月姫の繪傘に觸れて咲くや白菊
大梵や浪の底行く都路に御衣沈みぬ南無阿彌陀佛
白山やあした息吹の七彩に雪の大加賀珠の宮居と
鶯の來ては花ふむ手洗にこぼれを掬ふ月あかき夜や
北信濃千曲に沿ひて小春日を林檎ばやしに眠る鳩かな
朝月や銀杏こぼれて大寺の古りし羅漢に蛛蜘の巣ひかる
菫摘む大宮人の袂より月の今宵を蝶と生れし（詩人を）
草筆のなまめき若き葛の葉や夜毎銀河の露にしめりて
雪の夜を千鳥に忍ぶ曾根崎や今宵小春が宿の梅散る
元朝や富士の流れの霧深み小舟行くなり白鷄のせて（勅題）
天使いま啓示すと夢み月の夜を小萩が露に詩筆とりけり

白鷗や紫瀾稜なす大わだを掠めて飛びぬ人骨ふくみつゝ

露じめる青沼の宵を人知れず乙女泣くなり花藻の傍に

智恩院ならぶ御佛灯に映えてぬかづく我に說くや法華經

白萩の葉末をすべる露を身と獨り怨ずる異鄕の秋や

み吉野や化粧あでなる公達が御宴の月を花いくさかな

住吉を北へ一里の菜畑や胡蝶舞ひ行く夕の白壁（大坂の春）

麻畑夕日かくれて子鼠が右弼の肩に親を呼ぶかな（戸隱にて）

紅葉背に湖に沿ひたる水亭の灯影人あり發句よみらしき

鎌倉や伽藍の春は荒れ果てゝ椽に假寐の肘白き僧（蕪村の句を）

白桃の宴に姫が舞衣や御袖に花の影醉ひ宿る

尼廿才紫香に添へて蘆花焚けば登る烟に夢見姿の

興は高う情をこめし笛の音に蘆の花ちる瀉のはつ宵（河北湯舟行）

紫の挾霧さゆらぐ曉の流れ夢のやうなる岸の紅葉よ（犀川の秋）

舞殿や君見ると見し櫻月夜振るに小袖の夢のまなざし

浪枕博多に近く奇しき灯のならびて寄せぬ貢は來ずて（毛剃九右衛門）

（卅九年一月）

冬枯其月

霜

冬枯の廣野四百里霜冴えて月の遼河は瀨なく淵なく

凛として三十六宮霜冴えぬ粧凝らすか三千の美姫

雪

我が脊子は左な羽搏きそ小鳥の雪の小枝に今し眠れる

男の子皆熊狩らすと出で行きしアイヌの小村雪に埋れて

氷

厚氷ふたがる池のうろくづの動かで待たな花咲かん春

信濃なる諏訪湖の往來危ぶみし吾や浮世の氷滑らぬ

吹雪といふ題を得て戯に

鵝毛と歌ひ六花と詠ずよしさらば吹雪き倒さん詩の子歌の子

千住なる根津金吾君に繪葉書に

思ひ出づや尾山の春の朝ぼらけ花の上野の鐘に醉ふ君

新年河　空峰

行く水の音も靜に年立ちてはつ日匂へるをちの川つら

去年のちり流し果てつる川の面にけふあらたまるとしの影見ゆ

雜詠

野に山に雪は殘れどうち霞む朝な夕なに春は知られぬ　秋水

咲き出てん庭の梅こそ降りつもるみゆきの下に春を待つらめ

唯ひとり孤燈の下にものすれば門の戸たゝく越のさよかぜ

木曾紫光君か追悼の歌とて五首

雪半苔なき塚にとけもせばさしもさひれの色と泣くらん　秋水

胸に湧く歌は水面に降る雪か涙に消えてつまんともせす

淋しとは云はすもあらめ大御慈悲の惠のまゝに君に歌よむ

沈香は薫をたへに參籠の御堂にとめて消ねし君かな

妄執にやとるみ影はふと消えてわひよとばかり君の怨する

ゆくへ

御夢に南へ急ぐ勅使金剛山の朝嵐かな　水衣

元寇や天の高市の神集ひたくれ參ずる科戸に消ぬる

手綱くれ鎧は輕き關ながら駒踏みまよふ花や名こその

金色の雲やみどりの波の上を鴛鴦とぞ見たる眞珠狩る船

朧月に透しながらの眺には珊瑚の宮の近き海かな

曙會詠草

（うす雲の巻より）

○

竹生島撥のかたして鴉の海は螺鈿の琵琶と星月の夜に　斗牛

鐘樓にあした眺むる春の國流れ二すぢ貝咲く海へ

都染めに花を拔きたる襟ぞとも鴨川見たる山城の國

○

吹雪して白衣かさぬ世は冷えぬ氷柱ぞ越の花飾なる　紫清

凱旋の吹雪の宵やかゞみなす加賀の大路に馬の嘶き

骸伏す血潮紅なる修羅の巷冬の御神が清き手に雪

○

看經の聲とだえたる山寺の小庭の梅は香とかをりぬ　琴川

熊笹の尺にうもるゝ雪路や家へ凱旋るの鞍上の人

かゝる夜をひとりさびしきかなしみに從兄思へば燈火ゆらめく

美島

繪日傘は菜の花かげにかくれたり白き胡蝶のもつれて追へる
野の路を小櫛落しゝうなゐ子の姿をすだまてふと歌ひぬ
蝶々は遂にさびしく舞ひ終へぬ呪ひの琴の春の一日や

みご

○

やしほぢやしほぢのはてのいぶき戸の神のいぶきの波濤たちさやぐ
香爐いだき千鳥なく夜を加茂川や太刀佩く人の去りかねにけり
あまぎらひふりにし雪のはれぬれば秀でずもはしき嵐山かな

秋水

○

大和田を東へゆるきくろ潮の初日に高き新潮の香や
此の夕をうたげと廊に衣ずれの蘭奢ゆかしや春の燭
風ゆるう藻しほの煙にやはらぎの浦わ一里よ初春の朝

秋水

○

吹雪く夜は御堂の香に添ひもせず靈をみ空に吹かせつるかな
御名誦すと尼にはつらき宮あたり鉦のみ冴えし師走月の夜
蘆の矢のたちしをつりて魔性等の南殿にさわぐ追儺の宵や

弦月

○

傘や雪降る街をいくつゞき浪華は今日を顔見世にして
比叡颪駒の緋房もかくれては夢とやたぼす小野の夕ぐれ
冬の木立氷雨する日をつくろはぬ饑ゑし烏の呪ひ聞くかな

大南

○

紅葉散る春日の奥に月白しあはれときゝぬ鹿の一聲
七朝のむかし還御をことほぎて寺男いらじと媼まをしぬ
業平をそゞろ忍ぶの京二條麥の穂ゆらぐ古き御寺や

潮歌

○

戀の詩を雪によせては寒菊の花散る宵とつらき小窓よ
雪の夜の小傘にひとり待つ人をわびて辻占灯影に買ひぬ
み吉野や殿の御宴に舞姫が戀の小袖に花ふりかゝる

嵐月

○

海越えて高麗より參る貢船百艘春の風に吹かるゝ
しひられて踏繪をわぶる新妻の姿このまゝ天華とならむ
靄の香は涙ふくみてまつはりぬ流離人めく古沼の花に

水衣

○

きざはしを一段にして呼び給ふみ聲に伏しゝ緋の袴かな

よき月にそゞろ駒やる野田城の笛は矢頃を敎ふと冴えぬ
かゝぐべうふと忘れたる佐保姫の霞の谷にうぐひすの聲

俳句

紫紙草（春の巻）

紫雲

初夢やた伽の衆のとりぞりに
羽根の幸やさしき妹が息うけて
歌舞伎見の日より定めぬ松の内
思ふ人と組んで負けたる歌留多かな
梅さげて子に逢ひに行く雪の京
梅の戸に室町よりの使ひかな
白梅の庵に籠るや笙作り
梅ヶ香に墨する人や去雲亭
紅梅の椽にちらばるたもちやかな
書襖に人影薄く春の宵
春寒う皷をあぶる女かな
皷うてば小狐がなく朧かな
春寒や弓引習ふ小公達
雛の客乳人の膝に眠りけり
駒形に忍びの輿や朧月
涅槃會やたらが檀那の歌念佛
戀猫や紅い頸輪に鈴つけて
豆礫そとうき人の後より（節分）
京の子の相合傘や春の雪
住みの江は霞みて朝の女松原

七香車

（嵐月　紅芙蓉）

春風や靜にましる七香車　嵐月
弟子どもに暦くらする接木かな
大佛の若返りたる霞かな
天兵の胡騎を追ひ行く霞かな
唐人の驢馬をかり行く霞かな

○

春淺き籌焚きけり鴻臚館　紅芙蓉
涅槃會に鬼の涙の降る日かな
遲き日や刻みかけたる石佛
春淺み鶯に灯を怠らず
春淺き宵の焚火にあたりけり
虎がかへる化粧坂かな春夕
下駄跡に梅の花浮く雨上り
梅の宿月さす宵となりにけり
磯道や薄月にふむ蜆殼
凧の尾の榎に垂れて夕の雨
有る限り糸のばしけり霞む凧

東北の飢饑

もの種も食ひ盡くしたり春寒し
麗や佐渡へ舟出す女連れ
麗や午砲の音の遠ひゞき
里道を石曳く衆や風光る
遲き日や大佛前の獨樂まわし
川べりは紺屋並びて春日かな

木がらし

告天子

明月や眞淵が庭の歌莚

若草集

白水

白梅や踏み石冷へて院の夕

春の日や寶物見せる京の寺　浪奴
糊盆の糊のからびし寒さかな
此の冬を須陀も刹利も籠りけり
冬枯や三千坊の夢の跡

四高俳句會吟草

（冬の卷）

妓を送る箱提灯や小夜千鳥　紫影
西行の柳僧正の履皆枯れにけり
料理屋の門鎖しけり枯柳
柳枯れて七十二橋水痩せぬ　紅芙蓉
肩掛の小さきにあまる戀もあらむ
沼の水暮れなんとして落葉かな　嵐月
物干によき衣見ゆる小春町　白水
移り住んで草引く小春日和哉　秋雨
山陵や足跡さむく落葉す　美嶋
肩掛や菊見戻りの小提灯　潮歌
山寺に座禪の宵を落葉かな　浪奴
崇り井の柳枯れけり古籬　紫雲
張り板に疎き夕日や柿落葉
浮島の松薄月や遠千鳥
大寺に古典を閲す小春かな

雜報

野人語

◎斗轉して乾坤雨露に均しく、旬旦菁茅陽氣洽く、蓬瀛初景に浴して寰宇茲に丙午の新年に入れり。想ひ起す、去んぬる乙巳の今月今日、三軍未だ遼東滿韓の地に陣し、羽檄奔馳、兵馬倥偬の際に新正の祝盃をあげしを。あゝこの祝盃や、實にたゞ戰捷の祝盃なりさ。

聽け、今や上下歡聲溢れて戰勝國の新陽の賀に相和するを。見よ、蒼生赤子、皆新勅興國の將來を祝し、太平の聖澤を謳歌し、高く太白をあげて「萬歳」を唱ふるさまを。あゝこの盃觴や實に凱旋戰捷の祝盃なり。

あゝ今や年改まり、万象又新なり。風、枝條を鳴らさず、鸞風、四海を翔け、千古の勳績は八紘六合に照り、聖堯の威稜は、萬方億兆を震ず。遙に東皐を仰げば、紅暾影麗かに芙蓉の峰、蔚然たり。曖々たる冬樹、初日照々として晴煙空に接し、瑞氣氤々天に漂ふの處、皇城高く聳ゐて嚴然たり。百僚、丹闕に趨いて新春を賀す。下は齊しく泰平の壽を唱へ、屠蘇三杯謹んで堯代舜世を頌す。あゝ樂しきかなこの日。忘るべけんやこの歳。

瓶裏の寒梅、白玉纍々、瑞花奇草の金葩、僅に其嫩葉を破つて、清明の氣を吸ふの元朝、吾は獨りほゝゑんで方新陽の賦を誦す。

◎祝祭　古來、國にして祝祭の日を設くるは、娯樂に兼ぬるに紀念の意を以てせり。この兩者相兼ねて始めて眞の祝祭と云ふべし。希臘、羅馬の祝典盛にして當時の人心をして陶醉せしめしことは、世人の曉通する所なるべし、彼等國民は、ひたすら其の當日を樂しみ、往昔の興業今

に及びたる跡を追想し、只其の昔日の意を忘れざるを期し、益々以て武を揚げ富を增し以て國運の將來に伸張せんとを希ひしものと見ゆ。元來人類は祭祀好きのものなり。原始時代に於てすでに各種族個有の盛儀ありて他種族との交通の一端をひらき、以て種族各自の懇親を計りしことは、社會學上の一事實として認めらるゝなり。然らば、太古に於ても、近世に於ても祭祀祝祭は、國民發展上の一現象として行はれ來り、現に行はれつゝあるにあらずや。これを見ても如何に人類が、所謂「た祭り好き」なるかは、たやすく悟り得るなり。文明の度、高き國だけそれだけ「た祭り」は、盛なり。歐米のそれに比して、東洋の祭祀遙かに劣れり。一國內に於てもまた然り。往時の京都、如何に祭祀祝祭の頗繁なりしかを想へ。現時東都の如何に祭日祝祭の盛なるかを見よ。なにはともあれ、畢竟するに祝日に富みたる國民は幸福なり。

◉癖、癖は、通俗に「クセ」と訓む。彼の人はどうも手癖が惡いの如き則ち是なり。嗜好の病を癖と云ふ。余に山水の癖ありなどこの例なり。然して字義に曰はく「食消せずして肚中に滯る、これを癖と云ふ」とあり。要するに癖は一種の病なり。君子は、圓滿を崇ぶと云ふもこれ癖なり。基督の「唯可信神」とすゝめたる所謂平等主義もつまる所は、癖也、釋伽の「和光同塵」を說いたる眞如主義も予をして云はしむれば、これ彼の癖たるを失はず。人必ず癖あり。王濟の馬癖、和嶠の錢癖、杜預の傳癖等、古來人口に膾炙する所。又虞翁の宗癖、比公の鬪癖は、泰西に名あり。こゝに尾山城下の人士の癖をあげんか曰はくしん猫主義（他より見ては陰險底が知れずしてこそ〳〵と惡い事を行ふ流義）これ果して當れりや否やは保證し得ざるも、若しこれをして然りとせば、この忌む可き癖、ひいていつしかわが親愛なる諸子に染み及し、さらに惡癖となつて其の形を表すやも知れず、噫心すべし。心すべし。世の人この言を以て咒ふ可き妖言なりと云はば云へ。

◉名利如鰻、名と利とは恰も鰻の如しと云ふた人あり。たもしろき言ならずや。泥を搔き交せざれば鰻、容易に手に捕ふることを得ず。苟しくも名利を得んと欲せば、先濁世を嘆ずべからず、誠に嘆ずる勿れ。猿猴よく伎を演ず、人の如く一片の人參を與ふれば、忽ち伎を忘れて一片を爭ふ、すべて世の中はこんなものなり。

◉職を重せよ、試に吾國人に向て問へ。君は如何なる職にあるかと。「なにつまらなき職なり」と答へざるもの幾人かある。皆世人は、自己のとる所の職業を輕視し、人に向つてそれを公言せず、これ謙遜にあらず、自ら身を卑ふするものにもあらず、とんだ心得違ひと云はざるを得ず。

◉夢、夢ほどたかしきものはあるまじ。夢の研究も興あれば左に二三の說を述べん。バイロンは曰はく「人間の生活は二つの世界を有せり」と其の一つは確かに眠にて、夢は其の生命なり、夢には生あり、涙あり、樂しみあれば苦しみあり、平穩なる生活を經來る時には、非常の悲痛を與へ、又常に悲哀に沈みつゝあるものには、快を與ふなど、美妙の活力を有するものなり。第一に夢は神の御告、神の豫言なりと云ふ說行はれたる時代ありき。もしこの說を否定せばかの默示錄等の生命は、無に歸すべし、然して夢みたる事實は、其後に於て偶然にも一致符合する事柄を現實界に於て經驗す、則ち世に現實か、或は現實ならむとする事より外は、決して夢みず、これ神の御告なるの證なりと、かゝる

說は、近代の人には、ちとた齒に合はざるべし。何故に神の告たる夢が、人間に現るゝやの問題について次のやうなる說明をなしたるものあり。

「人は眠につくと在天の最も遠き遙かなる光が其の人の上を照す、其の光と共に人間固有の色々の觀念が働き始め、こゝに夢となるなり。」

この說を替言せば、人智にて不可測の天の威勢が絶えず流れ居りて、其の威勢の作用の反照をうけて人は、夢てふものを其の腦裡に認むるなりと云ふにあり、次に夢は、或る感慨より起るものなりと說を立てたる哲學者もありき。其の夢の長短は、胸中に起る感想、想念の連鎖如何にあると云ひ、我等が夢見ると云ふは、吾が何事をか心裡に思ふなり、考ふるなりと云ひ、更に其の想念が胸中に幻を生じ其の幻が就眠中の夢なりと說きたり。これを要するに、夢の根原は人間の想念にありと云ふ說なり。この說に基き種々の學說生じ、夢の研究したるひま人多かりしなり。こんなことをかき綴る野生も又閑人たるを失はず呵々。二月中旬稿　（紫雲生）

◎漫語

主義

○方法は變ずべし而かも主義は一貫せざる可からず。主義は自己が自己に認めし眞理たれば也。

○屈するも可、辱せらるゝも可、若しそれ主義の命ずる所たらばこれ等の者畢竟些事たるのみ、其屈するは眞に屈するに非ず、其甘じて辱を受くるは自ら許す所あれば也。

これを矛楯と云ふは誤れり、方法は時と與に推移せざる可からず。

○吾人は主義の一貫する人を稱して偉人と云ふ。但し主義の一貫とは頑固蒙昧、人の說を容るゝに吝なる如き野人的根性を云ふに非ざる也。

人格

○君士これを云へば正、小人これを云へば邪、もとこれ同一の事にして何ぞ前者が言の正にして後者の言の邪たる。他なし、これ人の人格によりて推斷するを以て也。人格や豈忽諸すべけんや。

○われこれを行ひ而かも人これを冷笑し彼これを行ひ乃ち人これを賛す同じくこれ同一の行爲也、焉んぞ其間毫毛の差あらむ乎。

かの輕跳浮薄の徒、往々適切なる語を吐き反て世人の嘲罵を被り、かの高廉清潔の士、時ありて失行あるも人これを看過するは不當なる如くにして未だ必しも然らざる也。

○物に內外あると同じく言にも內外あり。「我この月に對してそゞろ斷腸の思に堪へず。」これ等しく人の聲なり然れども其內容に至りては天淵もたゞならざるものあるに非ずや。僞憤者ありて云ふ。小人の言なるが故に舍てゝ君子の言なるが故に採るは酷も亦甚しきものなりと、こは實に言に外內の差あるを知らざる獘なり、吾人未だ酢樽より水の洩れたるを聞かず。汝の聲を鐸して本ならしめんには少しく人格を重せよ。汝の言行用ゐられざるは汝の修養未だ猶淺ければなり。

悔心

○愚者これを蔽ひ誇者これを諱み奸者これを飾るは悔也。天下を擧りて皆これと遠ざからむを思ふは蓋し悔心の起り難く維持し難きに依るとせざる可からず、それ悔心一度び胸中に萌さんか、戚焦寸時も安じ得べからず、爲に道義に明き智者をして往々悔心を有するも直にこれを捨てしむる所以にして、又以て其前惡を重ねしめ

畢にこれとなるゝに至らしむ。恐るべきは悔なるかな。

○悔心自ら生じこゝに人を善導するやかの道學者が全力を盡して企つるも及ばざる所、悔心は思ふに吾人にとりては最良教師たる也。

人誰が過なからむ、若し過なしと云はゞこは以て人と云ふ可からざる者、鬼神に非ずんば自覺なき禽獸の類也。人誰か悔心なからむ、偶これなきはこを被ふ者の厚きを以ての故にして而して將に象人と云ふべきものなり。

○苟、悔心を起しこれを維持せざる者は寧ろ初より起さゞるに若かず、蓋し其未だ發せざるや意覺るに暇なき所以、其發するは既にこを自覺したる者たれば也。自覺して猶これを改むる能はざる者あらば其害や其未發の者と比するに果して如何ぞや。

○悔いよ、而して改むるに吝なる勿れ。これ聖者の誡也。

腕力制裁

○昔獨乙國中央集權の制弛ぶや道德の廢頽こゝに極り、法律悉く蹂躙せらるゝに當り、猶人道救濟の一法として各地方毎に一種の腕力制裁ありき。

○云ふ勿れこれ亂世の時のみと。笑ふ勿れこれ野蠻の遺物と。今の世果して友に信なるもの、眞に自已を欺かざるもの、眞に主義を維持する者幾人かある。彼等には一切の道德は皆無也。

○靜かに反省を促せよとは既に過去の事のみ。狡陋劣隱險奸譎貪婪悖戾これ等は悉く彼輩が恃みて以て弄ぶ所。亂世とはたゝに劍をかざし戟を閃かすの謂に非ざる也。

○よし社會的無形の制裁ありとも未だ以て人の行爲を束縛するに足らず、況んや社會そのものの腐敗したる當今に於てをや。

○彼等かくの如く姦獰にして猖獗なり、而してこれを牽制すべき道德の輔佐たる社會的制裁はかくの如く弛緩にして無氣力、加ふるに偏頗たるさらひあり。人智の發達文明の進歩とは日に醜汚を生むものとせば則ち止む、苟も文明とは公德心を增進せしむる者とせば大に考察して其發展を期せざる可からず。

吾人はこゝに於てか、かの腕力制裁の必要を認む。

○云ふを止めよ、汝奇嬌の言を弄する勿れと。毒を毒として用ゐるは庸醫の事のみ。土塊に埋れたる金剛石は今帝王の冠を飾るに非ずや。

この夜

○此夜十六人の友と別れて家路に辿る。殘んの淡雪未だ消ねず、をり〳〵の店の燈火檐端の電燈、唯闇の夜を淋しく照すのみ。

夜は十一時に近かりき。遠く幽かに千鳥の啼く聲。

○あゝ燈火、友よぶ千鳥。聯想は疾風の如く刹那に胸を亂せり。斷腸の思、何者かこれに過ぎむ。

是非の辨は暫くこれを止めよ、その仇敵たると愛者たるとを問はずあらゆる嘲笑と讒誣と咒詛とを受けて、遠く去る者あらば吾人はた何如にしてこれを送るべき。

○是非の辨は僕これを知らざれば暫く說くことを止めよ。宜なる哉十七の人悉く一堂に集り黯然として涙に咽びしことや。

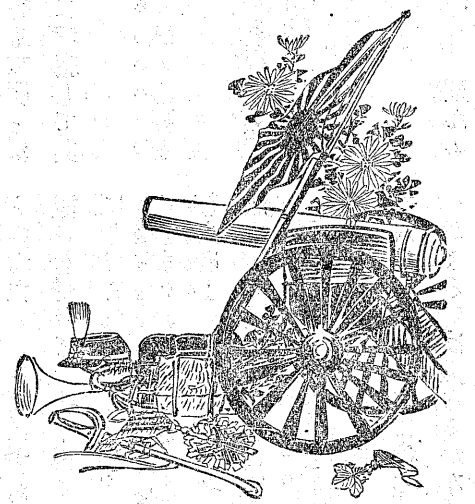
吾人は絕對に本能主義に責する者に非ず、又絕對に所謂道學主義なる者に贊する者に非ず吾人は實に其中間に彷徨するものなり。

かゝる者は災なるかな。——

泣かんか笑はんか。

笑つて而して泣け、あゝこれ今夜の事也。

（水の人）



附録

越の旅

某

明治三十八の年も暮れに近づく、と云つて別に世に立つて居る身でないから借金から苦められるといふ事もなく歳暮を送り取りする心勞もなく、新しい着物を買はふでなし、只少しの關の山とでも云ふべきは學期の終りにある試驗位なものであらう、それも十二月の二十三日と云ふに終つたので自由なもの、何一つとして吾々の身を束縛するものはない、これから二週間は冬のた休み

あまり自由となると併し身の置所に困らんでもない、此間金澤に居て雪や雨に毎日降り込められて一室に閉ぢ籠つて居ようか、まるで昆虫の冬籠りの樣で餘り氣のきいた事でもなさそうだ、其れでは何か善い工夫は無いものかと考へて居た所丁度友人が何處か旅行しようかと誘つて呉れたので早速賛成して試驗の終つた翌日の二十四日に出懸る事とした。

旅費とて多くある譯でもなく、まさか乞食をして廻ると云ふ事も出來ないから何れの地に向ふにしてからが、そんなに遠く迄行かれやう筈はない、勿論贅澤などするのは吾々の本意でない只目に見、耳に聞いて見聞する處を廣めようと云ふにあるばかり。

何處に行かうかと相談もしかけて見たが何だか面倒臭くて先づ大体は富山地方から越後の海岸の方に行かふと云ふ事にして置き後は財嚢と相談の上にしようと云ふ事にした、何事をするにしてからが豫め大畧の目算を立てゝ置くは必要である事位は知つて居らんでもないけれど何處迄行かうと關せずで、矢張りこゝらが青年の奮鬪的精神のある處だと自惚れて置かう。

金澤の停車場で會合する約束をして分れた、旅裝と云つた處で全くの着のみ着の儘、洋服に外套脚袢足袋それに書籍が二三冊極めて簡單なもの、晝食を少し早く食つて停車場に出かけた、冬の日の降り勝な北國の陰鬱天氣も何とした事か今日は全くの快晴、僕の心にも一点の曇はない、旅行の面白さも髣髴と念頭に浮んで居るので何となく足も輕く停車場に着いたのは滊車出發より殆んど五十分前、やがて友人も來た。

滊車中の身となつてから二時間、早や吾々は富山に着いた、なんだこんなつまらぬ停車場かと初めて下りた時は口も閉ぢられない程であつた、後で聞けば之れは假の停車場だと云ふ事だ神通川に架する鐵橋に餘程費用を要するので今に放棄せられて居るのだが何れ北越線と連結する事

になれば市の中央部に設けられるとか、口を開けて居ても初まらぬから人の多く進む方に吾々も歩を移した、何れ是れが市に通ずる本道と考へたからだ、茶屋の叫び聲も空吹く風と聞き流してやがて進みに進むと一の橋に來た河には水が少しもない、一体神通川の洪水で富山市には一年數回侵水するから之れを防ぐために別に此河を穿つたのだそうだ、尙進むと神通川に架せられた神通橋がある橋下には清らかな水が流れて居る河巾は隨分廣い、對岸から一帶に富山市が横はつて居る、遙かには皚々たる連山が日光に映じて美しく市を瞰下してそれに一層の美を添へて居る。

富山市の大火と云へば現時吾々の腦裡に殘つて居るが數回の大火があつた爲でもあらう家屋の構造は土藏作りで新しく、美しく黑塗にせられたのが多い東京の本郷邊に似て居る樣に思つた、金澤の家屋より一班に奇麗で郵便局は石造であるし銀行でも十二銀行などは黑塗りの耐火的構造で金澤の何處にあんな銀行があろう、又日本全國知らぬものとては皆無の有名な賣藥の元祖地だけあつて到る處賣藥商店が見受けられる市中も藥嗅がするとはあまり誇大かも知れんけれど何となく其んな氣持がした、呉服店も隨分軒を列べて居るのを見た。

人の風俗で別に變つた處も見なかつたけれど女が眞綿製の饅頭形のものを肩から脊の半分位の處迄着て居た、肩から前は細で帶に結び付ける樣になつて居るらしい下女に何と云ふかと問ふと初めは笑つて答へなかつたけれど遂に「釣り綿」といふと白狀した、當て初めると外す事は出來ないと云つて居たから、どんなに温いか想像されないでもない。

宿屋の詮索には少からず困難を感じた、いくら繁華と思はるゝ部分を徘徊しても滿足なのが目に入らない、彼是する內に日は暮れ初める寒さも感ずる胃の方では飢を訴へる樣になつたので瘠我慢も爲し切れなくなつて次に目に入つた宿屋に良否は兎も角泊る事と決定した、郵便局近傍の松田某といふ家に入り込んだ八疊の陋室、床もない隨て掛物、額板などの有らう筈もない襖の間は一二寸も明いて居る、併し不平も起らぬ不快にも感じない單に心は快然たるもので持つて來る澁茶で咽を濕し運搬せらるゝ膳に胃袋は滿足を顯はす、全体贅澤などの感念は毛厘無いので云はゞ『ボヘミアン』主義でやろうと云ふのだから。

種々な旅行の快樂を夢みつゝいつしか熟睡した、目のあいた時は翌二十五日障子に吹き付けらるる雨の音がして居る、雨も時には嬉しく感ずる事もあるが其れも極めて稀有な事でまして旅行の空で雨足の繁きを見た時の感じは一種云ふべからざるもので不快と云ふばかりで云ひ顯し難い、其れ以外に、も一つ何か云ふべからざるものが隨伴して居る樣に思はれる雨が降るからとて躊躇しても居られぬ、いや吾々は躊躇逡巡する程勇氣に欠乏して居らぬ雨が降つたとて何の事が有ろうぞ。

今日が抑もの歩み初めだ、健脚に其身を托して万障を踏破して快哉を叫ばんと欲するのだ、何、通常の道を行くのに万障とは當らないかも知れないが併し徒歩旅行は思つたより困難だから必ずしも左樣云へない事もなかろう、そは兎もあれ草鞋を足にし身に外套を纏ふて勇ましく出發した、身体は燃ゑて寒さは少しも感じない、昨日瀛車中では寒さの爲めに妙に肩のみ縮めて居たが今日は全然反對である。此往來には『ガタ』馬車が往來するとの事であつたが途中出遭つたものでも十を下らない程であつた、吾々は間斷なく二本棒を踏み替へて居る馬車中の人は座して居る吾々は直接風雨の玩弄物となつて居る彼等には不完全ながらも屋根がある窓には玻璃が有つて風雨を凌ぐ樣に出來て居る併し歩行して居る吾々と乘車して居る彼等と何れが愉快で有ろう何れが其身の温かさを感ずるであろう、何事でも一から十迄結構に行くものでない足の苦痛を感じない代りに寒さに慄ふであろう、などと思ふと乘車して居る輩が氣の毒にも思はれた、乘つて居る人は餘計な御心配と我の老婆心を笑つたのか知れない。

吹く降る常願寺河岸の堤上に於ける吾々、先程の得々たる考も腦裡から去つて何だか悲歎に陷りかけた、友人の先生は雨も雪も何かはと盛に吹いて居る鋭鋒當るべからずと云ふ有樣、實際の風よりも之れの方が隨分強かつたかも知れない。吾々に向つて來る人々は風雨の正面攻撃、甚だ困つて居たらしい、殊に女の人などには赤の下着が全く雨に濕されて足に卷き付く、あゝ矢張り自分も厭になる程でありながらも河向ふの火事視する事が出來なかつた、また此あたりであつた、丁度通り懸りの馬車に何處か故障が出來て御者が不平たら〳〵で雨中に其れを修繕して居た。

やがて東水橋に着いた、是れからは海岸に沿ふて進行するのだ、海岸の老松は吹き來る風と雨とに音を立てゝ居る、併し海は極めて靜穩で濱邊には漁夫が藁製のものを着て歩み廻つて居る、こんな處を見ると何だか古歌も思ひ浮ばるゝ樣であつた、僕が文人なら或は何くれと詠み出だしたろうに其んな風流者でないとは情けない、併し歌を詠まない迄も彼れにつれ是れにつれ種々の感想の腦中に運動して居る事は明かだ、歌として現はるゝと現はれないとの相異のみで內部に立ち入つたら同樣であろう。大きな舟の蔭に雨を避けて暫時海の景色に恍惚として居た。

風は少し靜かになつたが雨は依然たるものだ吾々の進行も亦依然として變らない蟹の樣に横這ひもしなければ袋を被せられた猫の樣に後退り

もしない。

滑川といふ處も過ぎて今日の宿泊地と定めた魚津に着いたのは午後の三時頃であつたろう、富山の宿屋から此家にと差出した紙を見ると藤本屋として居る、どんな家かなどゝ贅澤も云つて居られない早く草鞋を解いて休息したい情に滿ち滿ちて居る。案内せられた室は薄暗い六疊の一室、いかに草鞋を穿いて來たからとて虐待も程があるではないか、車にでも乘つて來れば今少し上等の室に導くか知らん、いかにと云ふも此室では腹の虫が詑と云はぬ主婦に命じて他の室に導かせた、是れとてあまり氣にも入らないが海の見ゐるあたりであつたので我慢する事とした。

炬燵に温を取りながら互に暫時は默然として居たがやがて吹き初めた「併し愉快だつたね」「ウー面白かつた」「ガタ馬車はどうしたろう」「何に一里も後で思圖づいて居るだろうよ」。互に負け惜みを云つて居ると思ふ人もあろうが困難の後で其當時を考へて見ると實に愉快なもので額に寄せて居た皺も笑の種となるものだ、吾人の當時の刻苦勉勵も後に至つて考へて見ると愉快に相異ないと思ふ、何事でも苦樂は蔭の物に從ふ樣に隨伴して居るから。

漸次身体の暖まるにつれて例の「メヒテ」感情が起つて來る、こんな處にでも美味い菓子はあるかと下女に云へば「あら此んな處つてひどく御座ります、此處は、これで開けた處で御座りますよ」と云ひながら大きな黑目勝な眼で凝視しながら微笑する、二八の一少女生れてから他の地に蹈み出た事もないであろう此處を都と心得居るであろうか、間もなく「カステラ」の一鉢を手にして來て無言で置いて去つた、直ちに口中に運びながら互に見て笑つた「開けた處の菓子はちがつたものだね」彼女は聞いたやら否や。波の音を耳にしながら頭を枕の上に横へたのは十時頃でもあつたろう昨日とかはり六里歩んだのだから疲れて熟睡した、吾々の鼾聲を微けく彼の波の音と和して居たであろう、熟睡、之れを得んと求むる人も隨分あらう、いくら富貴の人が金力で求めんとしたつて駄目だ、之れこそは勞働に付隨の賜物で身体を働かして初めて得らるゝ、炬燵にいぢり付いて居たり一室に燻つて居るた方には氣の毒ながら其味は知る事は出來ぬ。

廿六日またも雨とは無情、魚津から二里の處に三日市と云ふ處があるこれから泊村に到るに道が岐れて居る一は海岸に沿ふもので他は山間を通るのだ、前者は近い後者は遠い、併し吾々は後者を取つた、何故といふに此路が黑部川を横ぎる處に三橋の一なる愛本橋が架せられて居るからである、初めの程は何一つ眼を刺激するものなく畔上に立つ冬枯れの樹に烏が群つて居たり、路上の馬糞の所で雀が宴會を開いて居たり

路傍にはあちこち藁葺の一軒家が寂しそうに立つて居るばかり、それから登る畑は留守番の婦女子が歸り來る親父や息子を勞はる爲の御馳走でも料理して居るのだろう。實を云ふと欠伸しながら吾々は歩んだ足こそ動いて居るが心は半分位寢て居た併し浦山とかいふ村のあたりからは半睡から醒めた、路上にある雪が今し融けかけて居て之れを履み行くのが非常に冷たかつた爲めでもあろうが大分山奥に近いたので光景の大に喜ぶべきものがあつた故でもあろう、清楚な溪流は石に碎けて樂しき音樂を奏でゝ居るし大きな縱の木は晝猶暗しと云ひたい程茂り合つて居て、其間に散在して居る家々に一層の風致を添へて居る、夏であつたらば今迄脊を流れた汗も乾いたであろうし水を掬して飢を醫し石に腰を下して快哉を叫んだに相異ない。さて愛本はと聞くと今一里といふこのあたりの一里ならば我慢も出來る吾々は無言で進んだ。

「君あれは河の音ではないか」と云ふ友の叫聲で不圖忘想から我に歸ると何だ既に般々蓼々たる音が耳に入るオヤ橋が見えるではないかと思ふ間もなく吾々は既に橋の下に來て居る連峯重疊たる間から迂曲して流れて來る河の水は藍よりも濃く流勢の激しい事、それが對岸の岩礁に衝突して摧ける、濆沫はまるで白き玉が飛散するかの樣だその岩上にある松は河上に突出して居るが水鏡に寫る自己の影が見たいと望んで居るらしい、併し永世其望みは滿されぬであろう、それにつけて僕は松子さんに云ひたかつた、水鏡なぞ見てた化粧せうなどゝの望を懷き給ふ世は既に君の天眞爛熳な姿に醉ふて居る、白沫と君の綠との對稱は言外に絕して居る若し水が君の姿をた目に懸けたら君が自惚れ給ふを慮つて天が心しての業であろう只君は其操を保ち給ふならば君を慕ふ心は幾久しく變らないでしようと。

吾々は無言で立つて居るイヤ言つたとて聞ゐない、やがて橋上の欄に倚つて居る各々の動作が一致する處が面白い、橋は兩岸の岩と岩とに架せられて居る、睨み合つて居る彼等の意志の融和を計つて居るらしい、橋上から矢の如く流れるの勢を見ると目も眩むばかりだ、梁木の上で逆立をするた方は兎も角吾々は臀から誰かに押し出さるゝ樣な氣がして長く止まる事も出來なかつた、橋の對岸には二軒の茶屋がある吾々は上手の方に入つたらしい全く無意識だ腰を下して今度は反對の方面を觀て居る、た茶をといふ下女の叫聲が大きかつたので漸くの事で吾に歸つたまるで夢から醒めた樣だが夢中の景色が眼前に横はつて居るとは有難い、菓子を二皿平げた之れには茶屋の主婦驚いて居たらしかつた、勿論御馳走はなかつたけれど飯の味は格別であつた、之れだから旅行が面白いと云ふのです。

泊村に着いた時は四時頃、冬の短い日であるか

ら段々世は暗くなり初めて居る併し吾々は尙二里離れて居る越後の市振迄行く豫定である實は此處で泊りたかつた既に其泊と云ふ名が大に吾々の心を牽きたけれど兎も角目的地迄行く事とした、宮崎あたりでは既に暮れた路の兩側にはあちこち大きな老松が立つて居る、丁度一人の老婆が荷物を脊にして家路を急いで居るのに出會つた、振向いて吾々に聲をかけた何を云つたのか理會する事は出來なかつたけれど、其日凱旋兵士が二年の間目も夜も念頭に浮べて居た故郷に歸ろうと云ふ筈らしかつた、暗がりで老の目に吾々が其兵士と思はれたであろう、無理はない金澤からでも時々兵士に擧手の禮されてまごつく場合が有るのだもの。これは老婆の後の話で想像したのだけれど初めの程は夜道の恐しさに吾々に伴はん事を願つたのかと思つて氣をきかして寂しければ道連になつて上げようかと云つたが辭退して斯々と語つたのであつた、分れる時に「本當に兵隊さんではありませんか」と繰返したが其聲は今でも耳の底に殘つて居る。暗さは暗し雨は降る泣き面に蜂、勞れた足を曳き摺りながら進んだ、橋は出水の爲めに押し流されたのか假橋が妙な工合に架せられて居て一歩ごとに動搖する、小村に來たと思つたとて家また家雨戸を閉ぢて居る、何れにしてからが百姓や漁夫の敗宅、薪を折りて暖を取りながら火爐の傍で一家團欒して語り合つて居るだろうとは想像するけれど破れ戸の隙から漏れる火影も見えない、斯な事はない筈だに、どうした事かと下らぬ處に迄も理屈をつけつゝ漸くの事で市振に着いたのは六時半頃であつたろかう。

窯業

山田喜久良

終日吾が地球上目視する諸件中其化學の範圍に屬するものは中々少なくないのです何心なく其儘に見過ごせば、それしきのことなれども之れを細かに吟味したならば隨分面白き現象もあり意外な變化もあつて容易に說明の致兼ねるといふのもありましようが、私は極く卑近にて日常人々の等閑に付し置くものゝ化學的現象に對して從來親しく先輩者の敎を受け或は書冊により或は多少研究もして知得した端緒を實物につき號を追ふて述べようと思ひますが聊か讀者の參考にも資するを得るあらば望外の幸福と思ひます

窯業と申すと何か竈か七輪か、ストープでも鑄る業の樣に思はれますが、そうではないので單簡に云ばゞ陶土や粘土にて製したるものを强熱して用途多き堅硬なる器物となす業をいふので其生じたるものを普通燒物とか唐津物とか瀨戸物などゝいひます其燒物にも種々あつて磁器

(Porcelein) 石器(Stone ware) 陶器(Fayence) 土器(Larthen ware) 瓦器(Terracotta)と、こう、大別すれば五種で尙其中に種々の燒方或は混合物の異なるにつれ各名前を違はすのです、して、其主成分は何れも硅酸化合物で陶土の成分は硅酸アルミニユムで其純粹なものは鐵分を含むことが少ない故に其色純白なれども劣等なる陶器や土器を製する粘土は鐵分の爲に黃赤色を呈し、又は或る有機物を雜ふるが爲に黝色を呈することがある元來日本の土は甚だ鐵分が多いので、それを除いて純白なる磁器や陶器を作ることは甚だ六ケ敷いのではあるが出來る限りは除いたものを用ゆる、西洋の方では隨分鐵分の少ない或は皆無といつてもよい位の陶土を採取することが出來る、そうであるから舶來の燒物には隨分奇麗な誠に純白なものかある、陶土を强く熱すると硬化すれども熔融せぬ、而して氣孔の澤山あるものとなる此氣孔を塡め且熔ける性を與ふる爲に長石や石灰石を混するです、石灰は硅酸と化合して、硅酸カルシユム、となり長石中の硅酸加里又は硅酸曹達を作用して一種の硝子を化生して其氣孔を塡め、可熔性の物質を作る、又燒物を製するには陶土を水にて捏ね所望の形とするので、あるから、それを燒けば熱の爲に水分を放出するは當然の事ではあるが過度に收縮するの恐れがある、然るに之に硅石や砂なども混すれば自から陶土の粘性を減じて此憂を醫することができる、扨陶土、長石、石灰石、砂は十分に粉碎し水簸して一樣なる混合物となし其れを水にて捏ね所要の形狀を與へ蔭干しとなし乾いた後窯に入れ弱く燒くのです、然かすれば、それで素燒といふものが出來上つたので其物は卽ち素地である、此素燒を行ふにも、火度は、土に依て、異なるのであるけれども、燒方を强くすれば、孔少なくして、水を吸收し難く、隨分强いものが出來る、火度が弱ければ、孔多くして、弱いものとなる、此素燒した素地は、氣孔性で、其質甚だ疏で、あるから、此儘では、とても、需用に供用することが出來ぬから之れに釉藥(Enamel or Glaze)を掛ける、釉藥とは、一種の硝子であつて、それを塗つて再び窯に入れて燒く、之れで初めて完全な燒物が出來上る、一般にざつといへば斯樣な譯で何んでもない、聞いたからに、出來上つた樣に思はれまするが、それが中々六ケ敷いのです、然れば如何なるものが五大別した、各に相當するのであるかといふと、こうです、今夫等を別々に話すれば、磁器は伊摩利燒、瀨戸燒、九谷燒、會津燒、美濃燒、戸部燒、伊豆石燒等にて燒物中最も堅固で透明で金屬性の音を發し、素地、釉藥は同一の火度に於て一同に燒くです、素地は主に色白で多少透明である、其釉藥中には必ず鉛分は入れぬ、其釉藥は多くは無色透明ではあるが半透明着色したものもある、此物は溫度の

變更に依て、其膨脹の度は大差ない、石器は備前燒、萬古燒、トコナベ燒、高飛燒、犬山燒等のもので石の如く堅くて不透明で、其色は酸化鉄の含有度に依て灰、褐、茶、褐色等を呈する萩燒、八代燒等は多くの酸化鉄を含む、之等には釉藥を掛けたるものと掛けざるものとがあつて、アルカリ器、摺鉢、酸器、水瓶、導管等を作る、之等は普通食鹽施釉と稱して食鹽中で行ふのです、陶器は粟田燒、薩摩燒、淡路燒、出雲燒等であつて素地は熔化せざるに依り釉藥と素地とは熔け合はぬからして、其れの壞れ目を見れば釉藥と素地とを區別することが出來る、之等は素地を強く燒き施釉して弱き熱で燒くです、素地は氣孔性て釉藥は硝子質のものであるからして其膨脹の度を異にする、故に陶器には罅と稱して龜烈がある、陶器に用ゆる釉藥は鉛分を含み硼砂をも屢々用ゆる、土器は陶器の一層軟弱なるもので施釉したるあり、なきあり、氣孔性で今戸燒、伏見燒、大樋燒等であつて、此釉藥には多量の鉛分を含有する、瓦器は吸水性を有するあり有せざるあり、之れにも堅軟の違ひがあつて堅きものは石器にも異ならざるものもある、之れは西洋などで隨分階段の手摺等を作るといひます。

磁器の原料は各地之れを異にするとはいへ粘土長石、硅石の適當なる混合物で或は之れに相當する土石の混合物に外ないので、其主成分は、SiO_2, Al_2O_3, (K_2O, Na_2O)等を最要用な原料で、副成分としては CaO, MgO, Fe_2O_3 等であつて、酸化アルミニユムが多量に存すれば不透明ではあるが耐火性の強きものとなり、アルカリの量の多くなるに從ふて火に耐へ難くなれども、透明のものとなるです、九谷燒の色位も隨分黑味を存するものもあるが、あれは矢張り鉄の量に依るのです。

	有田	清水	瀬戸	九谷
SiO_2	76.94	73.66	70.35	71.21
Al_2O_3	18.31	20.00	21.86	22.59
Fe_2O_3	0.78	0.67	0.74	0.64
CaO	0.47	0.62	0.57	0.33
MgO	0.32	0.12	0.24	0.38
K_2O	2.54	2.97	4.13	4.78
Na_2O	0.78	1.84	1.75	

陶土の成分は一寸斯樣な分析結果です、それで一國の土のみを用ゆるかといふに、さうではないです、一般に二三地方の土を混入するのです、九谷位でも五國寺土、花坂土、鍋谷土の三種を混ずるといひます、五國寺土と花坂の土は石英の粒を多量に含む處の白色の粘土ですが、粘土類は總て粘力性即ち造杯の力を有せねばならぬ譯ではあるが花坂の土は極めて造杯力か弱い。

土石には粉碎を要するものと要せざるものとあり、尾張のキブシの土位は粉碎を要せずとのことですが五國寺土、花坂土は粒狀であるからして粉碎の力を要し其粉碎したるものを水簸して細きものを用ゆるです。

杯土は適當なるものがあらば一種の土にて宜しいけれども一般に幾種も混して用ゆるといふのは其性質が、化學的及物理的の反應を有するものにあらざれば不適當である、即ち杯を造り得らるべき粘力、耐火性、色合等に注意を要するからである依て三四種がものは、混合する譯です、其原料を混合するには二法ありて一つは粉碎したるものを初めに混せて水簸するにありてちと不完全なれども簡便である、他は粉碎して水簸したる後混するので其稍や完全なる法です而して九谷燒は五國寺土四分、花坂土五分、鍋谷土二分の割合に混ずる、此中鍋谷土は最多量の鉄分を含有するからして使用し度くもあらざれども、粘力に甚だ富むが故に致方なく二分或は三分位の割合に止めたき混するのであるといふとです。

形を得るには捻製、轆轤製、押型、鑄込どこう四種の手段があつて捻製とは指先にて作り小刀篦等を以て仕上をする、轆轤製には蹴轆轤と手轆轤とがあつて轆轤上で仕上げる、押型とは杯土、金屬、石膏、摸型より押して型を取るものにして型には石膏製のものは最も宜い、鑄込とは隨分復雜なるもので型は矢張り石膏で內空にして其中へ泥漿を入るれば漸々水分は石膏に吸收されると同時に、其內面に薄膜を生ずるに至るので、丁度德利の內部に壁を塗つたと同樣のものとなる、それを取出すのです、然かすると大概一割位は原形より小形のものとなる、而してそれに素燒を行ふのです。

釉藥の目的は品物を美にして汚れ或は酸類等を防ぎ、第四には其物を堅牢となすので、素地の弱きものには釉藥弱しといふ風に、其素地の強弱に依て釉藥にも其度を異にするものにて、硅酸或は硼酸の鹽類であつて一種の硝子質を化生するものです、例へば B_2O_3 等が酸化アルミニユムや石灰や加里等と化合して生ずる、又土中に含有する金屬 ZnO, BaO, PbO, MnO_2 等のものを加ふることがあるです。

釉藥には二種あつて其一つは長石釉藥で、他は石灰釉藥といふ、長石釉藥はアルカリに富でアルミニユムや硅素か多いからして透明の度が弱くて火には強く、一見落付いた色のものとなるです、然し下畫物には透明のものを用ゆる、石灰釉藥の方は火度が弱い、而して熔け易いから其藥の熔けて綠色を呈して溜り居るは隨分見る處で灰汁は日本では柞灰を用ゐ西洋では炭酸石灰を用ゆる、處で其釉藥を施すには先つ其等長

石等の粉を灰汁と共に泥漿となし其中へ素燒したる素地を浸せば水分は吸收されて其表面に硝子の成分なる釉藥の膜が附着する、其儘窯に入れて燒くのです。

此施釉法にも種々あつて撒布法なるありて霧吹にて吹きかける或は篩の如きものにて、ふりかくるなのです亦灌流法なるありてシャク等にて注く法です此法は色藥の塗り掛け或は流す等の時分に用ゐらる、塗抹法なるあり此法は局部の施釉にて刷毛等にて塗る、亦揮發法なるありて之れは磁器等には用ゐませぬ主に石器等には用ゐらるゝ樣です、釉藥には透明不透明及ひ光澤の强弱より品物に依て異なれとも概して透明て光澤あるものは宜い、例へば彫刻畫などあるものは透明なるものを用ゆる裝飾用には罎或は瓶甕と稱して龜烈を生せしむれども食器等には不潔に見ゆるから余り入れない、磁器の釉藥は食器にても剝るとなきも陶器、土器等の釉藥は漸々剝るともある。

それで釉藥と素地との成分の違ひは釉藥の方は鹽基の量が多いのです、故に磁器の釉藥等には柞灰を加へて其中の K_2O, Na_2O. 等にて其鹽基を增す樣にするです。

九谷燒の釉藥の成分は左の樣です

SiO_2	65.71
Al_2O_3	11.43
Fe_2O_3	1.32
CaO	8.66
MgO	0.51
K_2O & Na_2O	3.04

而して其原料は荒谷石、佐野石であつて上等のものは肥前の天草石を用ゆる。

色釉とは無色の釉藥に着色劑を加ふるのです、其着色劑は金屬の鹽類て熔融すると多くは硅酸鹽類となる、其着色劑に依ては無色釉の成分に變更を要する同一の着色劑と雖も其分量、釉藥の强弱、成分、火焔の性質、燒成の火度、冷却の遲速に因て其色あいか違ふ、例へは青磁は酸化鉄を混じたる釉を用ゆる、安價なるものはクロム鹽にて着色する、クロムは青、綠を呈し鉄は褐、黑、黃色を呈するが其火焔の度に依て還元焔となり酸化焔となるので同一の鉄でも青色となるです、辰砂とは銅を以て製するので之れも火焔の如何に因ては褪色する、マンガンは紫褐色を呈する、アンチモンは黃色を呈す、之れも强熱すれば褪色する、淡路燒の黃色は酸化鉄です、コボルトは青色を呈し彼のルリ色の花瓶等は之れです。

結晶釉なるものがある、それは釉藥の熔けたものが冷ゆる時分に結晶するので中々立派なものです、其出來上つたものを結晶燒といひます、西洋の結晶釉は酸化亞鉛の過分を用ゆるもので白色葉狀の結晶である、日本でさするのは釉藥中に二酸化滿俺を加へるので、鳶色で圓く結晶する、中には變化したものもないではない、西洋で結晶燒を發見したのは米國の某陶器會社で陶器にしたのであつて、其後獨逸、佛蘭西等にも續々行ふた、日本では明治二十七八年の頃尾張の瀨戸で二酸化滿俺を用ゐて鳶色の結晶を得たが、其後三十三年に石川縣の工業學校では此滿俺の鳶色の結晶を白色に變更するとを發見してから金澤の二三斯業家にも傳へられて今ては各販賣して居る樣子で、此工業學校での此發見あるや我窯業界に大なる發展力を與へたのである。

窯にも幾種もあつて燒成とか立竈とか、昇竈とかあつて、普通には、松薪を用ゆる、燒物を燒く時の温度は非常に高くて寒暖計等では計るとが非誠に不便である、然るに亦其温度を計るとが非常に大切であるから其時分には色見といふとを行ふのです、其色見にも種々あるが其内で Seger cone. なるものがある、それは矢張り粘土製のものでそれを竈の中に立て置く、普通九谷位を燒くには十二三箇も並立させて其十一番或は十二番の熔融する時を度とする、其時の温度は攝氏で大概千四百度位から千五百度位の處です、であるから其色見の Seger cone は種々あつて九百度で熔けるものとか千度で熔けるものとかといふ樣に、ちやんと製し方即ち各組成分量か異なるのであつて其二三の例を擧げれば

	K_2O	Fe_2O_3	CaO	Al_2O_3	SiO_2	B_2O_3	
0.10番	0.30	0.20	0.70	0.30	3.50	0.50	960°C
0.9番	〃	〃	〃	〃	3.55	0.45	979°C
0.8番	〃	〃	〃	〃	3.56	0.40	998°C
……番	……	……	……	……	……	……	……
0.1番	〃	〃	〃	〃	3.95	0.05	1131°C
1番	〃	〃	〃	〃	4.00	—	1150°C
2番	〃	0.10	〃	0.40	4.00	—	1179°C
3番	〃	0.05	〃	0.45	〃	—	1208°C
4番	〃	—	〃	0.50	〃	—	1237°C
5番	〃	—	〃	0.50	5.00	—	1266°C
6番	〃	—	〃	0.60	6.00	—	1295°C
7番	〃	—	〃	0.70	7.00	—	1324°C
8番	〃	—	〃	0.80	8.00	—	1353°C
etc.							

顏料には Fe_2O_3 や $FeSO_4$ 等を用ひて赤、鳶、黑、黃、鼠等の色を呈せしむる。

重クロム酸加里と硫黃を用ゆれば左の反應起りて綠色となるです。

$$K_2C_2O_7 + 3S = K_2S + 2SO_2 + Cr_2O_3.$$

MnO_2 は能登吳須と稱して天然の滿俺鑛を用ひ藍色を呈せしむる。

Co_2O_3 は唐吳須と稱して青色其他綠色を生せしむる。

CuO之れは硝酸銅を燒き或は硫酸銅より炭酸銅となし後CuOとなり綠、青、赤等の色を出さしむる。

SnO_2之れは錫と硝酸にて製し之れにPbOを加へたるものを Tin ash と稱し白色を呈す、又之れとクロムとを混ずれば紅色を呈せしむるに供する。

Sb_2O_3之れはアンチモニーを硝石て燒いて製し黃色を呈する。

UO_3之れは酸化ユラニユムて黃黑色を呈する。

黃金は Cassius purple を用ひ赤、紫等の色を出す。

骨灰$Ca_3P_2O_8$は白色を呈する。

白土或は白繪土或は磁土或はホドと稱するものあり$Al_2O_3, 2Si(O_2), 2H_2O$の如き成分を有する砂で白色を呈する。

大概之等の顏料を用ひて各種の繪を畫くのです繪には上繪と下繪とがあつて下繪とは素燒のものに畫き、上繪は釉藥の上に畫くのです、下繪は火度高くして其色變じ易く上繪は火度低くして色變し難い、而して上繪の顏料と下繪の顏料とは各其組成分を異にして各特殊の彩色を出さしむるが其組成分量等は今茲には之れを略してきます。

着顏方法には筆畫、振掛、型紙着畫、印刷着畫等の方法がありますが近來渡金術の發達に伴ふて之等にまで滅金することが出來る、之迄滅金卽ち鍍金といつたのは或る金屬面に他の金屬を附着させることであつたが一旦黑鉛の電氣傳導性あることを發見してからは陶器や木の表面でも亦能く鍍金することが出來る樣になつた、一体鍍金するには電氣の作用に由ると然らざるのとの二法があるが他の法はさておいて陶器製のものに鍍金せんには、まづ此器の表面に黑鉛を塗り然る後普通行ふ如くして電氣滅金をするのである、黑鉛を塗るには始め直ちに黑鉛を器物に塗り刷毛て摩擦すれば其表面に光澤が生ずる此光澤の强き程、電導性は强くなる、又他法としては其等の表面に硼酸鉛、銀粉及ひ油の混合液を塗布し之を爐に入れて灼熱し然る後電鍍すべしといふ法もあります、それから亦寫眞術か漸々進步して燒物に迄寫眞畫を燒付くることが出來る、金澤地方位でも二十世紀九谷燒などゝいかめしい揭示をして販賣して居るが九谷燒ばかりが何も二十世紀ではない總べての事が發達進涉した今日に於て彼る事なそは何んでもないことである、それはコロヂオンの膜に鹽化銀を塗布したるものを製する卽ち普通のピー、オー、ピーの紙の代りにコロヂオンを用ひたまでのもの、之れに寫眞の消極板をのせて光線にあてる、丁度適當の摸樣がついた所で之を普通の如く鍍金をする、而してその出來上つたものを磁器なりに附着させて弱く燒くのである、然かすれば丁度普通の寫眞畫を見ると同じく中々立派である、又磁器等の平面板に着色寫眞を燒附る良法もあるが專門にわたるから之れも略することにします。

終に陶磁を接合するには魚膠七十五グレイン及び氷醋酸五グラムを溶解して蜂蜜の固結したる者の如くとなる迄此液を熱し冷却せる后にても膠質を失はないまでとする、其將に使用せんとする時は火の上に置き流動の有樣として陶磁の破片の邊緣に塗布して强く其部分を壓着せば可なりといひます。

先づ一般に云へば斯る如きもので尙詳しくいひ度い事もないではないが專門に涉る恐があるから是位として猶氣の付いた事は後誌に述へやうと思ひます。（完）

劍道大會記事

說く者はこれを能めよ、擊劍を目してたゞ武を練り、体を强壯にする目的のみと云はゞこれ既にこれを說く資格なきものなり、たゞに武を練るを目的とせしは封建の世亂世の時、强壯を目的とすと云ば人或は云はむ豈に劍道に限らむやと。知らずや靈的修養に於ては吾人先づ指を劍道に屈せざる可からざるを、悠々たる態度、凛然たる威風、加ふるに疾風の如き働作、あゝこれ劍道に由て得たる効果に非ずして何ぞ、靈的修養や將に人道の第一義とすべき所而かも冥想的靈的修養より脫し活躍の間、顚沛の間自らこれを敎ふ、乃劍道の要てゝに於てかれてる。

春とは云へ名にし負ふ北國の空の尺と積みし雪にいやが上にも朝よりと降りつる二月十八日、さらでも人をして惆悵の思に堪へざらしむるをあゝこれ何者の響ぞ、蕭條たる天地を動かして堂外に傳はるは。

と見る腕鳴り肉震ふ勇士の面々意氣昇天威儀堂々道場を壓し醒風徐ろに起り殺氣溢々今や龍鬪虎格の一大活劇の起らんとするを。

（胴、面）松川十一郎　（胴、面）松原覺惇
（小手、面）米澤末治　（小手、面）島津良能
（突、胴）森岡二郎　（分、胴）佐藤勝榮太
（小手）大田原清美　（小手）吉田一郎
（小手、胴）舟津頌二　（小手）金子善一
（胴）加藤直二　（胴、胴）小出石太郎
（面、面）渡邊龍　（面、面）糸賀庄三
（分）白嶺慶敏　（小手）飯盛里安
（分面）佐々波與佐二郎　（小手、突）辰己英一
（突）今井淵　（小手）堀內潔
（胴、小手）竹田　（胴、小手）勝田一
（面、面）中倉　（胴、小手）上野
（胴、小手）田中八百八　（突）大脇
（高倉德太郎　（藤田圭太郎
（胴、胴）南愼一郎　（橫面、面）高橋武濟
（若林善作　（胴）增井精三
（小、小）木谷寬治（商）　（胴、面）菅雄次（工）
（大脇　（小手）江原眞伍
（面、面）松本亮正（二中）　（小手、橫面）泉崎三郎
（小手）風間七右衛門　（小手）新田義雄（二中）

分面（梅野　勝治（商））　面、面（大竹國治（二中）　高田　義直）
小手、小手（風間七右衛門　奥泉嘉一郎（一中））　面、小手（山下　謙三（工））
谷中畯太郎）　面（卜部　正一）
小手（舘　昌次（一中））
面、小手（原　康次郎）

長卷之形　小島　鬼男
宗田　儀一

面、小手（敷田雄登記（專））　小手（田中禮次郎（二中））
吉野　勝六　胴、小手（宇野　正雄）
胴、胴（渡邊　杉村　弟三（商））　胴、胴（高澤　冠一（專））
二郎）　胴、胴（南　慎一郎）
胴、突（高木　村田　清久（監））　小手、面（笹川　喜三八（師））
面（矢原　清彦）　胴（岡田　國衛）
分面（田島　準一（專））　分小手面（赤松　祐之）
小手（才記　亘）　面（高橋與三郎（監））
面、面（谷中畯太郎）　廣次（外）
面、面（北川　龍雄（外））　面、胴（渡邊　八郎）
南　慎一郎　面、面（金谷　末松（師））
三也（專）　高木　靖彦
小手、小手（石橋　伍一）　石黑利吉（一中）
關谷　面、小手（渡邊　二郎）
小手、胴（西川作太郎（外））　分面（松尾　保（警））
小手（田島　亘（外））　面、面（眞舘　保）
分小手（松村　伍一（警））　面、面（四谷　谷中畯太郎（監））
小手（關谷　保）　面（田中　三彌（商））
小手、横面（宮本　眞舘）　小手、小手（赤松　祐之）

小手、小手（尾本　岡田　國衛（一中））　面、面（高橋　渉（師））
分　胴（高桑　關谷　伍一（警））　面（眞舘　保）

（警）は警察署、（監）は監獄署、（專）は醫學專門學校、（一中）は第一中學校、（二中）は第二中學校、（師）は師範學校、（工）は工業學校、（商）は商業學校、（外）は外來

糸賀君――飯盛君、飯盛君勢激しく迫りに迫りて切り結びしが互に一勝一敗あり須臾にして糸賀君虚に乘じて面を破りしは見事。松川君――松崎君、松崎君が電火の如き鋒先鋭く松川君劣ずゞ雖も松崎君早くも面を破りつゝいて胴を斬り悠々凱歌を擧く。今川君――佐々波君、今川君はもと早業に妙を得たる人、佐々波君はもと沈着騷がざるを以て名あり、されば此勝敗いかにと人々片唾を呑んで待ちたるに佐々波君先づ敵の面を破り續いて胴を占めんとせしを今川君の鋭き太刀風は空に舞ふかとすれば既に突を得たり、佐々波だぢ〳〵と退りながら參つたと我から叫びしはもとこれ武士のならひかや。それより兩雄苦戰せしが互角の勢如何ともし難く遂に引分となる。辰巳君――堀内君、名に負ふ兩雄の事なれば少しの隙もあらばこそ互に秘術を盡して駈け違ひ馳せ違ひ双合はしゝが辰巳君エイの大喝一聲に敵の虚に乘じ突を得ぬ、堀内君いらつて戰ふ中見ん事敵の小手を切り下げそれはもとこれ天の運勝つも武士の本懷負くるも恥とせずされば〳〵と退く兩士の心根思ひやるだにあはれなり。大脇君――藤田君、いざいざと許り道場の眞中に突立ちたる兩士の威風あたりを拂つて雄々しうぞ見ゆし体も崩さず大刀も亂さず打込む大脇君の早業は小手と胴とを得ぬ。

こゝに吾等は刮目して見るべき一戰場はあらはれたりそは我校勇士の面々と他校及び外來の勇士との決戰これ也、兩々の戰士は氣と勇とに溢れ稜々として自ら道場爲に生き殺氣談笑の間に洩れたるは反て凄まじき光景の前兆を示すかとそゞろ人をして凄愴の思に堪へざらしむ、其戰鬪酣に至ては劍の音高く無聲堂外に溢れ雪降る大空を飛ぶ鳥をして更に其翼をたゝめしむるかと怪ましめ、阻險相用ひ、軍旗陣旆亂離として角逐し叱咤の聲踏み込む足の音、何れか快ならずとせん其勇壯なる光景は懦夫をして起たしめずんば止まざらんとす、今こゝに叙事の筆を執るに當りひたすら其筆の及ばざるを悲しむと同時に紙面の許さゞるを恨むのみ。

○大脇君――木谷君、大脇君は新進の勇士木谷君は商校の驍將、先づ第一の手合は此兩士に由りて行はれたり。大脇君初め大刀を敵の面に向はしゝに敵もさる者受くる大刀を横に拂つて敵を危うし再び返す大刀にて面を得んとするを大脇君がつきと受けとめ互に秘術を盡して此戰いより一上一下虚々實々互に打合ふこと暫ありて辰巳君待てと叫ぶこは卑怯の振舞かなと思ふ間もあらばや、つゞいて眼鏡がと叫ぶ、辰巳君は近眠の人也、衆哄然として笑ひ爲に時ならぬ興を添へき。森田君――大田原君、大田原君は實に其早業に名ある人、其迅速なる振舞は屢々敵をして慴ませしが惜しい哉其身長森岡君に及ばず常に勝手惡き樣にて森岡君に胴と突とをとられしは恨みても尚餘ありとや云はむ。佐藤勝榮太――吉田一郎、前回に比して其技倆身長共に好敵手たるを失はず吉田君の掛聲佐藤君の切上げいみじき事なり吉田君初め敵の面を破りしも佐藤君いかでか敵に勝を得さすべき、面を破りて意氣揚る敵を物ともせず奮然太刀を振つて横に拂へば誤たず敵の横腹したゝかに打ち据え敵をして思はず參つたを叫ばしむ、此戰決せずして分となりしは天晴とぞ思はしめたる。田中君――高倉君、それ高倉君の太刀風は勁烈なり田中君の鋒先は電光の如し互に打合ふ奮擊突戰、勝はいづれと白眞弓秘術を盡して斫り結ぶ内虚を見て進みし田中君の早業は得たりや應と兩度迄も敵の眞額唐竹破。渡邊君――白嶺君、初めての晴の打合なれば互に大事を取つて容易に動かず渡邊君進めば白嶺君退き白嶺君追へば渡邊君避け右に左に横に縱に陽炎の如き兩士の振舞いつ果つべしと思はれぬにあへなくこゝに引分を見しは互の胸の中いかばかりなりけん、勝敗

つ果つべしとも覺ぬざるにやつと叫びし、本谷君の掛聲諸共大脇君の小手切り下げられたりと見る間もわらばこそ再び電光の如く閃めき來り大刀は又もや小手を切り下げられてこゝに勝敗は定まれり。○江原君――菅君、菅君は奇襲を以て敵を惱まさんとし江原君は輕快を以て敵の虛を突かんとす、遠く校友に送られて敵を其居城に襲はんとする菅君の意氣既に天を呑むされば立ち上るや否や疾風の土砂を捲くが如く打込む大刀風物凄く江原君猛なりと雖も面を破らせて敵の氣を稍昂らしめ懈る所を小手を切り下げたるが敵計られたりと思ひ二大刀三大刀合はすよと見る間に江原君無念にも胴を斬らせて退く。○松本君――風間君、松本君は二中校に於ては勇名錚々たる者其技既に本校の知る所、風間君亦體こそ小さけれ攻守縱横飛燕に似たり若しそれこれを見んか風間君は江原君の技と姿勢とに髣髴たりと云ふべし、風間君の小手は見事に敵の氣を挫きしが敵もさる者、追ひつ進め先面を破り引きつゞいて又もや面を破りしが此戰はげに榮にある勝負なりき。○新田君――泉崎君、新田君其名を義雄と云ふ一中校の猛將、泉崎君其名を三郎と云ふこれ亦本校の驍將、味方三人諸共敵の手にむざ〳〵と倒れしと見るや三郎殿はのれ今こそ目にもの見せて敵共の意氣を挫かずんば本校の耻辱何者かこれにすぎむと私かに胸をぞ痛めける、されば三郎殿思ふらくば我が妙は胴を斬り拂ふにありとは人も知りつらむいざさらばこれこそ御見舞として進上仕らめと大刀を合はせば義雄殿も中々さうはさせじと胴を防ぐ事益々固く互に大事を取つて容易に勝敗は決せざりしを泉崎君先づ敵の横面を打つて其意表を衝き更に小手を切つて落しゝには滿場思はず喝采したりき。○梅野君――風間君、梅野君は商校屈指の勇將、風間君先づ其得意の小手を打ち敵のひるむ所を付け込みて再び小手を得んとしゝが敵の大刀風鋭くして胴を斬るやと見れば風間君の大刀既に梅野君の頭上にあり次いで風間君の短所をや見出しけむ梅野君は敵の眞額を唐竹破にしたりしは天晴れなる働舞りやとぞ思はしめたる。○大武君――高田君、高田君小兵なれども迅速なる働舞は風間君と兄たり難く弟たり難しと云ふべく驅け違ひ馳せ違ひ縱横に道場を渡り合ひしが大武君忽ち虛を見出して御面と參るそれより丁々發止一上一下前を拂ひ横を攻め互に勝敗ありていつ果つべしとも見ねざるに大武君かくては果てじと勇を振つて打下す手練早業は又もや敵の面をぞ破つたりける。○ト部君――山下君、と見る場に躍り出でたる四尺に足らぬ小兵ありつゞいて悠々として出でたる雲つく許りの大男あり前者を誰とかなす工校中に其名も響いたる山下君、後者を誰とかなす豫て謙遜家を以て名あるト部君其人なり、山下君身は小さけれど敵の大兵を物ともせず面を打たるゝと見ば直ちに仰ぎて其弱点を巧に防ぐさればト部君も容易に大刀は下さず何となく初より拍子拔けしたる樣なりしはさもありなん豫て沈着なる君は益々沈着に敵小なりとて侮らず互に打合ふ事しばしありてト部君敵の面を得たりしがこれにて稍面目を得たりとする如く敵に小手と面とを得させて退く。○舘君――原君、互に好敵手なり原君の悠然迫らずして其鋒先の鋭きは歎稱に余りありと云ふべし舘君小手を落したれど原君最後の面にて勝を得。○敷田君――吉野君、敷田君は專校の猛將而して吉野君亦をさ〳〵これに劣らず、吉野君は未だ曾て敵に敗を取りし事なき人敏捷なる振舞は愈奇襲的なりしが敷田君しば〳〵この術中に陷り數回虎口を免れたりと雖敷田君も亦責任を負ふて遠く本校に來りしもの豈敵にのみ惱まされんやされば小手と面とを得て悠々と退きし敷田君を見たる吉野君の心中果して如何ばかりなりしぞや。○田中君――宇野君、宇野君は本校斯道に於ける四天王の一也。勝敗久しく決せざりしが宇野君のいらつて打ちし大刀は面を得たりとも敵の胴を拂ひたると同時なりしを以て徒勞に終るやがてヤツと掛けたる田中君の聲に宇野君したゝかに小手を打たれしが返す刀にて敵の小手を得たりしは是をや石火と申すべき。○奥泉君――谷中君、これ亦好個の活劇、谷中君常に曰く大刀の細くして長きはこれを姫樣に參らすべし男兒宜しく太くして短きを用ゆるべしと、かゝる程に一中校の猛將奥泉君はよき敵ぞなれとはやる心を推し沈めてきつと睨んで樣子如何に覗ひしが谷中君の太き腕と太き大刀とを見たる時如何ばかりの思をやしけん、されど奥泉君亦一中校に其人ありと知られたるもの風肅々の歌を吟じつゝ來りしも　何ぞかゝる事に怯むべきにいやつと掛聲物凄く互に打合ふ奮擊突戰に谷中無念にも再度其小手を切らせて引退く。○杉村君――渡邊三郎君、渡邊君はこれ亦本校の四天王の一、杉村君は商校の勇將、杉村君の敏捷なる働振りは人をしてあつと思はしむべく右に左りに馳せ違ひ面を小手をと矢つぎ早に射かゝれど渡邊君びくともすればこそ靜かに打合ふ上段下段、敵の鋒鋩稍亂ると思ふ間もなく胴を二つ重ねたるはゆゝしかりける次第なりけり。○南君――高澤君、蓋し劍士多かる中に南君に至ては其体格遙かに群を拔く者、其一度び掛聲を揚ぐるや猛虎爲に地に伏すと云ふ而かも、君の得意なるは躰當にあり其勢の猛にして當る可からざるは殆ど筆紙の及ぶ所にあらず、本校斯道の花と稱すべし、高澤君は亦醫專校筆頭隨一の强の者、こゝに於てか滿場喝采以て兩士を待つ、初め南君四度び面を打たんとし高澤君よくこれに當るも其危き事甚だしきものあり高澤君更に進んで攻勢を取り胴を拂はんとせしも惜しいかな餘りに下なりしを以て勝を制せず、南入つて突

かんとすれば高澤君直に之に備へて容易に突かせず、恰かも龍虎互に戰ふが如く彼我各其長所と欠点とを相知るに至り今や漸く機熟すと見る間に南君の大刀は見事に胴を拂ひたりかくてつけ入りつけ入り寄せては返し返しては寄せ刀を交ふる事數十度又もや高澤君は胴を切らせたり○村田君――高木君、稍長き奮闘の後高木君の鋭き鋒先は敵の咽喉を貫きし刹那電光石火躍り上つて胴を拂ひしは其間實に瞬時もあらざりき高本君の光榮蓋し思ふべし。○笹川君――岡田君悠々たる笹川君の態度凛然たる其威風既に滿場の觀者の意を動かすに足る、聞く君の一度び劍を用ゐるや其平素の沈着に似ざる者ありと而れどもこれを以て其勝敗の數を知らんとするは未だし我岡田君はかの四天王の一と云はれたる者豈これを意とせんや而かも岡田君亦沈勇を以て名ある者、こゝに於てか衆皆其禮義ある兩武士の振舞を歎稱措かず、思ふに兩君の此試合は今日の晴の勝負と云ふべし、笹川君御免の掛聲諸共面を破るや岡田君咄嗟獅吼して胴を以て之れに報いはつと思ふ間もあらばこそ笹川君の大刀は左方に躍つて小手を制し終んぬこは實に瞬間にして其間將に髪をも容れず刀を握りて勝敗を決せし迄僅々一二分に過ぎず。○矢原君――田島君、矢原君亦醫專校の勇者、幼より劍をとれば爲に寢食をも忘ると云ふ、田島君其体未だ必ずしも大ならず又腕未だ練りたる者と云ひ難きも其迅速なる劍の用ゐ方將や其術の玄妙なる優に矢原君を壓するに足る其烈しく敵を追ひ込むに至ては君が如何ばかり其呼吸を呑むに妙を得たるかは知るべし。矢原君初め面を打ちたるも田島君に胴を打たれしを以て合打となり無念と打込む二大刀は再び敵の面を破りしが田島君いかでか默して止むべき大喝一聲劍は飛んで敵の面を唐竹破りにぞわつたりける。○高橋君――渡邊八郎君、これ亦好個の奮闘なり、高橋君は監獄署に於ては有數の劍士、渡邊君亦四天王の一たり高橋君は其身飛鳥の如きを以て優り渡邊君は悠々迫らざるに顯はる、渡邊君初め胴を拂はれ面を以て報い再び面を以て返し遂に勝を得たるも高橋君の神速なる働振蓋し見るべきものあり殊に其巧に体を開くに於ては稀に見る所。○南君――北川君、諸勇士が奮闘の壯絶なるに動かされけん外來觀者の中に黨を組み來りし者四我勇士に試合を求む、敵に挑まれては退くはもとこれ武士の恥辱とする所敵には何の差異かあらむと評議こゝに一決し南君先づ出でゝ其一北川君に向ふ、北川君は倭少の男而れども多年當地劍客の門を叩いて既に殆ど薀奥に入らんとす、南君は前述の如き大兵肥滿なり觀者の中に一小兒あり隣人に囁いて曰く仁王さんと一寸法師と。豈に圖らんや南君の敵の爲に面をつゞけ樣に打たれむとは。○飯山君――赤松君、飯山君は二中校の勇士其技の妙其術の熟誰かこれに及ばむ而かも赤松君亦我校の一明星其敵を絶えず追ふは蓋し君が技それ神に入るの故か敏捷なる事風間君と相似而かも其敵の虚を探ぐるに至ては最妙を極む。赤松君先つ起つて敵の面を打てりと雖忽ち捲土重來の敵に小手を打たせそれより互に右にかはし左に受け虚々實々互に秘術をつくして戰ひいづれ勝つともわからぬ間に稍ありて引合となりしは兩士の胸の中いかばかりか口惜しかりつらむ思ひやるだにあはれなりけり。○石橋君――關谷君石橋君の技の妙なるは云はずもかな、關谷君の神變不測の技は申すに及ばずされば爾士一禮して劍をとり搆ふるや關谷君は青眼に石橋君は下段に互に呼吸を計りて容易に打たず衆皆片唾を呑んで待つこと久し、關谷君憤を發して驀進すれば必ず勝をこゝに制する人なりと雖も石橋君は洒々たる劍士打合ふ事數度び大風一陣關谷君忽ち敵の急所を襲ひ亂るに乘じて小手を落す、石橋君もさる者絶わず其短所を被はんとせしも慧眼なる敵はやはかこれを看過すべき再び疾風の如く身を開いて又もや石橋君の小手を落しぬあゝこれ何等の壯ぞ石橋君不幸にして失敗せりと雖尚未だ關谷君と角するには餘裕十分ありと云はざる可からず。○金谷君――高木君、金谷君の沈勇はこれを本校に求むとせば必ずや指を眞館君に屈せざる可からず金谷君はもとこれ師範學校の驍將其悠々たる態度而かも凛々たる威風實に敵をしてそゞろに歎稱の聲を絶つ能はざらしむと云ふべしされば其面をつゞいて得たるは全く其沈毅に由ると云ふべく高木君の尚未だかゝる敵に出合ひし事なきの故かたぞくも敵をして名をなさしめしは惜みても余あり。○石黑君――渡邊二郎君、石黑君は第一中學校の猛者渡邊君は本校の四天王の一疾風の如き石黑君の身のこなし悠然たる渡邊君の態度而かも渡邊君よく敵の短所を知りて勝を制したるは稱するに餘ありと云ふべし。○眞館君――松尾君、嘗て眞館君の態度を評する者あり曰く其從容として迫らざる毅然として驚かざる縣下青年劍士の中其比を見ざる者なりと而して君が獨特の技は餘りに大刀を動かさゞるにありこは非常なる經驗と熟練とに由らずんば能はざる所此の故に君に向ふ者必ず先づ氣息喘々として容易に君をして勝たしむる所以にして又以て君が先師石川先生の型をそのまゝ尚金城の下見るを得しむる所以か、而れども松尾君亦警察署中有數の劍客本日來らるべき後藤君の代りとして人撰せられたる者而して老練の士たり勝敗未だ互に豫期すべからざるものあり。態度嚴かに立ち合ひ一刀は一刀より激しく攻めかくる松尾君の鋒先鋭しと雖眞館君よくこれを受け而かも其間攻勢をとりて敵に打擊を企つる事漸く數度而かも敵既に數十回これを挑めり例へばこれ鬼神が鎬を削るそれの如きか長き間の闘に眞館君敵に面を破らせ又面を以て酬ひ

しが勝負いつ果つべうも思はれぬ折こそあれ引分の聲はかゝれり。

それより數番ありて散會を告げたるは五時頃なりき。

今左に進級者の姓名をかゝげむ

眞館保　關谷伍一

右二級へ昇進

赤松祐之　南愼一郎　田島亘

高木清彦　谷中峻太郎

右三級へ昇進

渡邊八郎　岡田國衛　渡邊二郎

岸野正雄　鷲尾正吾　高田義直

原康次郎　泉崎三郎　檜田太市郎

卜部正一　高橋克己　吉野勝六

右四級へ昇進

風間七右衛門　竹田智早　吉田一郎

森岡三郎　二本杉喜八郎　大田原清美

江原眞伍　高倉清太郎　堀内潔

松浦武雄　二上庄七　勝田一

佐々波與佐次郎

右五級へ昇進

柔道部報

◎寒稽古、爾來雪は北陸の名產也、續々たる飛雪を冒して來會し、白絲威の稽古着に身を固めて武を練り、氣を養ふが如きは、多く他に求め得ざる所、亦北辰校の誇となすべき也。吾柔道部の寒稽古は一月十一日より向ふ三十日間施行せられたり、來り會せし者無慮百五拾名、殆んど全校生徒の三分の一を占め、日々の出席者亦七十名に達せり、蓋し壯なりと云ふべし。今年は時習寮の制度變更せし爲め、通學生の便益を計り、早朝の稽古を變じて午後五時よりと定められぬ。殘月を戴いて雪の新道踏み破るの快はなかりしと雖、雪間泄るゝ星の光を吸ふて、金澤街道結氷醋なる所、高屐の音を高く天に響せしも、聊か吾人の佛鬱を散ずるに足りしならむか。皆勤者四拾貳名。

◎柔道部大會、六百の健兒耳を傾けて聞け、吾柔道部は正に南下せむとす！六百の健兒双手を擧げて祝せよ、吾柔道部は正に南下せむとす！

一昨年青木先生を迎へし以來、吾柔道部は未曾有の盛況を極めたり。無聲堂は新に擴張せられ、日として五六十の熱心者を見ざる事なく、陰雨そぼ降る節も、吹雪道を埋むる時も、無聲堂裡未だ嘗て怛々たる地響の音を聞かざる日なき也。半千の健兒諸氏、乞ふ來つて如何に熱血男子の活動せるかを實見せよ、いかに古武士の面影の躍如たるかを實見せよ。いかに日本民族的精華の無聲堂裡に磅礴たるかを實見せよ、いかに櫻花的心髓の無聲堂裡に溢れむとするかを實見せよ。實見して然る後に聞け、吾部南下策のいかに必然的なるかを、いかに深慮的なるかを。更に、いかに雄渾壯大天をも突かむ氣の在つて存するかを。

況んや近來青木先生は三段に進級せられ、小泉中村の二君新に初段に昇り、更に昨秋初段久田君を得たるをや。今や名將猛士、碁羅星の如くに滿ち、到る所脾肉の嘆に堪へざる者の如し。機は到來せり、機は到來せり。而も機の去り易き恰も奔馬の如し、一たび之を逸せむか千載の恨事たらずんばあらず。時は今也、猛進すべし。時は今也、猛進すべし。陽氣發處金石亦透、勇士の向ふ所道自ら生ぜむのみ。南下なる哉、南下なる哉、南下の行は趨勢の向ふ所也。庭球部劍道部等と其の行動を共にする固より可也。只一の猛進あるのみ、南下あるのみ。毫も前後左右を顧慮し、躊躇するの要なし。千仞の巨巖前に聳れば之れを二つに劈いて進め、万重の峻嶽前程を遮るあらば足先に蹴飛して進め。南下なる哉。南下なる哉。大擧第三高校に押寄せて會稽の耻を雪げ、「男子寧ろ格鬪して死すべし。焉んぞ佛鬱として長城を築かむや。」勝敗の如きは天也、吾之れを眼中に置かず。

我柔道部大活劇は此の機運勃々の際に演ぜられぬ。昔シーザの羅馬を統一するや先づゴールを平定したり。我國大陸發展を志すや、先づ露清を擊ち、朝鮮を奪へり。遠交近征は是理の當然にして兵家の一日も忘るべからざる所、吾柔道部も將に圖南の翼を張らむとする者、先づ近隣を征略せざるべからざる也。此の日來り會せる好敵手は合計拾五名、凡て一中、二中、醫專三校の精を萃め、粹を拔きし者、宛然三校對吾部の對校仕合の觀ありき。龍騰虎躍の大活動は今や將に其幕を引かむとす。

時しも二月十一日午前十時、翻々たる旭旗は皚皚たる白雪に映して其色いや赤く、松の枝の小雀は嚶々と叫んで太平の御代を謳ふ。而も無聲堂裡の一角、暗憺の戰雲むく〳〵と渦卷きて、世は凡て悽愴、人は凡て殺伐。

（豐田亮三郎 内股、大外刈、釣込足、同）（秦資彰 大外刈返シ、大外刈、釣込足）（市川濟一 釣込足）（八代春雄）

（米澤千葉 忠怨 小外刈、大外刈）（河野未治）（小幡通德 曉）

（前田碩太郎 入江正太郎）（吉田孫四郎 後藤基幸）（畑野祐之 誠一）

（飯盛里安 巴投、背負投）（赤松 卷込）

（辻廣 ノ、ノ、大外刈、引落）（得能通義 三邊長治）（岡崎一松 五郎）（古屋 ×）

（中川善次郎 カツキ落）（大森敎圓）（笹井幸一郎 足拂）（堀田時次郎）

進級證書及寒稽古皆勤者賞牌授與

（金子善一 体落 護）（今川善次郎 腰投 腕カラミ、同）（谷中峻太郎 俊雄）

×（南丸山 鐵太郎 精一）大外刈、押込（長田朴澤 勝芳 三二）

×専（桑原 渡邊 益方 龍）

講道館投之形

倉内松造、久田丈二、

（藤崎 勝 寛一）足拂（鈴木 馨）

（津金 北澤 哲）釣込、ノ

（小川 竹田 重雄 鉾次郎）×

（北澤 齊田 十二）×一中

（河合 富永 福司 良成）

大外刈、同 押込、体落（吉田 橋本 秀助 信一）二中

（山崎 小野 亮五郎 徹昭）×

（吉澤 淺田 勝六 敬藏）体落

（水島 近岡 政一 源三）ノ、二中

（若井 福岡 孝太郎 賜吉）横捨身

（森岡 白嶺 次郎 慶敏）跳腰

（唐崎 阿波加 有三 忠三郎）巻込二中

（細 城谷 貞松 隣賢）大外刈、内股専

天神直場流初段立合之形

長屋修、小泉禎次

（白上 中出 祐吉 郁三郎）腿投

×

大外刈二中（柳沼 齊田 廣三）大外刈一中

（高橋 永島 克巳 次郎）×一中

（正力 八里 松太郎 喜久男）押込、同一中

（細 本 貞松 正生）×二中

（倉内 佐竹 松造 秀一）腰投 専

×（長屋 内本 修 良吉）腰投 内掛一中

×専（小泉 吉田 禎次 宗一）

短評

豐田――秦、豐田君防戰よく勤めしと雖、未だ秦君の敵にあらず。

米澤――千葉、米澤君の強腰には千葉君得意の腰投も更に効なし。

前田――入江、入江君の熱心と進歩とは大に見るべき者ありと雖、前田君は老練の武者、見る〳〵中に入江君の長大の体は無聲堂裡に斜に倒れぬ、蓋し老練とは進歩の域を越にし者の稱也。

後藤――吉田、吉田君肥滿の躰、後藤君小柄の男子、マサカあの小さい身であの太つた男をと思ひしも暫時、後藤君の卷込は甘ひ者。

飯盛――辻、飯盛君稽古以來日尚ほ淺しと雖、其の熱心や賞すべし、辻君老練の聞ありと雖も道場に現はれし事殆んどなし、勝負いかにと見る程に辻君敵の弱点を狙ひ切に〳〵を取らむとし、飯盛君未だ此の技を習はざるを以て、舉作度を失し恰も巣に懸れる蟬の、今や蜘蛛の毒齒に罹らむとするが如き異觀を呈せり。辻君遂に呵々と笑ひて立ちながら〳〵を取らむとするに至つては、其行動全々非同情的なりき。

赤松――畑野、赤松君玉椿的の躰を以て畑野君の肥大の躰を思ふ存分投げ轉ばしたり。

以上二組の如きは力量に於て大差あり、番組係の御注意を促す。

中川――大森、大森君得意の背負を藏する雖、未だ施すに其機を得ず、突然中川君滿身の總力を双手に込めて敵を擔くや、大森君の躰は宙を飛んで後方六尺の所にありき。

講道館投之形、倉内君と久田君とによりて演ぜられぬ、二君共に我校柔道界の重鎮、其一擧一動、一往一來の凡て合宜にして而も敏活なる、沈着にして而も絶妙なる、見る者をして蕭然襟を正さしめ、斯道妙技の何れに存するやを感受せしめたり。

南――丸山、南君盛に攻勢を取りて巴投を試むること三回に及びしも、丸山君の象大の躰を如何ともすべからず。

渡邊――桑原(專)、共に愼重の態度を持して彼我伯仲の勢なり。揉みに揉うだりけるがやかてはいづれも力萎えて術を施すの活勢見ねずなりて遂に東西に分れたり。

谷中――今川、龍虎相搏つが如し、渡り合ふこと暫しにして谷中君美事腰投げにて一本を占め虚に乘じて手の逆をとつて巧みなる勝を得たり。今川君始よりよく結んで敵手の虚を衝きしも其の効なくあらなくも身は戰塵の裡に沒し去りぬ。惜むべし。

藤崎――鈴木、藤崎君腕を扼して立つ鈴木君堂堂としてこれに對す、一虚一實衝けば脱し、神技を用ゆれば之に應じて其の鉾先を制す、其の輸贏を爭ひ龍奮虎搏の狀は筆も及ばず壯なりと云ふもをろかなり。されば勝負決することなく相分たれんとする時いかなる隙や見られけん鈴木君足拂にて藤崎君を仆す。實にめざましかりける奮闘なりき。

北澤――津金、共に新進の剛士、其の妙技巧術の程ぞ世に知られける有望の偉丈夫、今や晴の勝負に顔うち合せて莞爾たり。正々として進み堂々として對す。優なりや。かたみに頭かき切らんと相絞めあうこと幾度。其の角闘するさまの壯なるに見るもの手に汗して其の勝負如何にと思ふ間に終に北澤君の早業功を奏して敵手はあはれや力つきて冑をぬぎぬ。勇士の心情たもひやられてあはれなり。

水島――近岡(一中)水島君よく戰ひしも近岡君の猛力には如何ともする能はず無念や勝をぞ讓りける。

福間――若井、これ精粹の剛の者秘術を盡して相搏戰す。一上一下虚々實々衆堅唾をのんで見物す。若井君の力やまさりけむ其の横捨身は功を奏してあはれ福間君は沙場に屍を曝しぬ。

齊田――北澤、齊田君は一中の若武者北澤君は我校新鋭の士いづれも一かどの驍將としてゆるされたる剛のものなり。北澤君の敏捷なる術策も齊田君の巧妙なる應術に効を見る能はず容易に勝負つかずやむなく又相會はんの日を約して退きぬ。

富永――河合ともに我校新進中拔群の譽も高き

有數の士たり、今日晴の勝負もさぞやと見物するほどに老練なる富永君は得意とする大外刈につゞけて二本を占めぬ、衆皆富永君よく戰ひ河合君よく應じたるものとほめたゞへぬ。

唐崎――阿波加、阿波加君容易に勝を得たり、唐崎君未だ腕定かならず。

山崎(亮)――小野、手に唾して立ち相對持して戰はざること暫し、小野君急迫して一本を失し一迫また一迫皆不成功に終るに心を焦ひつ憤然として戰ひぬ。山崎君も屢危く見えしが悠乎として其の鋭鋒に衝り巧にのがれて其の身を全うし張りある胸にそりを打つたる樣如何に得意げなるこの勝負も引分に終る。

白上――中出、踵に唾して立つ初めより滑稽。中出先づ進み攻勢をとりて美事大外刈に功を奏し心をごる間に輕妙なる然かも機を見るに敏なる白上君は敵手の虛をついて腰投の早業に功名を博す、これより兩勇愼重にして輕々しく戰はず、揉みつ揉まれつ組んづほづれつ息も絶ねなんばかりにてすさまじく見ゐにける。やがてこれも引分たる。

齊田――柳沼、常に柳沼君は攻擊の態度に出づ其の巴投腰投を試ること數度。一度も功なく終る。これ齊田君の應戰に輕妙なる所によるべし。柳沼君少し焦せ氣味になり勝をいぞき立派なる大外刈に齊田君の短軀は地上に崩れたり。あゝ柳沼君が妙術の果を盡したる活き振のいかにめざましかりよ。また齊田君の輕捷体を轉すこと飛燕の如く敵手をして思ひ迷はしめしぞ神妙なる。

正力――八里、蠻力無双の正力君敵を捕へていつかな動かず下なる八里君はまるで大盤石にをしひしげられたるものゝ如くからくも餘命をたもつこと數時ついに防禦の力及はずまいったの聲をあげて勝は正力君に歸しぬ。正力君日頃の熱心なる練習は今日の勝負にて充分なる効果を收めたりと云ひつ可く以て過日一中に於ける會稽の恥を雪ぐに足らむこれ以て瞑するに足らむ。

倉内――佐竹、彼我施すに術なくしてたゞ敵の虛を窺ふものゝ如し。雌雄なか〳〵に決せず、兩雄肌は玉の汗に、息せまり來て双龍相共に仆れんとする刹那倉内君の試みし腰投に無慘やな佐竹君は体崩れて疊上に息絶えたり。

長屋――内本、長屋君は我校の麒麟兒よと天下に高名の手取なり内本君は一中唯一の驍將これまた早業の妙手たり。始め内本攻勢に出で内股に一本を占めてより勇猛邁進急迫して更に勝を重ねんとす。長屋君も重き手負に物ともせず死を決して應戰す、敵の少しくたぢろく所を窺ひつこの度は長屋君攻勢にうつり行きて忽ち腰投に美事なる勝を得こゝに勝星一つづゝを戴いて『名譽の引分』を見るに至りたり。

小泉――吉田、機を窺ひ虛實を計り、一擧手一投足苟くもせず暫しが間挑み合ひしか終に勝負決せずして中止の令に左右に分れぬ。

あゝこの一戰いかに壯なりしや兩雄の相格鬪する樣は龍驤虎騰の活劇なぞの形容詞にではとても云ひ盡し得ず。衆人ひとしく手に汗を握り聲を飲んで見物す、無聲堂裡眞の無聲然として靜中動勢あつてたゞ二雄相搏つあるのみ。意氣沈喪せるものよ來つてこの眞男子的活劇を見よ。力よわき青顏子よ先づ來つてこの場裡に入れ。かくして今日の仕合も終りぬ苦茗を啜つて彼我一坐して勞を饗ふの快またこの世のものにあらざるべし。(綠生、紫生、)

進級者名簿

右壹級　小泉　禎次　中村　正　久田　丈二
長屋　修　倉内　松造　木村　法惠
右貳級　飯田直二郎　正力松太郎
吉澤謙太郎　柳沼　廣三　白上　佑吉
品川　主計　高橋　克己　小野　徹照
熊田壬午郎　紬　貞松
右三級　富永　福司　河合　良成　唐崎　有三
福間　賭吉　竹田鉾二郎　小川　重雄
若井孝太郎　吉田　秀助　水島　政一
藤崎　勝　津金　馨　北澤　哲
白嶺　慶敏　森岡　二郎　樋口　修輔
右四級
寒稽古皆勤者四十四名

寄贈雜誌（北辰會宛）

麋城文庫　第十八號　大垣中學校友會
商海　第八號　大阪高商校友會
保惠會雜誌　第八十七號　松山中學同會
學友會報　第三十一號　山口高商同會
六稜　第二十六號　北野中學校友會
校友會雜誌　第七號　岡山醫專校同會
無盡燈　第十一卷一ノ三　同社
校友會雜誌　自第百五十一號至第百五十四號　一高同會
尙志會雜誌　第六十八號第六十九號　二高同會
無我之愛　自第十三號至第十八號　無我苑
十全會雜誌　第三十九號　金澤醫專校同會
校友會雜誌　第七號　德山中學同會
校友會雜誌　第卅九號　開成中學同會
躬行會叢誌　第二十四號第二十五號第六十七號　躬行會
輔仁會雜誌　第十七號第十八號　學習院同會
一橋會雜誌　東京高商校同會

學友會雜誌　第十六號　石川師範校同會
學友會雜誌　第十九號　麻布中學同會
校友會々誌　第三號　高岡中學校同會
明倫　第七號　明倫中學校友會
同窓會雜誌　第十六號　愛知醫專校同會
鯉城　第十四號　廣島中學校友會
學友會雜誌　第六號　柏原中學校同會
校友會々誌　第四號　石川第二中學同會
龍南會雜誌　第百十四號　五高同會
學友會雜誌　第六號　七高同會
校友會雜誌　第十九號　千葉中學校同會
華陽　第廿九號　岐阜中學校友會
修養會雜誌　第十號　高田中學校同會
有斐　第六號　斐太中學校友會
阪東太郎　第四十三號　前橋中學校友會
校友會誌　第八號　東京高師同會
校友會々誌　第十號　六高同會
同窓會報告書　第廿四號　安積中學校同會
學友會誌　第四號　魚津中學校同會
矯々會雜誌　第八十九號　福岡中學校同會
校友會雜誌　第一號　石川四中校同會
城北　第四十六號　東京四中校友會
嶽水會雜誌　第廿二號　三高同會
校友　第十六號　松本中學校友會
校友會々報　第九號　石川第一校友會

告

今回は前號に倍して非常なる投稿に接し編輯室玉付積んで山を爲すの勢にて委員等も大に歡喜仕り、いかにかして其全部掲げ盡さんと限りある頁數のやり繰り仕り候て、力の盡せるかぎり焦慮致し候へ共一誌の紙數の制限を何如にせん、やむなくもほいなくも「附錄」欄内に數章を廻し、また本文の方にても章の全部を半減いたし候も二つ三つ有之これ等は皆やむなき次第に出で候事にて決して冷遇虐待などの考より出でしものにては夢これなく候間右の趣万々御含み偏に御宥恕願ひたくこゝに一同謹んで御詫の辭申述べ候也

委員一同

投書心得

一投書は本會原稿用紙に限る
一長文と雖も全文を寄贈せざれは掲載せず
一雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
一如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載せず

明治三十九年三月二十一日印刷
明治三十九年三月二十五日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地
印刷者　生沼倍男　同縣同市穴水町二番丁廿九番地
印刷所　明治印刷株式會社　同縣同市高岡町九十番地
發行所　第四高等學校北辰會